

ひ ば る い せ き
桧 原 遺 跡

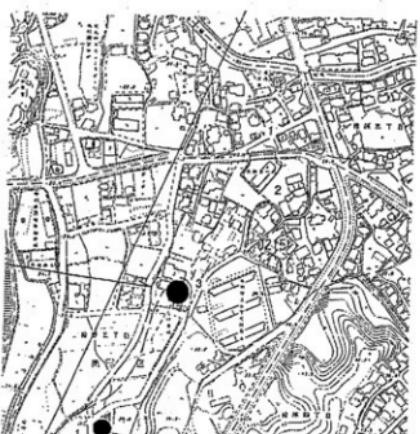
-桧原古墳群第1次・桧原遺跡第3次調査報告書-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第540集

1997

福岡市教育委員会

第540集 桧原遺跡 一桧原古墳群第1次・桧原遺跡第3次調査報告書一

誤	正
P 78 16行目 行えるのと思われる	行えるものと思われる
P 78 参考文献に次の文献が欠落していました。 伊藤実 1993 「日本古代の鋸」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』潮見浩先生退官記 念事業会	
P 8 Fig. 3 図中の1、2を入れ換える。図上位にAを入れる。	
	 A 入替え
P 10 2行目 遺跡分布調査 <u>次</u> にも	遺跡分布調査 <u>時</u> にも

ひ
ばる
い
せき

桧 原 遺 跡

-桧原古墳群第1次・桧原遺跡第3次調査報告書-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第540集



遺跡調査番号9234
遺跡略号 HBK-1
HBR-3

1997

福岡市教育委員会

序

九州の北岸に位置する福岡市域は、その地理的条件から古代より大陸や朝鮮半島からさまざまな文化を受容し栄えてきました。市内には数多くの遺跡が分布しています。

福岡市ではさまざまな開発によって失われていく自然や文化財について事前の調査を行い、その保存策に努めています。

本書は市内南区に計画された南部運動公園建設とともに埋蔵文化財の発掘調査報告書です。南部運動公園は福岡市の南部地域のスポーツレクリエーション活動の拠点となる運動公園として、また当市南部地域の防災公園として計画されたものです。こうした整備は市民にとって緊急を要する課題であります。

この調査によって古墳時代の集落や墳墓が明かとなりました。また、旧石器時代や縄文時代の出土品もあり、この地に住んだ先人達の生活の一端を垣間みることが出来ました。こうした成果は、本地域の歴史や文化を語る上で重要な手がかりとなるものです。遺跡は公園計画によって失われることとなりましたが、今後はこの成果を市民文化や社会教育の糧として生かしていくかが我々に与えられた課題とも言えます。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。

1997年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊

例言

1、本書は、福岡市都市整備局公園建設課による南部運動公園建設にともない、福岡市教育委員会が1992年9月21日～1993年1月30日に発掘を実施した、松原古墳群第1次発掘調査と松原遺跡群第3次発掘調査の報告書である。

2、本書使用の遺構実測図は、井英明、八丁山香、菅波正人、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏がおこなった。

3、本書使用の遺物実測図は立石真二、森部順子、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏が行った。

4、本書使用の写真は吉留秀敏が撮影した。なお、遺跡の航空写真は南空中写真企画に依頼した。

5、本書使用の標高は海拔高であり、方位は磁北である。本地域における真北との偏差は $6^{\circ} 21'$ である。

6、本書の執筆は第3章1節の金属器類と第4章3を比佐陽一郎、第4章1を本田光子、第4章2を田中良之、金宰賢がおこない、その他の執筆と編集は吉留秀敏がおこなった。

7、金属器の保存処理は、福岡市埋蔵文化財センターにておこなった。

8、本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される。

松原古墳群第1次調査				
遺跡略号	H BK - 1		遺跡調査番号	9234
調査地地籍	福岡市南区松原五丁目		分布地図番号	64-2389 (東油山)
遺跡登録番号	022390,022391	開発面積	166,000m ²	調査対象面積
調査期間	1992年09月21日～1993年01月30日		調査面積	1,500m ²

松原遺跡群第3次調査				
遺跡略号	H BR - 3		遺跡調査番号	9234
調査地地籍	福岡市南区大字松原		分布地図番号	64-0215 (東油山)
遺跡登録番号	020215	開発面積	166,000m ²	調査対象面積
調査期間	1992年09月21日～1993年01月30日		調査面積	1,200m ²

本文目次

第1章 はじめに	1
1、調査に至る経過	1
2、調査の経過	1
3、調査組織	2
第2章 地理的歴史的環境	3
1、地理的環境	3
2、歴史的環境	3
3、桧原遺跡群・桧原古墳群の調査	9
第3章 調査の記録	11
第1節 桧原古墳群	11
1、調査の概要	11
2、1号墳	11
3、2号墳	22
4、小結	51
第2節 桧原遺跡群第3次調査	52
1、調査の概要	52
2、基本的層序	53
3、竪穴住居	54
4、掘立柱建物	59
5、土壤	62
6、溝	66
7、水田	66
8、その他の遺構と遺物	69
9、小結	69
第4章 調査資料の分析、検討	71
1、桧原2号墳出土の赤色顔料について	71
2、桧原1号墳出土の人骨について	72
3、桧原古墳群出土金属器の検討	76
第5章 まとめ	79
遺物観察表	85
図版	91

挿図目次

Fig.1 桧原遺跡群の位置(1)	4
Fig.2 桧原遺跡群の位置(2)	6
Fig.3 桧原遺跡群・古墳群の周辺地形図	8
Fig.4 桧原川流域の地形略図と遺跡の位置	9

Fig.5	桧原5号墳の採集遺物	10
Fig.6	桧原1・2号墳地形図	12
Fig.7	桧原1号墳墳丘測量図	13
Fig.8	桧原1号墳墳丘土層断面図	14
Fig.9	桧原1号墳主体部・前庭部	15
Fig.10	桧原1号墳石室内遺物出土状況	16
Fig.11	桧原1号墳墳丘内遺物出土状況	16
Fig.12	桧原1号墳出土遺物(1)須恵器・土師器	17
Fig.13	桧原1号墳出土遺物(2)玉類	19
Fig.14	桧原1号墳出土遺物(3)金属器1	20
Fig.15	桧原1号墳出土遺物(4)金属器2	21
Fig.16	桧原2号墳墳丘測量図	23
Fig.17	桧原2号墳墳丘西側土層断面図	24
Fig.18	桧原2号墳墳丘東側土層断面図	24
Fig.19	桧原2号墳墳丘北側土層断面図	25
Fig.20	桧原2号墳北側・くびれ部土層断面図	25
Fig.21	桧原2号墳地山整形面測量図	26
Fig.22	桧原2号墳墳丘造成前復元図	27
Fig.23	桧原2号墳石室実測図	28
Fig.24	桧原2号墳閉塞施設実測図	29
Fig.25	桧原2号墳墓道～前庭部土層断面図	30
Fig.26	桧原2号墳石室内遺物出土状況	31
Fig.27	桧原2号墳墳丘・前庭部遺物出土状況	32
Fig.28	桧原2号墳出土遺物(1)石室内須恵器	34
Fig.29	桧原2号墳出土遺物(2)墳丘A群須恵器	35
Fig.30	桧原2号墳出土遺物(3)墳丘B群須恵器	36
Fig.31	桧原2号墳出土遺物(4)墳丘C群須恵器	37
Fig.32	桧原2号墳出土遺物(5)墓道・前庭部須恵器他	38
Fig.33	桧原2号墳出土遺物(6)玉・金属器1	43
Fig.34	桧原2号墳出土遺物(7)金属器2	44
Fig.35	桧原2号墳出土遺物(8)金属器3	45
Fig.36	桧原2号墳出土遺物(9)金属器4	46
Fig.37	桧原2号墳出土遺物(10)金属器5	47
Fig.38	桧原2号墳出土遺物(11)金属器6	48
Fig.39	桧原2号墳出土遺物(12)金属器7	49
Fig.40	桧原2号墳出土遺物(13)金属器8	50
Fig.41	桧原3次調査周辺地形図	52
Fig.42	桧原3次調査地層概念図	53
Fig.43	桧原3次調査断面土層図	53
Fig.44	桧原3次調査構造配置図	54
Fig.45	堅穴住居SC01	55

Fig.46	堅穴住居SC02,03	56
Fig.47	堅穴住居SC04	57
Fig.48	堅穴住居SC11,53	58
Fig.49	堅穴住居SC18	59
Fig.50	掘立柱建物	60
Fig.51	土壤	61
Fig.52	溝	62
Fig.53	松原 3次調査出土遺物(1)住居	63
Fig.54	松原 3次調査出土遺物(2)住居・土壤	64
Fig.55	松原 3次調査出土遺物(3)包含層	65
Fig.56	松原 3次調査出土遺物(4)包含層	66
Fig.57	松原 3次調査出土遺物(5)そのほかの遺物	67
Fig.58	松原 3次調査出土遺物(6)そのほかの遺物	68
Fig.59	松原 1号墳人骨出土状態	74
Fig.60	長野県天白古墳出土巒	77
Fig.61	松原 2号墳墳丘復元図	80
Fig.62	桶井川流域の前方後円(方)墳	81
Fig.63	桶井川流域の主要古墳分布図	83
Fig.64	桶井川流域の主要古墳系譜図	84

図版目次

PL.0松原 1号墳出土人骨	PL.4松原 1号墳
1.	頭蓋骨片	1.	石室全景（南から）
2.	大腿骨片	2.	地山整形面状況（南から）
PL.1遺跡遠景	3.	石室墓壙（北から）
1.	松原遺跡遠景（油山中腹から）	4.	墳丘内遺物出土状況（須恵器）
2.	松原遺跡 3次調査区遠景（西から）	5.	石室内遺物出土状況（釧、鑑）
PL.2松原古墳群近景	6.	石室内遺物出土状況（耳環、玉）
1.	1号墳調査前近景（南から）	7.	石室内遺物出土状況（人骨）
2.	1号墳調査前近景（北から）	PL.5松原 2号墳
3.	2号墳調査前近景（東から）	1.	くびれ部調査状況（北から）
4.	1号墳から2号墳を見る	2.	墳丘横軸断面（南から）
5.	2号墳から1号墳を見る	3.	墳丘西側断面（南から）
PL.3松原 1号墳	4.	墳丘東側断面（南から）
1.	墳丘西側断面（北から）	5.	前庭～墓道縦断面（南西から）
2.	墳丘北側断面（南東から）	6.	墓道横断面（南から）
3.	墓道土層断面（南から）		
4.	北側墳丘断面（北東から）		
5.	前庭～墓道検出状態（南から）		

PL.6.....	桧原 2 号墳	PL.10.....	桧原 3 次
1.石室全景（北から）		1.掘立柱建物SB19（北西から）	
2.石室全景（南から）		2.掘立柱建物SB20（南から）	
3.石室東側壁（北東から）		3.溝SD10全体（北から）	
4.石室西側壁（南東から）		4.掘立柱建物SB21（東から）	
5.羨道部（上から）		5.溝SD14断面（南東から）	
6.羨道部前面（南から）		6.土製人形出土状態 7.土製人形	
PL.7.....	桧原 2 号墳	PL.11.....	桧原 3 次
1.閉塞施設（南から）		1.土壙SK05断面（北から）	
2.閉塞施設（上から）		2.土壙SK05（南から）	
3.旧地表面SX01（東から）		3.土壙SK06断面（南東から）	
4.遺物 A 群出土状態（南から）		4.土壙SK06（東から）	
5.遺物 B 群出土状態（南から）		5.土壙SK07断面（北から）	
6.遺物 C 群出土状態（東から）		6.土壙SK07（北東から）	
PL.8.....	桧原 3 次	7.土壙SK08断面（南東から）	
1.調査区全景（北から）		8.土壙SK08（北東から）	
2.調査区全景（南から）		9.土壙SK09断面（北から）	
3.調査区北側遺構（北から）		10.土壙SK09（南から）	
4.掘立柱建物検出状態（北東から）		11.土壙SK12断面（東から）	
5.調査区南側水田遺構（西から）		12.土壙SK12（東から）	
6.水田遺構（南から）		PL.12…桧原 5、1、2 号墳出土須恵器(1)	
PL.9.....	桧原 3 次	PL.13…桧原 2 号墳出土須恵器(2)	
1.竪穴住居跡SC01（東から）		PL.14…桧原 2 号墳(3)、桧原 3 次調査出土須恵器・土師器	
2.竪穴住居跡SC02（北から）		PL.15…桧原 1、2 号墳、桧原 3 次調査その他出土遺物	
3.竪穴住居跡SC03（北西から）		PL.16…桧原 1、2 号墳出土金属器(1)	
4.竪穴住居跡SC04（東から）		PL.17…桧原 2 号墳出土金属器(2)	
5.竪穴住居跡SC11（南から）		PL.18…桧原 2 号墳出土金属器(3)	
6.竪穴住居跡SC18（東から）			

表目次

Tab.1 福岡市内出土錫製装身具一覧表	76
Tab.2 5、1号墳出土須恵器観察表	85
Tab.3 2号墳出土須恵器観察表	85~86
Tab.4 3次調査出土須恵器・土師器観察表	86~87
Tab.5 1号墳出土玉類観察表	88~89
Tab.6 2号墳出土玉類観察表	89
Tab.7 古墳出土装身具計測表	89
Tab.8 古墳出土武器類計測表（弓金具）	89
Tab.9 古墳出土武器類一覧表（鉄鎌）	90

第1章 はじめに

1、調査に至る経過

1992年に福岡市都市整備局公園建設課（以下、甲とする）から、福岡市南区松原五丁目～大字松原における南部運動公園建設に関する埋蔵文化財事前審査願申請がなされた。総事業面積は16.6haである。南部運動公園は福岡市の南部地域のスポーツレクリエーション活動の拠点となる運動公園とし、併せて建設省“防災緑地緊急整備事業”を一部導入して計画されたものである。環境や隣接する花畠園芸公園とあわせて31.1haの面積は本市南部地域の防災公園として位置つけられたものである。園内の野球場は鴻臚館跡史跡整備とともにう平和台球場に代わる市民球場の役割も担つたものであり、1993年度一部開園をめざしたものである。

当初、事業予定地は福岡市遺跡分布地図には遺跡の記載のない範囲であったが、福岡市教育委員会（以下、乙とする）では申請地が松原遺跡群の隣接地にあたり、踏査の結果古墳らしき地形の高まりが存在することから、事前の埋蔵文化財の確認調査の必要を認めた。そのため1991年から1992年に数次の試掘調査を実施した。その結果、五丁目では2基の古墳が確認され、大字松原では古墳時代の集落跡が確認された。この結果を受けて、甲、乙は文化財保護についての協議をおこなった。しかし、造成工事の計画上、先の2カ所の遺跡の保存は困難であり、発掘調査をおこなって記録にとどめることになった。

甲乙は協議を重ね、調査日程などについて打ち合わせをおこない、甲乙両者は発掘調査委託契約を締結した。1992年度に2カ所の発掘調査をおこなうことになった。調査は公園建設の期間、工程上、造成工事と並行して実施することになった。なお、整理作業はそのほかの報告書作成との調整のために1996年度におこなうことになった。

2、調査の経過

発掘調査は1992年9月21日～1993年1月30日におこなった。古墳群と集落跡は直線で約500m離れており、その間に丘陵や住宅があるために見通すことが出来ない。担当する一人の調査員で同時に発掘調査を進めることは作業の安全管理上、不可能であった。したがって、古墳群と集落跡を分けて調査することとした。その調査工程は併行する造成計画との調整をおこない、先に古墳群の調査を実施し、その後集落跡の調査を進めることになった。

古墳群の調査は2基の古墳であり、2基を同時に並行しながら調査することとした。まず、造成工事側に伐採された樹木等の除去、墳丘の清掃を人力によりおこなった。次に墳丘測量をおこない、予測される墳丘規模、関連遺構の範囲の予測を急いだ。次に周溝ならびに周溝外域は、調査期間が少ないのでやむを得ず土層ベルトを残し重機により表土だけは除去した。なお、2号墳では墳丘を壊している道路の路面や基礎の砂利層も除去した。

2基の古墳は何れも墳丘の中心部に主体部の破壊にともなうと見られる擾乱層があった。この擾乱層の清掃を行い、石室石材の一部を確認した。石室は何れも上部が破壊されていることが判明した。併せて主体部は横穴式石室であること、その主軸はおよそ南北であり、何れも南に開口していることがわかった。この段階で石室主軸を延長し、墳丘、周溝を貫く調査主軸を設定した。墳丘では主軸に沿ってトレンチを設け、墳丘盛り土の記録をおこない、石室開口部分では墓道、前庭部の埋め土、覆土と遺物の検出、記録をおこなった。その後、石室床面の掘り下げ、清掃をおこない、副葬、供獻

遺物の検出をした。この時点で1号墳の床面の人骨の集積が遺存していることが確認された。人骨については九州大学基層構造講座と福岡市埋蔵文化財センターの協力を得て、調査、取り上げをおこなった。墳丘は土層ベルトを残し、墳丘上や墳丘内の遺物の記録、取り上げを進めながら人力により掘り下げをおこなった。旧地表もしくは地山整形面で清掃し、関連遺構の検出、測量をおこなった。こうした墳丘の調査と並行しながら石室の撮影、実測をおこなった。土層ベルトの撮影後、これを除去し、石室墓塚の調査をし、古墳の調査を終了した。最後に墳丘下の遺構、遺物の有無を確認するためにトレチを設け、掘り下げをおこなったが、その検出はなかった。

集落跡の調査は、まず重機によって表土、擾乱部分の除去をおこない、次に人力により遺構の検出、調査を進めた。対象地は近年までの水田化、資材置き場利用のために数回の削平や多くの搅乱がみられた。また、油山山間部の谷間のために降雪と強風に悩まされた。住居跡、掘立柱建物跡、土壤などについての撮影、実測、遺物の取り上げなどをおこなった。なお、これらの遺構の基盤とみていた砂層、砂疊層中から黒耀石などの剥片が出上ることから、遺構の調査終了後、これを掘り下げ調査した。その結果、遺構はなく旧石器時代、縄文時代の石器類が散漫に出上したのみであった。これらの遺物は何れも二次的な包含状態を呈し、谷の斜面上方から流れ込んだものと判断した。

調査は1993年1月31日に全作業を終了した。

3、調査組織

遺跡の調査にあたって以下の組織を準備した。また、調査、整理作業過程において各方面的協力を頂いた。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第二係

教育長 尾花 剛（当時） 部長 後藤 直

課長 折尾 学（当時） 係長 山崎純男（当時）

調査庶務：中山昭則、入江幸男、吉田麻由美（当時）、内野保基、西田結香

事前審査：井沢洋一、吉武学

調査担当：吉留秀敏

調査補助：井英明（現古賀市教育委員会）

調査作業：岩隈史郎、上野龍夫、篠崎伝三郎、柴田博、芹野謙蔵、大長正弘、徳永静雄、

別府俊美、松井一美、松川昭義、斎藤武雄、小早川邦雄、亀井好明、城戸健、

小原康義、藤野雅基、篠塚ひろ子、藤野信子、古賀典子、永松伊都子、堀川ヒロ子、

中村フミ子、萬スミヨ

整理作業：日永田能成、尾崎君枝、甲斐田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂環、森部純子

調査・整理協力：菅波正人、屋山洋、久住猛雄、立石真二

調査整理にあたって下記の方々・機関のご指導や協力を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略、順不同）

亀井明徳、田中良之、武末純一、田崎博之、溝口孝司、金宰賢、杉山富雄、本田光子、山村信榮、城戸康利、大神吉助、千手重之、株式会社山本土木、トーケン工業株式会社、福岡造園株式会社

第2章 地理的歴史的環境

1、地理的環境

玄海灘に面する北部九州は、背振・三郡山地北縁の沿岸に小平野が点在している。博多湾に面する福岡、早良両平野もまたこうした小平野の一つである。両平野の間には背振山地から延びる油山山塊がある。この油山の北麓地域は早良花崗岩を基盤とする丘陵地帯であり、最高所は鴻ノ巣山(100.5m)である。この丘陵は樋井川を中心とする小河川によって開析され、南北に長い樹枝状の丘陵と深い谷状の沖積地を形成している。小河川と沖積地は東から樋井川本流、一本松川、片江川、七隈川の4グループに区分される。またその河川に挟まれた丘陵は東から長尾丘陵、片江丘陵、金山・茶山丘陵がある。また、樋井川本流の東側は平尾丘陵、七隈川の西側は飯倉・千隈丘陵と呼ばれている。こうした地形区分に遺跡の分布や近年までの村落、水田耕地などの発達は明確に対応している。

現在はこの樋井川流域のはとんどが福岡市城南区であり、樋井川上流にあたる桧原、柏原地域は同南区、飯倉・千隈丘陵上から西が同早良区に行政区画されている。なお、市制以前は早良郡樋井川村であった。遡って律令期には「和名類聚抄」による早良郡毗伊郷がこの旧樋井川村に対応し、同能角斗郷は七隈川以西にあるものと考えられている(Fig. 1, 2)。

ここに報告する桧原遺跡群は、樋井川本流から派生した小支流の桧原川沿いにある。遺跡は桧原川によって形成された谷の最奥部の東岸に所在している。古墳群は谷に突出した小丘陵上にあり、標高は30~40mで、沖積地との比高差は最大10m程度である。集落跡は谷奥部の丘陵斜面にあり、小規模な段丘状の地形をなしている(Fig. 3, 4)。桧原川添いの断面でみると古墳群の前面の沖積地と集落跡前面の沖積地には段差があり、形成面が異なるものと見られた。

本地域は最近になって福岡都市圏の拡大とともに多くの住宅地化が急速に進んでいる。しかし、ごく近年まで農業を主体とし、林業をも含む村落地帯であった。

遺跡が所在するこの樋井川上流域は沖積地の発達が乏しく、近年までの水田は谷部と斜面を造成した階段状の耕地からなっている。この沖積地は小河川を集めた樋井川本流部でもさほど広がらず、幅数百m程度である。また、河川の水量も乏しく、谷奥には灌漑用溜池の造成が多くみられる。このように、水田耕地の開発には自ずと限界があり、一貫して地域的な発展を拒んでいたといえよう。

2、歴史的環境

ここで桧原遺跡群をとりまく油山の北麓、樋井川流域について考古学上の歴史的な変遷を時代ごとに概観したい。ただし、本地域はこれまでけっして十分な調査が進められているとは言い難い。それでも旧石器時代から中世、近世に至るまでの資料が断片的に見いだされている。以下では時代ごとに記述する。

1. 旧石器時代

樋井川流域における旧石器時代の資料は少ない。調査でも断片的な出土に留まる。カルメル修道院内遺跡の弥生時代木棺墓の埋土中や、神松寺遺跡からは三稜尖頭器が出土している。柏原C, K, N遺跡ではナイフ形石器、尖頭器、細石器などが出土している。また、千隈熊添遺跡や飯倉E, F遺跡でもナイフ形石器類が出土している。この他に表面採集による遺物の発見があり、神松寺遺跡から有舌尖頭器片が、五ヶ村池でナイフ形石器が採集されている。後期旧石器段階においてこの地域一帯は狩猟採集活動の場となっていたことがわかる。



Fig.1 植原遺跡群の位置 (1) (1.植原遺跡 2.柏原遺跡 3.鴻臚館跡 4.東光寺剣塚古墳
5.那珂八幡古墳 6.老司古墳 7.穴銛音古墳)

2.縄文時代

縄文時代草創期～早期には柏原A、E、F、K遺跡で住居跡群や集石炉が検出され、柏原式土器、撲糸文土器片、条痕文土器、押形文土器片や石鏃、石槍、石匙など多くの石器、土器類などが出土している。この他に五ヶ村池、熊添池、箱ノ池遺跡などで押型文土器片や石鏃などの当該期の採集遺物がある。この時期には定住化が進み、柏原遺跡を拠点とした樋井川上流域の集団領域が成立したと予測される。

同前期～中期の資料は少ない。前期では五ヶ村池と七隈古墳群8号墳墳丘から曾畠式土器片や石鏃が、大牟田遺跡で条痕文土器片（轟式系か）、扶状耳飾り等が採集されている。また柏原遺跡D地区で轟B式土器、石匙が出土している。中期の遺物は下流の大濠公園内から阿高式系土器が採集されているのみである。

後期から晩期にかけても資料は多くないが、笠置遺跡で晩期前半の条痕文土器が出土している。また柏原A遺跡では晩期中葉土器片や偏平打製石斧などが出土している。調査を担当した山崎純男氏はこの時期に山麓斜面を利用した焼き畑などの存在を予測している。

縄文時代晩期後半から弥生時代前期前半は本地域では明確な資料はない。この時期には早良、福岡平野の沖積地に水稻耕作を基盤とした集落が多数現れている。

3.弥生時代

弥生時代前期後半(末)から中期初頭になると樋井川下流域の田島オゴモリ遺跡、中流域の神松寺、淨泉寺、片江、長尾などに集落が現れる。淨泉寺遺跡では70基以上の袋状堅穴が検出されている。同時期の墳墓は淨泉寺やカルメル修道院内に遺跡があり、木棺や甕棺が検出されている。カルメル修道院内では副葬品として錫製の鉗が出土している。袋状堅穴（貯藏穴）や石包丁などの農耕関連資料の存在から、この時期に水田開発が急速に進んだものと考えられる。

弥生時代中期中～末頃になると遺跡は上流や、支流の谷部まで多数認められる。また下流の別府にも集落が形成される。この時期には沖積地の広範囲が水田開発されたとみられる。片江、宝台、長尾遺跡などはその中心的な集落と言える。この時期の埋葬は甕棺墓が中心となる。宝台遺跡では集落に隣接して甕棺墓群がある。この時期に集落から離れて特定の集団墓地も現れる。丸尾台遺跡では丘陵頂部に特異な墳墓がある。造成工事中壁面から崩落した甕棺から前漢鏡3面、刀子、朱塊が出土している。また、約10m離れた別の甕棺からも素環頭刀子が出土している。なお、この丸尾台遺跡について、報告の記載と記録写真から同時期の墳丘墓であろうと推定される（註）。

弥生時代後期の集落は小笠、淨泉寺、神松寺、飯倉C、D、Fなどの遺跡がある。小笠遺跡第2次調査や飯倉C遺跡では丘陵斜面に溝が検出され、多量の土器類などが出土している。集落を囲む周濠の可能性がある。また、飯倉D遺跡では住居内埋土中から銅鏡鋳型が出土し注目される。墳墓は後期前半では小笠遺跡第1次調査で丘陵先端部に土壤墓、石蓋土壤墓群が検出され、鐵鏃などの副葬品があった。飯倉F遺跡では甕棺墓があった。また後期後半では飯倉G遺跡の木棺墓から小型仿製鏡や刀子が出土している。小笠遺跡や飯倉G遺跡は何れも群集墓であり、特殊な墳墓を形成していない。これまでの調査では、いわゆる墳丘墓は未確認である。下長尾八六宮石棺や、鏡一面を出土したと伝える上長尾御子神社遺跡の箱式石棺墓、また断面採集で漢式三稜鏡が採集されたクエゾノ遺跡の木棺墓などはこの時期の特定集団(個人)の墳墓であろうと考えられる。なお、干隈古墳の墳丘下で30基余りの（木蓋）土壤墓が密集中して検出された。土壤墓には副葬品はなく、3基に赤色顔料（朱）の散布があった。土壤墓の分布状態からみて、これらは何らかの区画墓であった可能性が高い。その時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と推定されている。

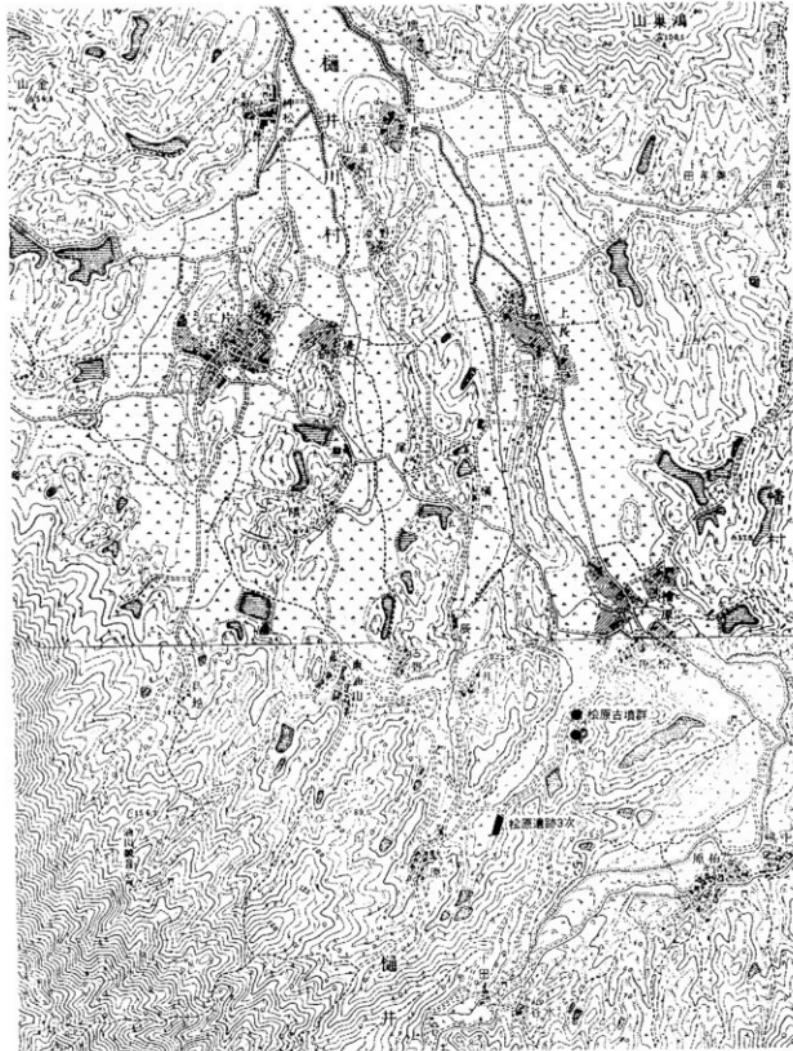


Fig.2 桧原遺跡群の位置（2）

4. 古墳時代

古墳時代前～中期の集落は淨泉寺遺跡、飯倉A、D、F遺跡などがある。集落規模は弥生時代後期以来、大きな変化はない。墳墓には京ノ隈古墳、干隈古墳、クエゾノ1号墳などがある。京ノ隈古墳は全長約40mの前方後方墳である。干隈古墳は径約24mの円墳であり、主体部は箱式石棺である。こ

の古墳の南側に壺棺墓、土壙墓2がある。クエゾノ1号墳は全長約28mの前方後円墳であり、箱式石棺と木棺粘土棺を主体部とする。墳丘から陶質土器が出土している。

後期には片江辻遺跡、淨泉寺遺跡、カルメル修道院内遺跡、柏原遺跡D2、M地区、飯倉C、D、F遺跡などで集落が検出されている。多くの集落は方形の竪穴式住居と縦柱式の掘立柱建物から構成されている。その中で柏原M遺跡は大型の掘立柱建物があり、同時期の首長墓とみられる柏原A1号墳の存在から、樋井川流域を代表する豪族居館と推定されている。また隣接する柏原L遺跡で同時期の水田跡があり、樋井川上流域の水田開発がこの時期に進み、それにこうした豪族の直接的な関与が考えられる。生産遺跡としては柏原M遺跡やクエゾノ遺跡に鉄生産関連遺構がある。後者では筒形炉のほか、隣接した古墳から鋳冶具の副葬があり、被葬者の鉄生産との関連を示した。この時期の墳墓は集落内の土壙墓と、集落から離れた丘陵上、山麓に横穴式石室を主体とする古墳、群集墳が多数設けられる。十塚墓は飯倉F遺跡などにある。古墳は前方後円墳としては梅林古墳、神松寺御陵古墳、柏原A1号墳などがある。何れも全長40m以下の規模である。群集墳は油山山麓の斜面に多く分布し、数基から數十基を単位とし、現時点で総数200基以上を数える。この地域の古墳は7世紀後半でも少数の築造があること、古墳への鉄滓供獻例が多く認められる点に特色がある。

5.古代

古代には柏原M遺跡、飯倉C、D、G遺跡などがある。また樋井川河口であった荒津東岸の丘陵上に律令体制下の外交施設である「筑紫の館」（鴻臚館）が造営される。流域の一般的な集落は飯倉C遺跡などにあり、掘立柱建物、溝などから構成されている。柏原M遺跡は6世紀から10世紀まで継続する大規模な集落である。広域の造成地、多数の掘立柱建物、出土遺物に硯、石帶、墨書き土器（「郷長」「左原補」他）、椎、多量の輸入陶磁器などがあり、豪族居館跡とみられている。この時期には柏原M遺跡、笠置遺跡、飯倉G遺跡などに精錬炉や鍛冶炉などの製鉄関連遺構や遺物がある。また特殊な遺構として飯倉D遺跡で「氷室」遺構が2基検出されている。これはこの地に氷司を設置し、下流の鴻臚館へ氷を供給したものと推定される。埋葬施設は飯倉G遺跡があり、土壙墓、火葬藏骨器がある。また、京ノ隈古墳上で経塚2基が検出されている。

6.中世

中世には干隈遺跡、淨泉寺遺跡、飯倉C、F遺跡、柏原K、L遺跡がある。集落は少数の掘立柱建物、溝、土壙などからなり、多くが小集落とみられた。一方、柏原K遺跡は大規模な掘立柱建物、柵列、土壙、井戸、方形区画濠などから構成され、13世紀後半から14世紀前半の時期とみられた。これは「入來文書」に記録が残る、元冠恩賞地として薩摩國在地領主渋谷氏らに配分された領地に関わる居館跡と推定されている。また柏原L遺跡では同時期の水田跡が調査された。埋葬遺構は3遺跡で検出されている。干隈遺跡では火葬墓が古墳の周囲に15基分布する。また淨泉寺遺跡、飯倉F遺跡では土壙墓が確認されている。

(註)丸尾台遺跡の壺棺墓は現在の福岡市立堤小学校にあった。桧原遺跡の西方800mの位置にあたる。遺跡についての記録のみであるが、壺棺検出部分の写真が残されている。これを見ると、壺棺の埋葬部分が付近での最高所となっており、断面に地層が認められる。この土層は注意される。下半部はこの付近の基盤である早良花崗岩の風化バイラン土とみられるが、上半部の壺棺が出土したとされる位置では暗色と明色の複数層の堆積が観察できるからである。こうした堆積は段丘堆積など周辺の同じ標高30~40m付近では認められない。この地域の基本土壌はバイラン土上に発達の悪い更新世火山灰風化土層が覆い、その上部に腐植土層が形成される単純なものである。先の複数層は丘陵頂部にあることからみても、古墳などの人為的な盛り土以外は考えられない。したがって、この遺

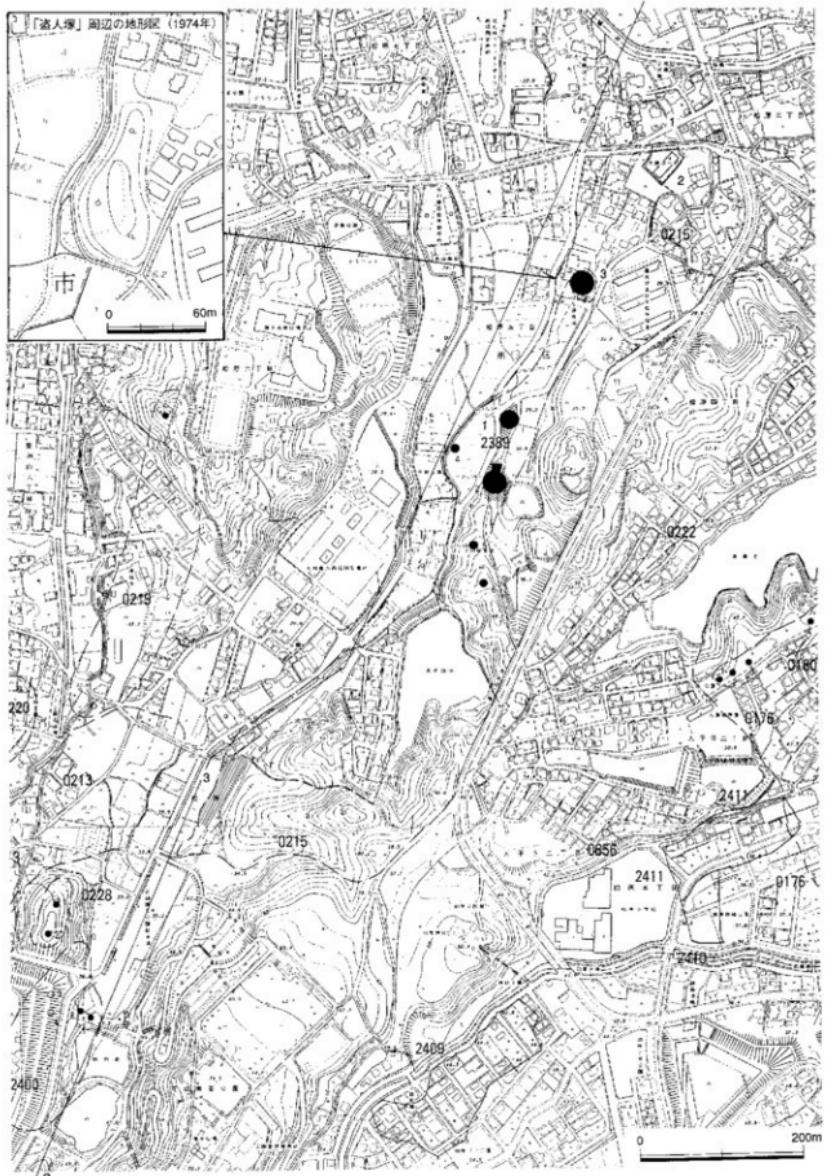


Fig.3 桧原遺跡群・古墳群の周辺地形図 (1/6,000)

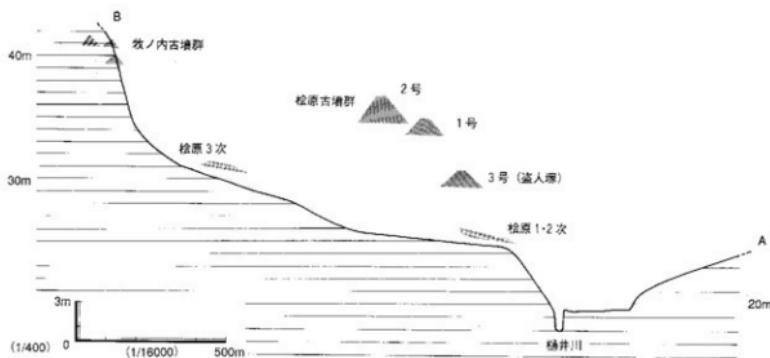


Fig.4 桧原川流域の地形略図と遺跡の位置 (Fig.3のA-B間に対応)

跡での発掘は盛り土中に埋め置かれたものであり、こうした盛り土は弥生時代の「墳丘墓」であろうと考えられるのである。残念ながら、正式な調査が行われず、当時の地形測量図などもない。したがって墳墓の構造や規模、形態などを明らかにすることはできない。なお、造成工事中壁面から崩落した発掘から前漢鏡3面、刀子、朱雀が出土したこと、また、約10m離れた別の発掘からも素環頭刀子が出土している点、さらに周囲で数十基の発掘の存在が予測されている。このことから、春日市須玖岡本遺跡（墳丘墓）や前原市三雲南小路遺跡（墳丘墓）のように1～2名の被葬者による特定個人墓ではなく、集団墓を呈していたことは確実であろう。このように、著者は丸尾台遺跡について、報告の記載と記録写真から同時期の墳丘墓であろうと推定した。中期後葉の段階において、地域を代表する特定集団墓として、福岡平野や早良平野と同様にこの穂井川流域でも墳丘墓が構築されていたことが明らかになったことは重要である。

3、桧原遺跡群、桧原古墳群の調査

1. 桧原遺跡群

桧原遺跡群の調査はこれまでに過去2回行われている。

第1次調査は、1984年5月21日～7月13日に大字桧原字小原（現在の桧原5丁目5番地）において、共同住宅建設にともない実施された。調査面積は1,190m²であり、谷頭の低湿地部分であった。この部分では古墳時代中～後期の多くの遺物が出土した。その中でも農耕具を含む木製品の出土が注目された。木製品の中には部分的に焼けて炭化しているのがあり、湧水や水利に関わる祭祀遺構と考えられた。

第2次調査は、1984年6月18日～7月4日に1次調査地点に隣接した県道（主要地方道大野城二丈線）部分に対して行われた。調査面積は狭く、65m²であった。1次調査と同様の成果が上がっている。

今回の発掘調査は、桧原古墳群の調査が「桧原古墳群第1次調査」であり、集落跡の調査が先の第1、2次調査に続く「桧原遺跡群第3次調査」となる。

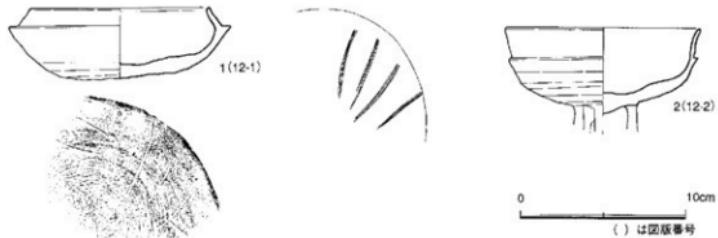


Fig.5 桧原5号墳の採集遺物 (1/3)

2. 桧原古墳群

桧原古墳群については、1970年代の福岡市教育委員会による遺跡分布調査次にも未確認であり、今次調査以前には認識されていなかった。ただし、地元の人々には一帯に塚や石室が存在することは知られていたようである。古墳群についての聞き取りを以下に記しておきたい。

地元の大神吉助氏は早くから付近の歴史遺産に興味をもたれ、古墳についても注意されている。氏によると、2号墳は戦前には石室の天井石があり、開口部から自由に入り出しきつたという。また、3号墳は通称「盗入塚（ぬすっとづか）」と呼ばれ、比較的大きな古墳であったという。盗入塚の所在する丘陵は村の公用地であり、戦前戦後を通じて土取りが盛んであり、最後は1980年代の保育所建設によって完全に失われたという。1974年の地形図（Fig.3、左上）によると、その位置は細長い独立丘陵である。なお、盗入塚古墳の石室石材の一部を地元の方が保管されていると聞いているが、確認調査に至っていない。また、今回の公園造成工事の初期に桧原川添いの沖積地内に多量の石材が掘り出されたという。これについても古墳の可能性が指摘された。この部分は事前調査は行われていないが、調査に入った時点で現地は既に造成が終了していた。工事関係者への聞き取りや現地の踏査を試みたが、古墳の存在は確かめることができなかつた。古墳の可能性を留意し、4号墳と仮称しておく。

また、同じく地元の千手重之氏によると2号墳の南側100m以内の丘陵上にかつて小規模の古墳があり、須恵器を採集したという。この採集遺物は後に寄贈を受けた（Fig.5-1、2）。古墳のあったとされる位置を踏査したが、2号墳墳端から約70m南に丘陵のわずかな隆起を認めた。しかし、多数の土取り跡があり、地表や断面では遺構、遺物の遺存は認められなかつた。古墳の可能性はあったが、既に破壊されたものと考えられる。これを仮に5号墳としておく。寄贈された須恵器は何れも破片であり、杯身と高杯杯部である。時期はⅢB期にあたるものである。

この他に1、2、5号墳のある丘陵南側にかつて数基の古墳があったとの話を聞いた。調査の合間をぬって現地踏査を行つたが、それらを確認することは出来なかつた。なお、2号墳の南約150mの丘陵頂部の雜木林中にわずかな隆起を認めたことから、これを仮に6号墳とし、今後の試掘などによる確認に備えることとした。

以上のように桧原古墳群については、今次調査以前に何の記録もなかつた。ただし調査を始める段階にはこの古墳群の2点の特色が留意された。まず第1に油山山麓の後期群集墳の分布と異なり、山麓ではなく、丘陵先端に近い位置を中心に分布している点である。第2に比較的大型と見られる古墳（1～3号墳）を中心にして少數の古墳から構成されることである。こうしたあり方は、柏原古墳群A群や七隈古墳群、駄ノ原古墳群中のタカバン塚古墳などと共に通する要素である。こうした点については調査成果をふまえて後述したい。

第3章 調査の記録

第1節 桧原古墳群

1、調査の概要

調査対象となった桧原古墳群1、2号墳は、南北に細長く延びる丘陵上にあり、相互に約60m離れていた。丘陵上には道路が縱走しているが、これは古くから桧原村と柏原村を結ぶ林道の一つであった。丘陵の西側は桧原川と谷状の沖積地があり、東側は幅30m余りの狭い谷が丘陵に添っている。東側の谷には2号墳の一部を利用した築堤がなされ、溜池（七浦池）が設けられている。調査開始段階には既に造成工事が始まっており、2基の古墳は造成予定地内に残された残丘状を呈していた。調査は時間と工事との制約から丘陵全域を対象とせず、各古墳の周囲に限定した。調査面積は古墳2基で合計約1500m²である。

なお、本古墳群出土の金属製品等の強化、保存、取り上げは福岡市埋蔵文化財センターに協力を依頼した。また、1号墳の人骨の調査、取り上げ、保存処理、観察検討については九州大学文化史研究施設（後は同大学大学院基盤構造講座）の協力により行った。

2、1号墳

1)墳丘 (Fig.7, 8)

1号墳は丘陵の先端部にある。調査以前は樹齢40年以下の雑木林であり、中央になだらかに高い地形の起伏を残していた。周囲は道路などにより削られ、2m近い崖となっている。また、土取りや山芋採取に関わるとみられる穴が各所にみられた。試掘調査では主体部や遺物は未検出であるが、起伏の部分に墳丘盛土と見られる堆積が確認されている。古墳の墳丘端部は不明瞭であり、特に東西側は削平されているようであった。現状での見かけ上の墳丘は南北約20m、東西約15mを測り、平面が橢円形の墳形を呈していた。墳丘の中央には東側に開く窪みがあり、主体部の位置とその破壊が予測された。

墳丘盛土の遺存は悪く、最も厚く残る主体部の周囲で約0.8mの堆積が観察された。墳丘の構築過程は明かでないが、残存する石室周辺では石室構築と並行しながら盛り土を積み上げている。なお、盛土は旧地表面に直接盛られており、その上面には炭化物片が多量に分布していた。また、墳丘盛土中に炭化物の混入もあり、特に北側断面の11、15層、西側断面の11層のように盛土中に炭化物が集中する部分が認められた。なお、墳端部分での地山整形などは周囲の削平のために認められなかつた。そのため当初の墳丘規模を明らかにすることは困難である。地山の地形変換点などからの推定では、見かけ上の墳丘と同規模か、若干東西方向が大きくなると考えられる。

2)主体部 (Fig.9)

1号墳の埋葬主体は南に開口する横穴式石室である。石室は主要な石材を抜かれ、北側奥壁と接する西側側壁の一部を残すのみである。石室は東側から掘削、破壊されており、東側側壁部分は掘り方を失っている。また試掘トレンチが石室南側を横断して設定されたため、石室開口部分の掘り方と床面を失っている。規模や形態は推定復元を含む。石室の掘方は、旧地表面から掘られている。その規模は長さ約4.3m、幅約2.6mを測る隅丸長方形である。羨道部の掘方は未検出であるが、前部（墓道）とは連続しない。石室は残存部分と腰石の抜き跡から復元して長さ3.2m、幅は奥壁側で約1.5m、羨門側で1.3~1.4mと推定される。したがって平面形は長方形と言うより、羽子板に近い形状である。石室の主軸は厳密に測定できないが、北よりやや東に振れ、おおよそN-10°-Eである。

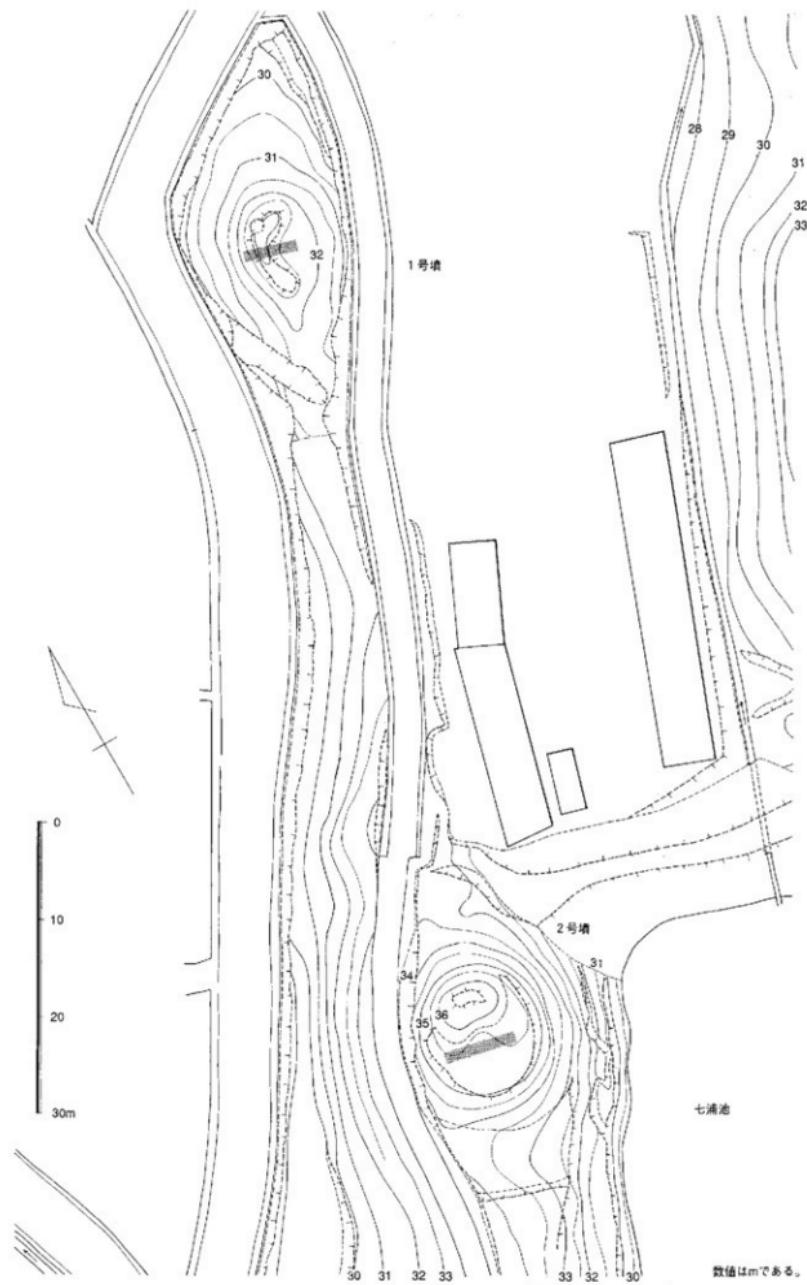


Fig.6 桧原1、2号墳地形図（網部は試掘トレンチの位置を示す）（1/500）

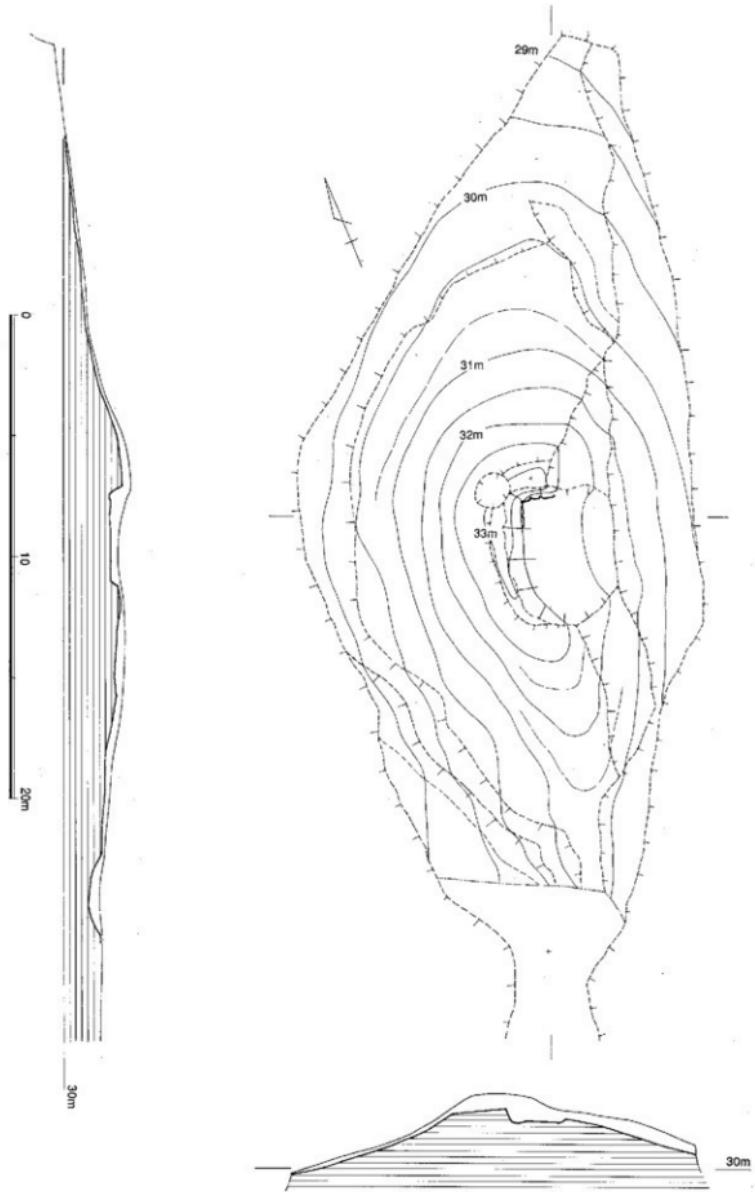


Fig.7 桧原1号填填丘測量図 (1/200)

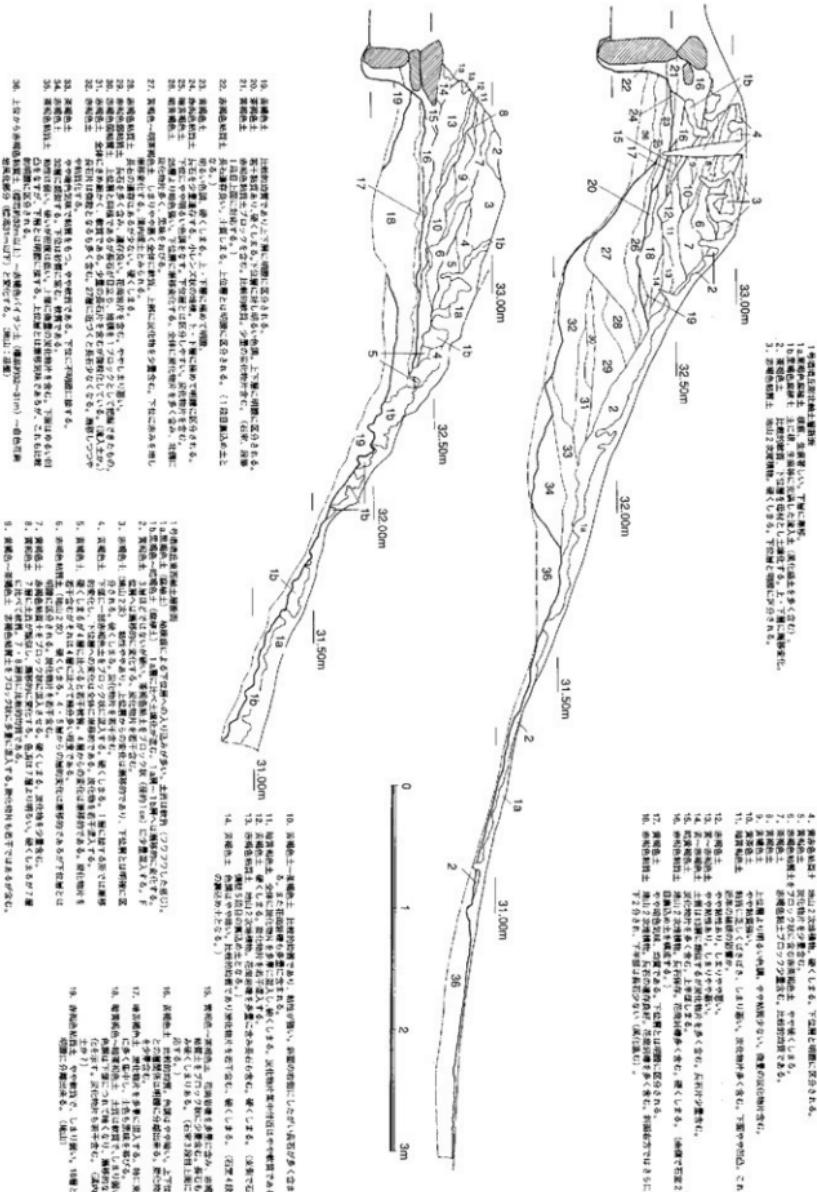


Fig.8 桜原1号填填丘土層断面図 (1/40)

石室は花崗岩亜角礫を使用し構築されている。床面から高さ0.9mまで残り、その部分でおおよそ3段の石積みとなる。残存する腰石は奥壁の3個と西側壁の2個である。石材は奥壁側がやや大きく、何れも一辺70cm、厚さ20cm以下のものである。なお、腰石は抜き跡からみて奥壁4個、両側壁共に6個、両袖（玄門部）計2個とみられる。羨道部は不明であるが、形態から「ハ」の字形に開口する短い構造と予測される。

石室床面は南～東側で破壊されているが、北～西側部は保存状態が比較的良好であった。床面には地山整形面には直接拳大程度の花崗岩円礫を敷き、砾床とする。

3) 墓道と閉塞施設 (Fig.9)

墓道（前庭部）は、削平により床に近い部分が深さ40cm程度残されていた。平面形は石室玄門部から南に約1m離れた位置から始まり、約3m離れた位置で東に曲がる。墓道の端部の形状は削平のために不明である。全長は4.4mである。

墓道内埋土は2層群に区分された。1～2層は腐植土を主とする埋土である。3層は石室側に堆積し、風化の進んでいない地山土の埋め土である。後者は閉塞にともなうと考えられる。

閉塞施設は完全に失われ未検出であるが、玄門に近い羨道部にあったと予測される。

4) 遺物の出土状態 (Fig.10, 11)

1号墳からは大きく3ヵ所から遺物が出土した。石室内と墳丘内、墓道埋土中である。墓道埋土中からは少量の土師器細片が出土したのみである。墳丘内からは石室西側の墳丘内から須恵器類の出土があった。部分的な搅乱もあるが墳丘盛土との関係からみて、墳丘築成以前の旧地表面に置かれたものを、墳丘盛土で覆ったものと考

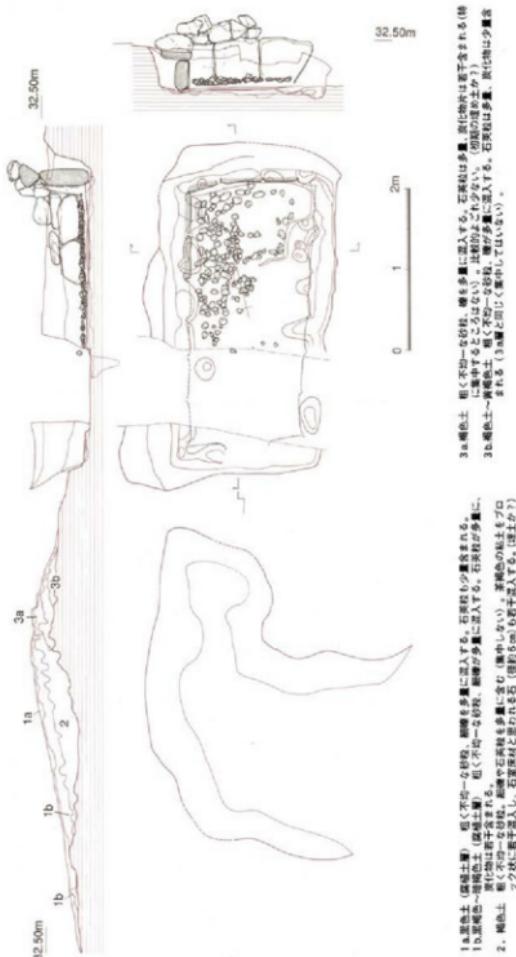


Fig.9 桧原1号墳主体部・前庭部 (1/60)

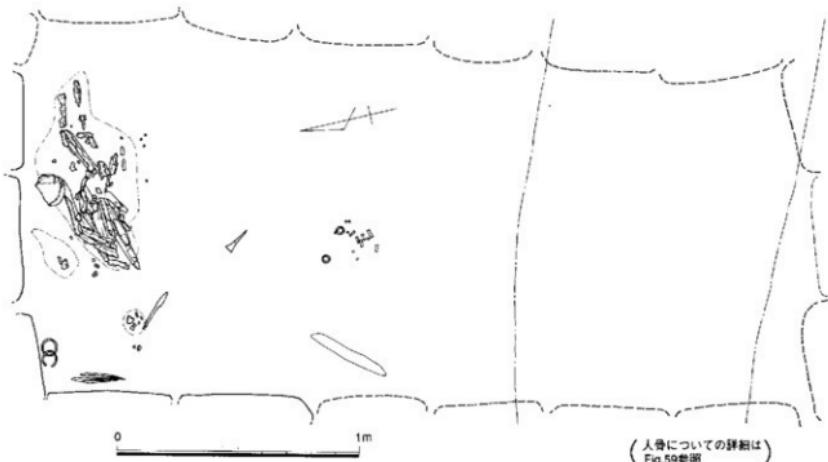


Fig.10 桧原1号墳石室内遺物出土状況 (1/20)

えられる。その器種は無蓋高杯、鰐、壺からなる。埋置状況は搅乱のために上部を失い明確でないが、高杯は正置、鰐、壺は反転して据置き、埋めたものと見られた。土圧により破碎したものと見られた。なお、旧表土上面には炭化物片が多く分布しているが、この須恵器の周囲には特に多くの炭化物、炭化材が認められた。

石室内床面からは予想に反して多数の遺物が出土した。遺物には人骨3体以上、武器（鉄鎌、弓金具）、装身具（銅釧、耳環、碧玉管玉、ガラス丸・小玉多数）がある。人骨は奥壁に近い床面上に集積状態で検出された。人骨の集積は四肢骨を中心にならんで置かれているように見えたが、床面直上に他の遺物と共に安定して出土した。人骨については第4章2で報告される。人骨の南側にガラス小玉が散乱していた。石室北西端には、青銅製銅釧2と鉄鎌3がある。銅釧は奥壁に立て架けるように置かれており、埋葬にともなう着装とは考えられない。鉄鎌3は先端を奥壁に向かってねらされたように置かれている。これらからやや離れた石室中央寄りに鉄鎌2、耳環1、歯が散漫に出土した。石室中央付近には耳環2、管玉、ガラス

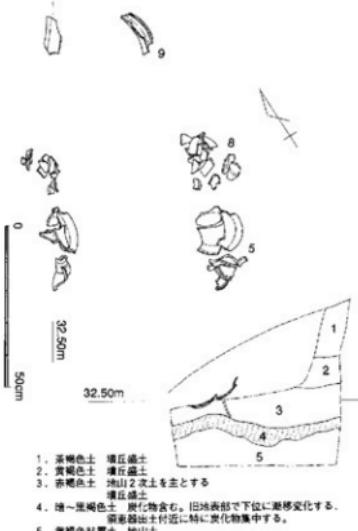


Fig.11 桧原1号墳塹丘内遺物出土状況 (1/15)

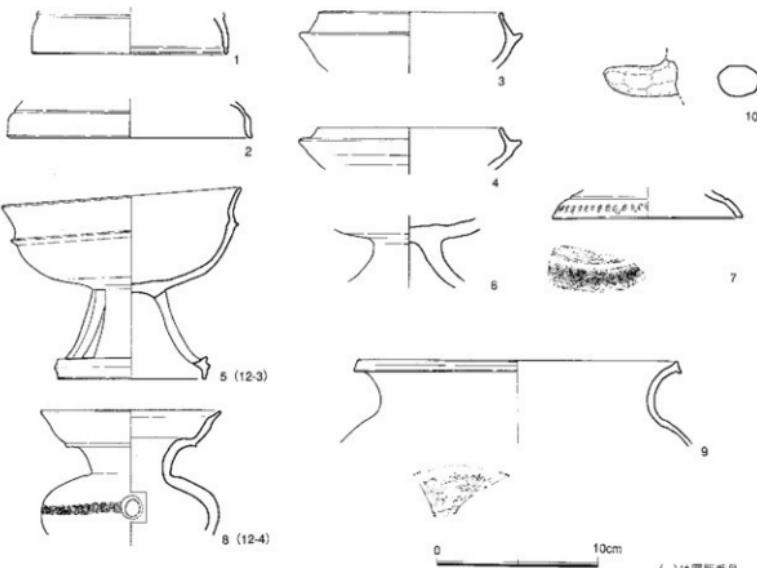


Fig.12 桧原1号墳出土遺物 (1) 須恵器・土師器 (1/3)

()は図版番号

玉類が集中して出土した。耳環2個は略東西に15cm離れ、その南側に玉類があった。これはほぼ頭位への装着状態を示している。また、この頭位の西側約30cmの床面に長さ35cm、幅4cmの細長い鉄錆があった。接するように腰石の抜き跡があることから、何らかの鉄製品があったが、石材抜き取り時に引き抜かれたものと見られた。形態から鉄劍か鉄刀と推定される。

遺物はこの他に墳丘南半分の東西両斜面から須恵器片などが調査前、調査中に採集されている。しかし、何れも近年の二次的な堆積土中からの出土であり、関連する構造部、面は不明である。

5)出土遺物 (Fig.12~15)

1.須恵器

1,2は杯蓋、3,4は杯身である。5~7は高杯、8は甌、9は甕である。1~4,6,7は墳丘から採集された。5,8,9は右室西側の墳丘下旧地表上から出土した。5,8,9は比較的古い特徴をもち、小田編年のI B期~II期、田辺編年(陶邑)のTK23~MT15に位置づけられる。採集された須恵器はやや新しいものを含み、III A~III B期、TK10~TK43の幅に置かれる。この時期幅のある須恵器類は、墳丘下のものが古墳築造時に、その他のものが、幾度かの埋葬や儀礼に関わるものと考えられる。

2.土師器

土師器は墓道や墳丘表土などから小片が出土したものの、図化に耐えるものはほとんどない。10は石室の東側壁の抜き跡から出土した取っ手であり幅、厚さ2cm前後、長さ4cm強を測る。小型の甕か甌の破片と見られるものである。時期は不明である。

3.玉類

玉類には、管玉(碧玉製)5点、丸玉(ガラス製)6点、小玉(瑪瑙製、ガラス製)51点がある。ガラス製玉は肉眼でおおまかに紺色、淡青色、緑色の三種に分かれ。緑色の小玉を除いて、耳環一組のみと共に右室中央の一人の被葬者に、首飾りとして装着されていたと推定される。緑色のガラス製小玉は集骨付近に散在し、本来の被葬者の位置を示すかは明かでない。

4.金属器

装身具

銅鏡 (Fig.14・PL.16-1-1・2)

2個体あるが大きさ、太さともよく似通っており左右一対と考えられる。しかしクリーニング後の観察の結果、1には外側に刻み目が無く、2は刻み目を有し、左右で異なった外観を呈していることが判明した。形状は、ほぼ正円でどちらも外径約6.5cm、内径約5.6cmを計る。断面は梢円形で、1はやや杏仁形気味で梢円の長辺両端に稜線が見られる。1は一部が失われており分からないが、2は破片が全て接合し切れ目は無かった。また実体顕微鏡による観察では1の刻み目が無い方に布の付着が認められた。この布は単純な組織の平織りで、材質は肉眼だけでは分からないが、織維の細さから絹であろうと推測される。片方の個体の極狭い範囲にしか残っておらず、鏡自身が布にくるまれていたのか、被葬者の衣服等他の布が接触したことによるものかは不明である。なおこの鏡は石室の奥壁に2点立てかけられた状態で出土しており、遺体搬入の時点か、追葬に扱る片付けの段階で被葬者からはずされていたものと思われる。

耳環 (Fig.15-3～5・PL.16-1-3～5)

3点出土しているが、3と4は外側より左右一対分である。灰色で全体に細かい亀裂が入っている状況から見て、その材質が錫であると予想されたが、分析でも確認された。中実で表面装飾は見られない。突き合わせ部分はどちらも隙間がないが、4はやや外側に引っ張られた様に歪んでいる。

5は太さ1.8mmの中実の銅線を環状に成形したもので、外径約2cmを計る。使用時のものか、或いは土圧に扱るものかは分からぬが、正円からはかなり歪んでいる。表面に鍍金等の装飾は見られない。各部分の計測値はTab.7に示す通りである。

武器

弓金具 (Fig.15-6.7・PL.16-1-6・7)

飾り弓の装飾金具とされるものが2点ある。この金具は2号墳からも出土している。一般的には円あるいは隅丸方形の筒状にした薄い鉄板（皮金）の中に両端を丸く潰した鉄棒（芯金）を通した構造で、出土品では鋸着しているが本來は可動式であり、弓の本彌、裏彌に穴をあけて数個取り付けられて音による効果をねらったものと考える。多くの出土例は皮金に弓の木質が遺存しており、ここから弓の太さが推定できる。この1号墳の例は2点とも破損しているため全体の大きさや木質の幅（＝弓の太さ）は不明だが、中程で破損し断面が見えているものを観察すると、芯金は2.5mm前後の太さで、その周りを余裕を持たせて皮金が巻いており、本例においても可動構造であったことが伺われる。僅かに残る木質から樹種を知る手掛かりは得られない。7においては弓本体に固定する際の皮金の折り返しが観察できる。この折り返しは他の例では花弁状に切り開かれているものもあるが、本例ではそのような状況は見られない。

鉄鎌 (Fig.15-8～18・PL.16-1-8～16)

個体として計上できるものが9点あり、その内鎌身の形状が把握できるものが7点ある。A～E類の5種類に分類できる。¹¹⁾ A類（8～10）は長頸鎌被片丸造三角形鎌に分類されると考えられるが、鎌身部分の鋒化が著しく、形は判然としない。8は鎌身関部にやや返りが付くように見える。杉山分類では長頸鎌群A～IVあるいはVに属する。B類（11）は長頸棘鎌被無闇片丸造柳葉鎌の名称が与えられるが、後に述べるようにやや異質な外観であり、杉山分類に当たはまる形式は見られない。刃部は長く鎌身関部を持たず鎌被に移行、鎌身はスプーン状に反り返るというやや特殊な、鎌の様な形状を呈しており、果たしてこのような形状で鎌としての機能を果たすのか疑問である。しかし茎には有機質が遺存し、鎌被の根元には樹皮による巻が見られ、鎌被からこの部分にかけては鉄鎌の特徴に合致する。

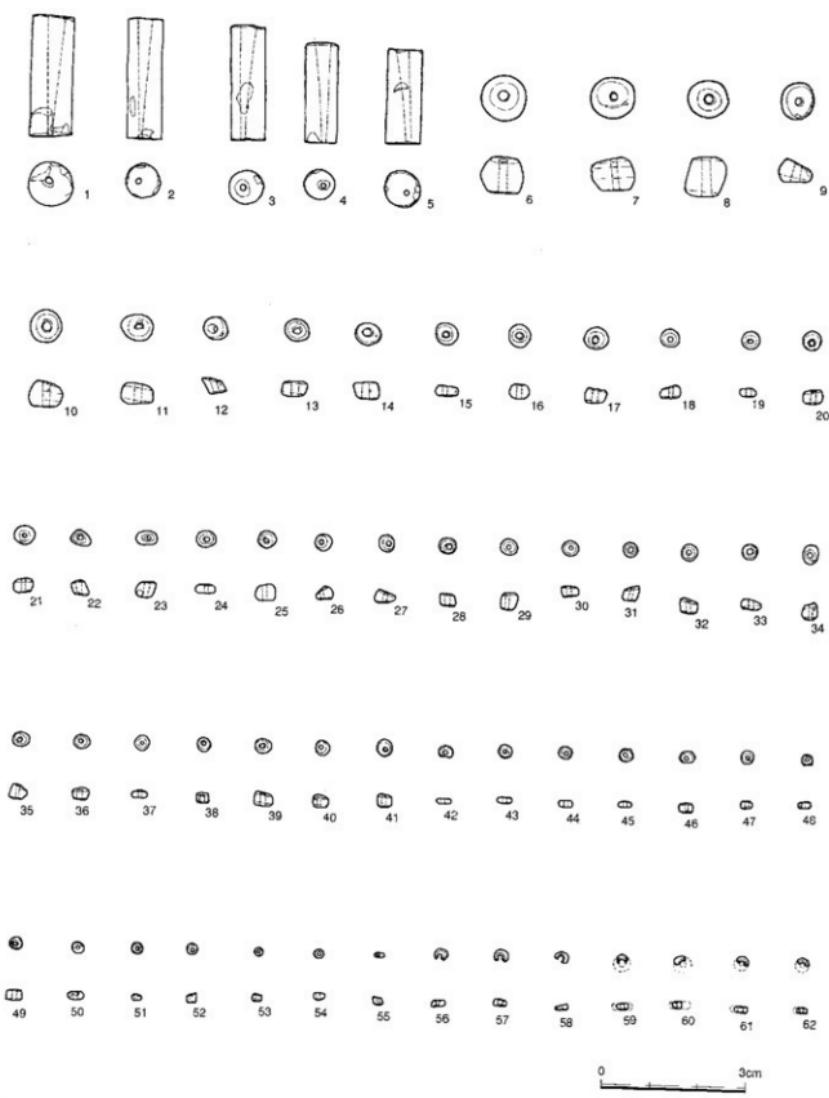


Fig.13 檜原1号墳出土遺物（2）玉類（1/1）

C類(12)は短頸籠被斧箭式、いわゆる方頭斧箭式である。杉山分類では方頭鎌群B-Iに分類される。D類(13)は鎌身部分の破片のため籠被部分の状況が分からぬが、短頸の片丸造三角形鎌であろう。E類(14)は片丸造長三角形の鎌身である。長頸であろう。この他分類に至らない破片を4点図示した。

各部分の計測値はTab.8-2に示すとおりである。

註(1) 鐵鎌の形式分類はこれまで後藤守一氏によるものが主に用いられてきたが(後藤1939)、その細分化による複雑さ故に混乱も多く、また分類基準に観念的なものを含むといった問題点が指摘されていた。しかし近年ようやく整理されつつあり、主なものに杉山秀宏氏による分類(杉山1991)と田中正夫、瀧瀬芳之他ら埼玉県埋蔵文化財調査事業団の行った分類(田中他1983)(以下「埼玉県分類」)がある。ただし、埼玉県分類の場合もなお各部分の分類に観察者の主觀が入る余地が残されており、杉山分類ではその点が改善されているものの分類の名称を見ただけでは大まかなイメージしか掴めないというように一長一短があることから、ここでは埼玉県分類の分類基準に基づきつつ、杉山分類これに对照させて用いることとする。なお埼玉県分類の場合、対象を県内に絞っているため、北部九州の鐵鎌に適用が難しい部分もあり、その場合は埼玉県分類を踏襲しつつ一部改良してより広い範囲への適用を試みた飯塚武司氏の分類(飯塚1987)を援用する。

文献

後藤守一 1939 「上古時代鐵鎌の年代研究」『人類学雑誌』54-4

田中正夫・瀧瀬芳之他 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究―一鉄鎌について―」『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』10 埼玉県埋蔵文化財事業団

飯塚武司 1987 「後期古墳出土の鐵鎌について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』V 東京都埋蔵文化財センター
杉山秀宏 1991 「古墳時代の鐵鎌について」『櫻原考古学研究所論集第8集』吉川弘文館

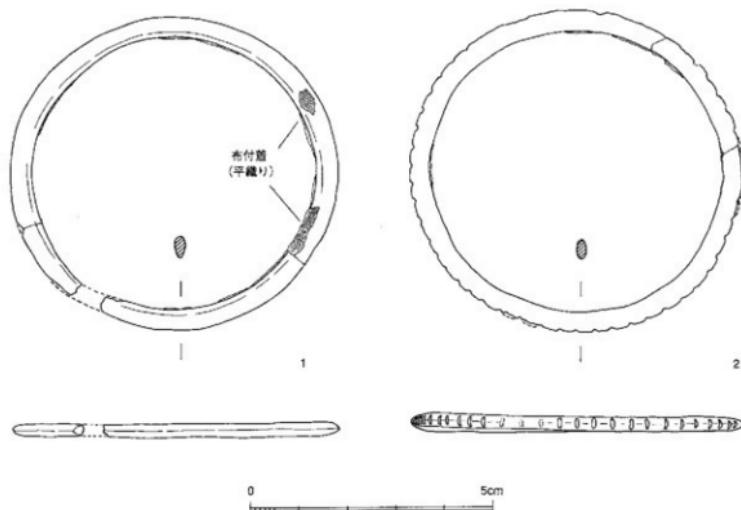


Fig.14 桜原1号墳出土遺物(3)金属器1(1/1)

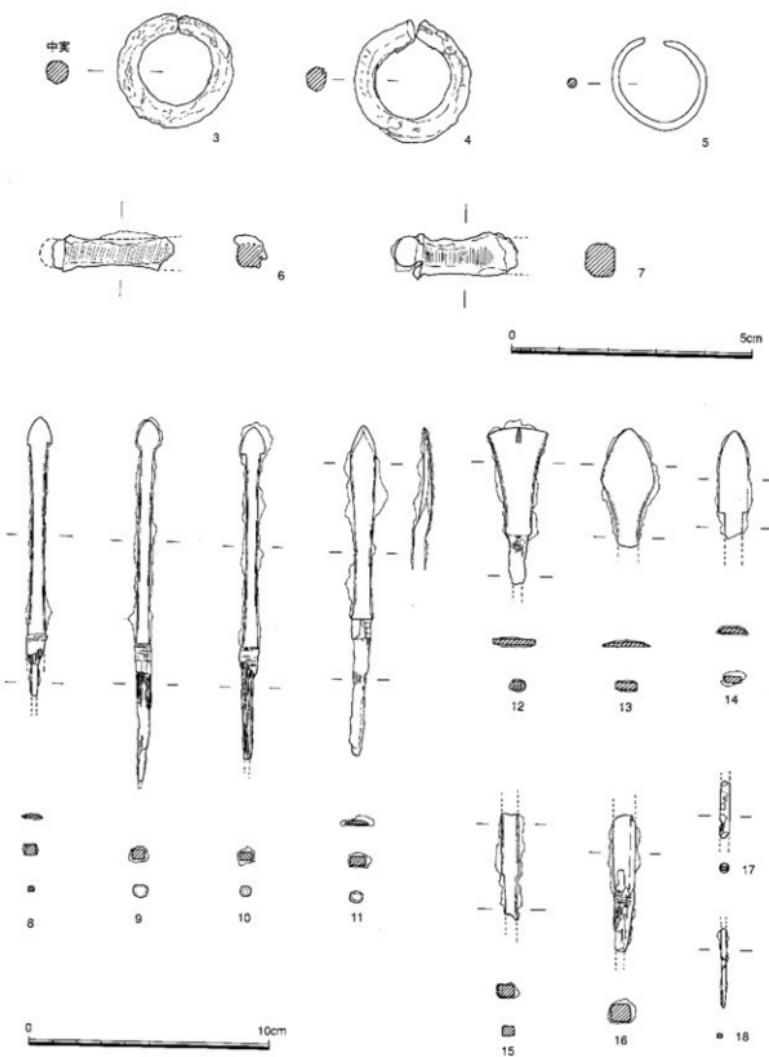


Fig.15 桧原1号填出土遺物(4) 金属器2 (1/1、1/2)

3、2号墳

1)墳丘 (Fig.7.16~22)

墳丘は南北方向の尾根のほぼ中央に位置している。東西の墳端は丘陵斜面に移行し、墳端をとらえ難い。調査前の現状は墳頂部の全体が樹齢40年以下の雜木林であった。古墳やその周辺には相当の人为的な改変がある。まず墳丘南側は畑地跡がある。また道路(A)が墳丘の西側を丘陵に沿って縱走し、墳丘を削り込んでいる。墳丘北東側には溜池の堤防が墳端付近を埋めて造られている。堤防上は平坦であり、農作業用の農道となっていたと言う。道路(A)との連結は、当初は農道(B)を利用していたが、道路(A)の改修後に農道(C)に付けかえられている。墳頂部は北半分に残丘があり、南半分は削平されている。なお、戦前には本古墳の石室が開口していたことや、墳丘上の樹木が樹齢40年以下であったことからみて、戦中から戦後まもなくの間に本古墳墳頂部の破壊があったと考えられる。

調査当初はこうした後世の破壊もあって、道路付近を墳端とした直径20m弱の円墳と考えていた。調査範囲の設定もその前提に基づくものであった。ところが調査開始後、東側墳丘の墳端部が墳丘中央より12m以上外側となることが判明し、また北側道路(A)の下位にくびれ部と見られる地山整形を確認した。こうした点から、改めて墳丘測量の範囲拡大と見直しを行った結果、北側に前方部を向ける小型の前方後円墳であると判断するに至った。しかし、この時点で既に前方部と判断した北側の高まりは道路と共に削平、西側も墳端付近まで掘削が進み高さ10m近い崖となっていた。このために前方部の調査は十分に行うことができなかつた。

前方部は、中央付近に道路(A)、東側くびれ部～側面に農地、農道(B)、(C)などが設けられ、改変が著しい。西側くびれ部は標高32mの位置にあり、幅1m程度の平坦面が地山整形により造り出されている。前方部頂は道路(A)に現れた切り通しや、西側墳丘斜面で墳丘盛土は見られず、表土下はすぐ地山となっていた。したがって、前方部は盛り上がりが極めて少ないか、地山削りだしのみによる墳丘築成であったと考えられる。

後円部は、現状で最大約2.2mの厚さの墳丘盛土が残る。盛り土は旧地表面に直接積まれている。旧地表は丘陵の地形に沿って北と東に下がるために、全体として北東に厚い盛り土となっている。逆に西側斜面には盛り土がなく、地山整形面が確認できた。盛り土は石室裏込めから連続しておこなわれ、地山土の花崗岩媒乱土や赤褐色粘土と表土の黒色土などを互層状に積み上げている。なお旧地表面や盛り土内には炭化物片が多く含まれる層がある。旧地表面と墳丘盛り土内の数カ所に焼土、炭化物を含む浅い土壤が検出された (Fig.17、19、Fig.21-SK01~03)。地山整形や盛り土作業の過程に幾度か火を焚いているとみられる。なお、西側土層で明らかに石室の構築と盛り土は、並行して進められている。盛り土はおおきく3段階で構築されている。後円部全体の地山整形面を0.5m前後覆い、石室の構築と共に北から西側を2~3m、東側を5m盛り上げている。これを第一段階とする。次に第二段階として中央の石室廻りの墳丘を覆って北から西側にかけて2m前後拡大している。第3段階はそれまでの互層状の丁寧な盛り土ではなく、比較的単純な盛り土であり、各周囲に4~5m墳端まで広げて構築される。つまり、おおまかに見るなら第一段階には後円部の基底部築成をおこない、石室の構築と併せて直径6~7m強の一次墳丘を造る。次にこれを覆うように直径12m前後の二次墳丘を造る。最後にこれを覆って盛り土が行われ、墳丘が完成している。

周溝は古墳が丘陵尾根を覆う大きさであり全周に存在しない。後円部後方には尾根線を切るように溝（周溝）が掘られている。この溝は東方から次第に浅くなり、そのまま墓道として羨道部へ屈曲、連結している。溝の規模は幅約5m、深さ約1.5mを測る。前方部前面について調査が行えず、切り通しがあったかは不明である。

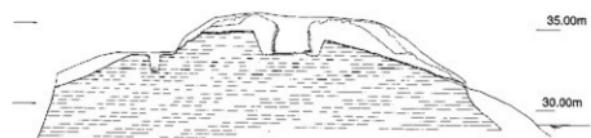
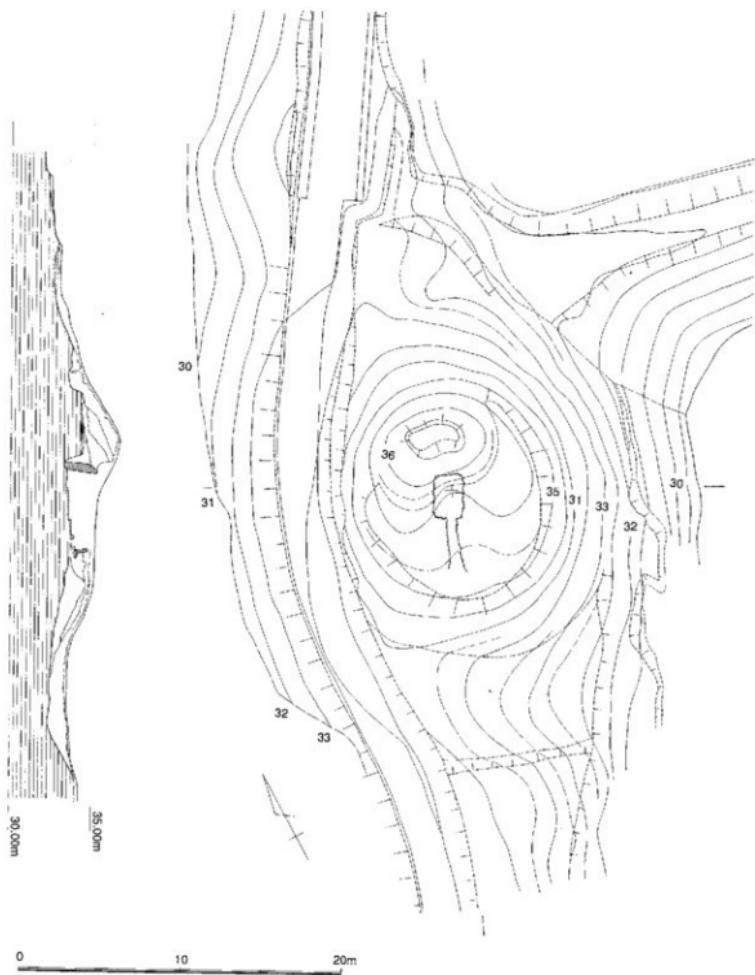
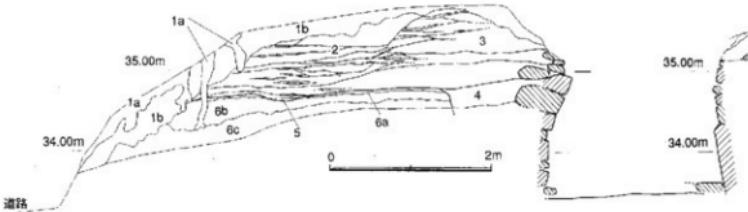


Fig.16 桧原2号填埋丘測量図 (1/300)

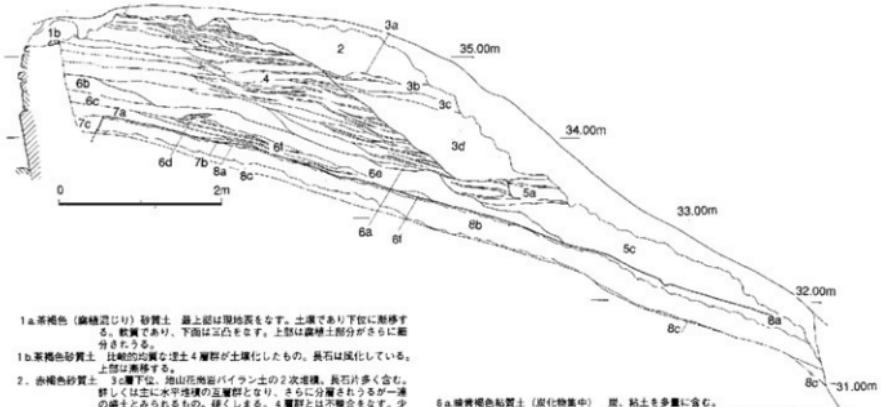
数値はmである



- 1a 黒褐色土
地盤土質。軟質であり、下部は凹凸をなし、難移動性である。
1b 赤褐色土
赤褐色多く含む。下部層の土壌化したもの。上下層に漸移する。下面
は凹凸をなす。
- 2 層群
赤褐色砂質土
ア. 地山（6c層下部）の花崗岩バイラン土の2次堆積部分。斜面側でイ・
ウ層のレンズ状堆積をはさむ。
イ. 地山上部（8b層）の2次堆積分。斜面側の主盛土。黄褐色土。全体と
して堅くしまる。
ウ. 地山最上層（8a層）の2次堆積分。斜面側（黑色部分）の間隔をなす。
黒褐色粘土全体として硬くしまる。（炭化物片含む）。

- 3 層群
石室側では主として粘土岩である。硬くしまる。ウ
は炭化物を多く含む。
4 層群
性状は3層群に類似するが全層にアの使用量多い。粘密性に薄くなる。
5 層群
6 層上部の芯部に残存する灰色砂質土。灰・炭化物からなる。下面は鉄分が
北東側へ集中する。
6a 黒褐色砂質土
炭化物片多く含み下位に漸移する。
6b 黄褐色土
やや粘質をもつて、下層移動性。
6c 赤褐色砂質土
下位にしたがい粘質が弱くなり花崗岩バイラン土へ漸移する。

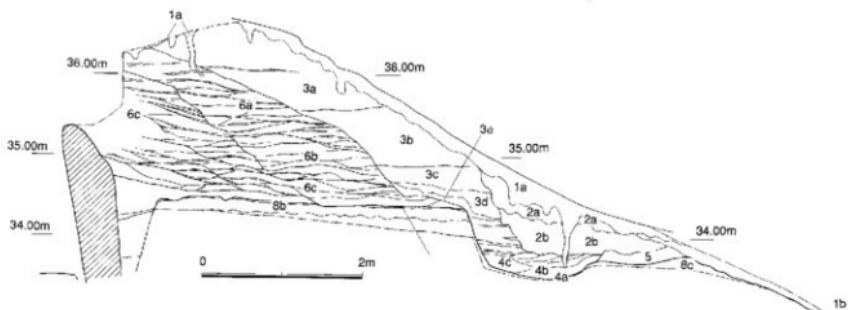
Fig.17 檜原2号填墳丘西側土層断面図 (1/60)



- 1a 茶褐色（麻績混じり）砂質土
基層は現地表をなす。土壌であり下位に漸移する。
1b 茶褐色砂質土
比較的軟質な土壌で4層群が土壤化したもの。長石は風化している。
上部は漸移する。
2. 赤褐色砂質土
3c層下位。地山花崗岩バイラン土の2次堆積。長石片多く含む。
詳しくは主に水平堆積の五層群となり、さらに分層されるが一連
の土壌とみられるものと硬くしまる。4層群とは不整合をなす。少
量の炭化物を含む。
- 3a 黄褐色砂質土
地山（8b）層の2次堆積土。下部に黒褐色ペルトあり。上下に
明瞭に区別される。
- 3b 赤褐色砂質土
地山（8c層下位）の2次堆積土。
- 3c 黄褐色砂質土
地山（8b）層の2次堆積土。
- 3d 茶褐色砂質土
地山（8c層下部）の2次堆積土。長石の未風化を含む。硬く
しまる。細かく多少組成が異なるレンズの水平堆積五層群（5cm
程度）が見られる。炭化物を少しある。
- 4 層群
(地山土の2次堆積層)
- ア. 地山下部（8c層以下）の2次堆積分。主に石窯灰を中心にして盛土。赤褐色
砂質土。さらに分層される。全体として硬くしまる。
- イ. 地山上部（8b層）の2次堆積分。斜面側の主盛土。黄褐色土。全体とし
て硬くしまる。
- ウ. 地山最上層（8a層）の2次堆積分。斜面側（黑色部分）の間隔をなす。
黒褐色粘土全体として硬くしまる。（炭化物片含む）。
- 5a 下位から4層群に分かれます。
- 5b イとの互層に、黒褐色砂質土。粘土を含む。
- 5c 赤褐色砂質土
硬くしまる。斜面下方にしたがい土壌化が進み、長石片少なくなれる。
全体として水平堆積の互層が発達している土壌である。

- 6a 雜種褐色砂質土
炭化物質中
炭土を多量に含む。
- 6b 砂質粘土
（やや砂質混じり）下部層に明瞭に区分される。比較的軟質である。
- 6c 明赤褐色砂質土
地山（8c層下部）2次堆積物。長石片を多く含み、全体に白色
気味を呈する。
- 6d 茶褐色砂質土
8a・8b層の混土状をなす。やや軟質であり、レンズ状に堆積する。
- 6e 花崗岩土
8a・8b層に明瞭に区分される。6d層と同様の性状を示す。
- 6f 花崗岩土
地山の2次堆積物群。全体として比較的軟質である。
6g 黑褐色砂質土
8a・8b層の土質を多く含む。地山側で見られる。
- 7a 明赤褐色砂質土
花崗岩バイラン土の深部より2次堆積物（8c層下部）。長石（未風
化）が多く、全体に白っぽい。やや軟質であり、よごれ少ない。
- 7b 赤褐色砂質土
地山（8c層上部）の2次堆積物である。
- 7c 赤褐色砂質土
8c層下部の2次堆積物である。さらに細分可。石窯基壇内に堆積
(積み土を形成する)。
- 8a 黑褐色・茶色砂質土
硬くしまり、色調は強く下層に漸移する。6・7層群下位では
は黒く、上位では茶色を呈する。炭化物を多く含む。
- 8b 明赤褐色砂質土
上下に素移変化(1.20~2.30mの層)ある。下位に赤色とする。
- 8c 赤褐色砂質土
上部は粘土に含み下位に砂質化し、花崗岩バイラン土へ漸移する。
硬い。

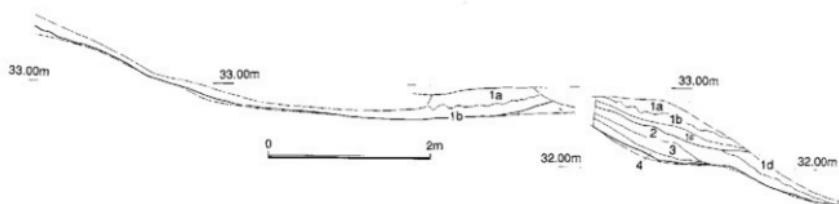
Fig.18 檜原2号填墳丘東側土層断面図 (1/60)



1. 深褐色腐植土層 下面は凹凸があり堆積変化する。土壤化深く、較質である。
 1b. 深褐色土 地質的山質でありやや粘質を含む。よくしまり地盤斜面へ周溝内に堆積する。下層とは比較的明顯に分離、上層に和移する。
 2a. 浅褐色土 粘質に富む。やや軟質であり上、下層に凹凸で接し、やや堆積質味。炭化物片を含む。2b層の未風化土層化したものと理解した。(1c層とすべきか?)
 2b. 深褐色砂質土 亦同じく山質であり(2a層上部)を含む。基岩の未風化部分多く、硬い。種々あり瓦礫状をもす。炭化物片を含む。
 3a. 深褐色砂質土 地山上部(8c層下部)を主とし、やや深い(8b層を一部含む)が、層と水平の互層状をもす。硬くしまる。
 3b. 赤褐色砂質土 地山(8c層下部)を含めとしやや浅い(8b層を一部含む)層と水平の互層状をもす。硬くしまる。3a層と基本的に同性状。
 3c. 深褐色砂質土 地山層を多く含む。上層質と同性状。硬くしまる。
 3d. 深褐色砂質土 地山層(8b層)を主とし、ややよごれた感を含む。炭化物片を多く含む。
 3e. 深褐色砂質土 地山層多く含み硬くしまる。
 4a. クイイの互層全体に水平堆積、内凹溝内に堆積する。炭化物片多く含む。
 4a. 8d層下部の赤褐色砂質土～粘質土(花崗岩バイラン土)の2次堆積部分

イ. 8b層の黄褐色細粒土の2次堆積部分
 ウ. 8a層の深褐色土、旧路土とみる。炭化物片が多く含む。
 4b. イ. ウの互層全体にやや内凹現象。硬くしまる。炭化物片多く含む。
 4c. 深褐色粘質土 長石片多く含む。ややよごれた感を含む。アの2次堆積土。
 4d. 深褐色～暗褐色土 純に上半部に地土。炭化物片を多量に含む。(上層で火を焚いたいた跡か?)
 5. 深褐色砂質土 地山層(8c層下部)に類似する花崗岩バイラン土の2次堆積物。他の地山層とは明確に区別される。硬くしまる。全層に炭化物片を含む。
 6a層群、アンドイ系粘土(ワリの水半互層現象)。石炭層にアを多く用いる。硬くしまる。ウには炭化物片が多く含まれる。
 6b層群、6c層群と同様の性状、アの使用度が高い。
 6c層群、基本的にアも生体に巣上、基岩の未風化部分を多量に含むために、全体に白っぽい色調を呈する。
 7層群、赤褐色砂質土を主とする石炭層付近～最下部地土。さらに細分され水半の互層状を呈す。

Fig.19 桧原2号墳埴丘北側土層断面図(1/60)



1a. 深褐色細粒土 2~3mmの砂粒を多く含む。きめ細かい砂質土。(淀土か?)
 1b. 深褐色土 きめ細かい弱粘質土であり、上、下層に明確に分離される。(淀土か?)
 1c. 深褐色土 粘質多く含み、較質である。一部水成状堆積土あり。
 1d. 黄褐色砂質土 下部はやや綠色を持ち風化は層状である。やや硬くしまる。
 2. 黄褐色砂質土 下部はやや粘質を含め硬くしまる。上部に和移する。
 3. 深褐色砂質土 地山2次堆積物を主とする。長石は未風化である。一部瓦礫状(瓦礫状)となる。
 4. 粘質土 地山の赤褐色粘質土ブロックも含む。やや軟質である。炭化物片を多量含む。

Fig.20 桧原2号墳埴丘北側・くびれ部土層断面図(1/60)

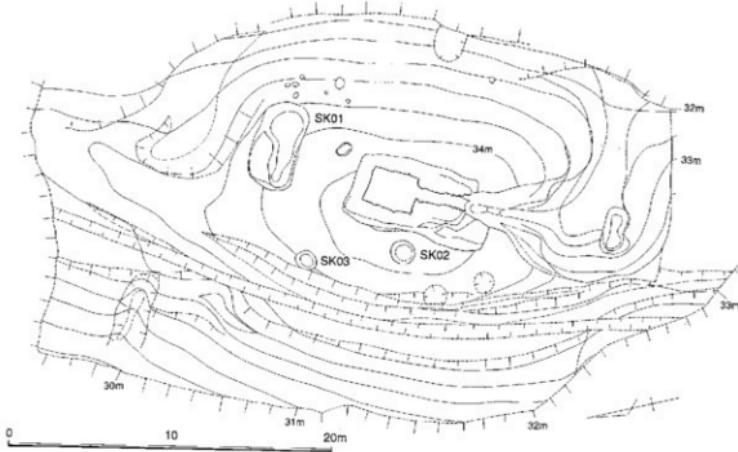


Fig.21 桜原2号墳地山整形面測量図 (1/300)

2号墳の墳丘規模は、以上のように墳丘の破壊が著しく判断が困難である。復元をおこない推定すると、以下のように計測される。まず外形の墳端を追溯すると、後円部の東側では標高28~29m付近、石室中央から14~15mの位置に墳端が予測される。次に後円部西側は標高31~32m付近で石室中央から13~14mの位置に地山の地形変換点があり、墳端と見られる。墳丘南側は墳丘西斜面との間に陸橋状の掘り残しがあり墳端線は連続しない。周溝内の墳端は墓道の開口付近で標高31.5m、石室奥壁から12.5mの位置である。くびれ部は西側のみ残り、標高32mで石室中央から約12~13mの位置にある。前方部は地形復元(Fig.22)からみてくびれ部から長さ16m前後、前面幅15m前後、くびれ部幅12~13m程度と予測される。

墳丘には、葺石、埴輪などの外表施設はない。後述するように墓道の両側に供献土器群と配石が列状に巡る部分がある。それらは墳丘中段の傾斜がやや緩やかになる部分にある。墓道西側が標高34.5m、東側が標高34mと西から東にむかいドゲリ、墳端の傾斜と一致している。こうした点からこの面が段築面と考えられた。この段築面は墳丘斜面の傾斜からみて内径14~15mで巡るとみられた。この位置からみて、後円部は二段築成であり、残存する墳丘からみて一段目は高さ約5m、二段目は高さ約4mと復元される。前方部側は後円部に対して低く、最高所は造成以前に34.5m程度と推定される。この高さは後円部段築面にほぼ一致している。これからみて前方部上面は後円部一段目段築面とほぼ同じ高さであり、連続していた可能性がある。

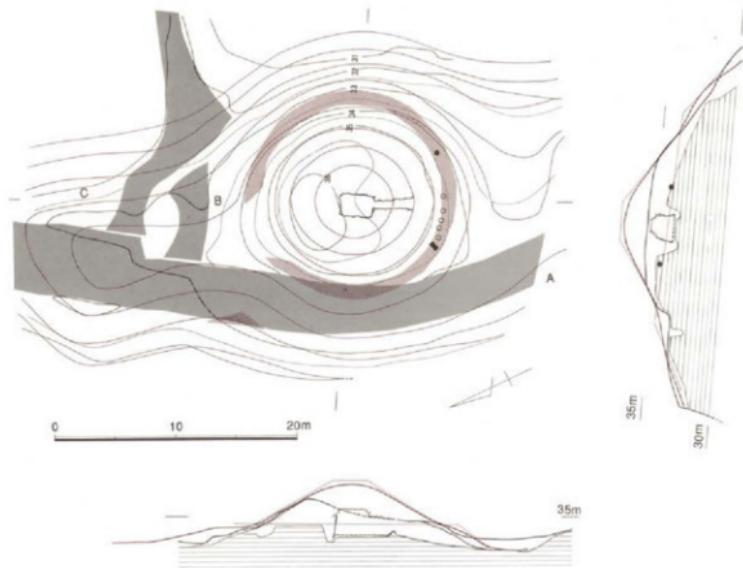


Fig.22 桧原2号墳墳丘造成前復元図(1/400)

2)主体部(Fig.23)

埋葬主体部は後円部中央に南に開口する横穴式石室である。石室掘り方は旧地表面に直接掘られている。掘り方は長軸をおおよそN-25°-Eにとり、規模は長さ6.6m、幅4.8m、深さ1.0~1.6mを測る。石室は天井石を抜かれていたものの壁面が1.5m程度残り、全体として保存状態は良好である。石室は単室両袖あり、全長約6.3~6.5m、玄室長3.1m、2.2mを測る。石室平面はほぼ長方形であるが、奥壁は主軸に対してやや傾斜し、側壁も僅かに屈曲する。側壁には傾斜(持ち送り)がある。奥壁は1個の大石を用いている。大石は花崗岩亜角礫であり、幅2.1m、高さ2.2m、厚さ0.6mで平面台形を呈する。石室側に約10°内傾して設置し、側壁との隙間を小振りの角礫で充填している。石室隅部は明瞭である。側壁は一段目の腰石には大石を使用し立て置きとしている。二段目より上は平積みで構築される。また上位にしたがい小ぶりの石を使用している。腰石は西側壁4個、東側壁3個で構成される。側壁腰石は奥壁よりも大きくなり、袖側に小ぶりである。石室内面で観察すると、二段目、三段目と石積み面が描っている。二段目以降の石積みで、構築面の調整をおこなっている。両袖石は比較的大きな石を立て、幅64cmの玄門部をつくる。袖石の高さは西側1.1m、東側1.3mであり、上面は一致しない。上部に石積みをおこない天井石設置の調整していたと見られる。玄室床面には人頭大の花崗岩平石を用いて敷石が設けられている。奥壁側が破壊されていたが、南側は保存状態がよい。残存する敷石でみると、奥部はやや大きめの敷石、南半はやや小ぶりの敷石である。

羨道部は長さ3.0m、幅は玄門部で0.7m、開口部で1.2mを測る。羨道部側壁は平らな大石を立てて造られている。なお、玄門部から1.3mまでは石室や袖石と構築面が共通しているが、それより外方は

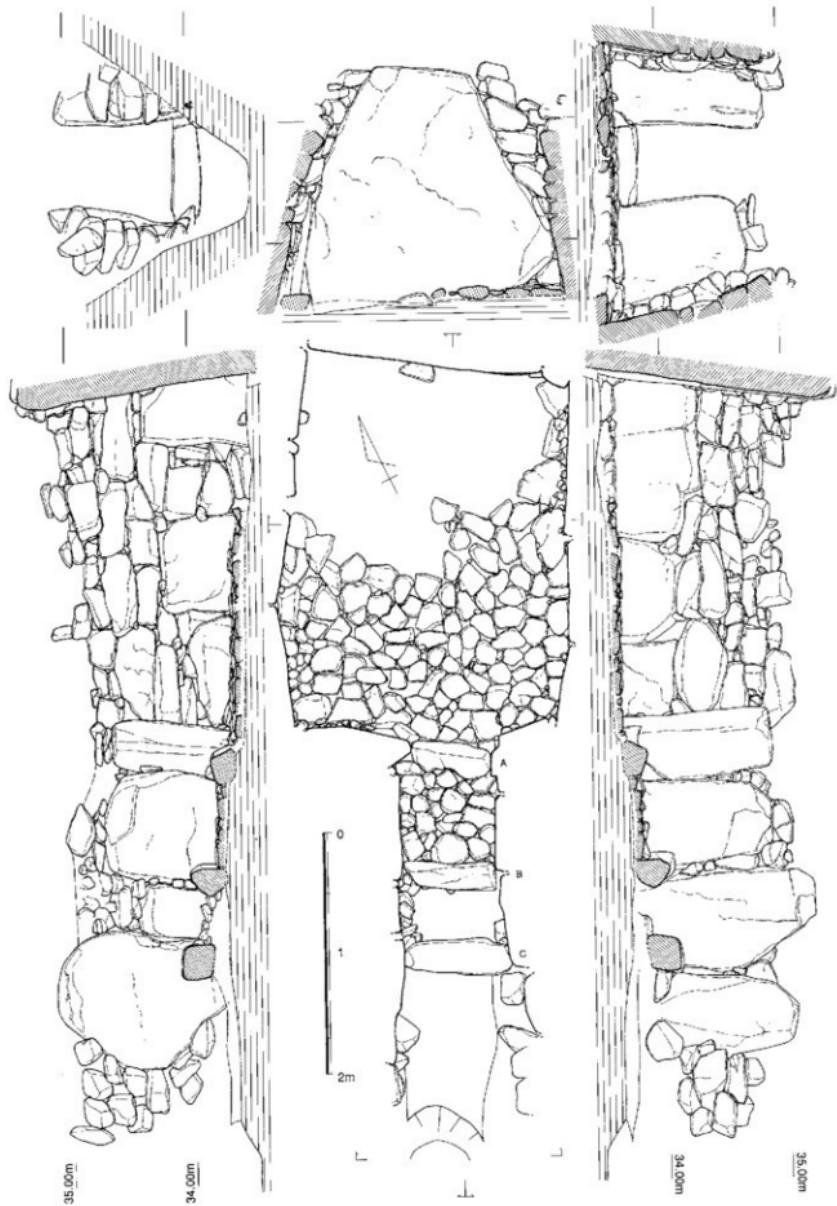


Fig.23 桧原2号墳石室実測図 (1/40)

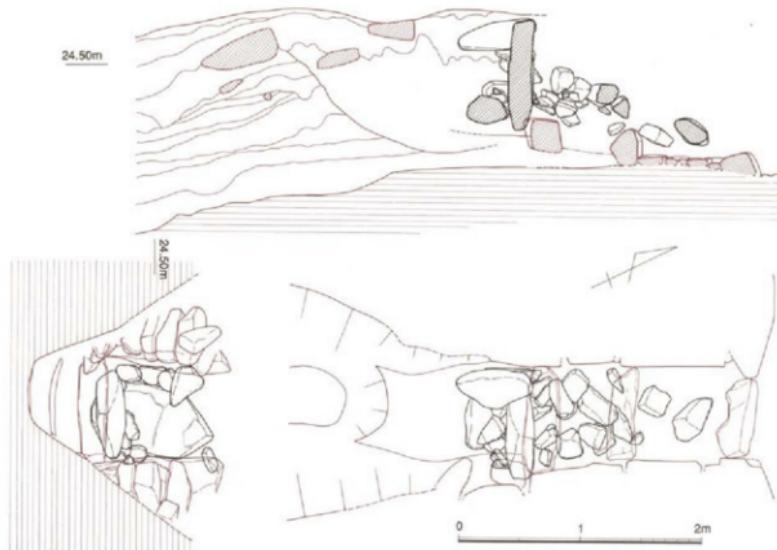


Fig.24 桧原2号墳閉塞施設実測図（1/40）

より大きな石を用い、構築面が意識されていない。これは、墳丘第1次盛り土の範囲が渓道部側1.3mまであり、石室構築の初段階を示し、渓道の延長は第2次盛り土以後に構築されたとみられる。渓道床面は地山整形面でみると水平でなく、玄門部から1.2mの位置を頂点に、玄門側と墓道側にそれぞれ下がっている。その比高差は約0.2mである。仕切石は3列あり、玄門部とそこから1.0mと1.7m離れた位置にそれぞれ設置される。玄門側から仕切石A、B、Cと呼ぶ。仕切石A、Bは地山整形面に直接据えられている。仕切石Cは二次的に動いた痕跡があり、床面から約10cm浮いた渓道内埋土中に据えられている。仕切石A、B間には玄室内と同様に敷石が設けられる。同B、C間には敷石はないが、西壁寄りに石列があり、当初敷石が設けられていたものがある時点で撤去した可能性がある。

3) 墓道と閉塞施設 (Fig.24,25,27)

墓道は渓道端部から発し、南へ延びて周溝に接続している。周溝までは約6mを測る (Fig.27)。断面は逆台形であり、地山を掘り込んでいる。床面は渓道開口部から周溝に下がり、途中に二段の段差がある。閉塞は仕切石Cの外側に1枚の板石で設けられる。板石は花崗岩であり、大きさは高さ1.0m、幅0.6m、厚さ0.2mを測る。板石と渓道側壁との間の隙間は大小10個程度の円礫で塞がれていた。また、閉塞内側の仕切石B、C間の上位理土中に礫多数があった。板石と直接接している石は少ないが、礫の埋土は硬くしり、これらも閉塞に伴うものとみられた。

閉塞から墓道の埋土は11層群26層に区分できた。周溝内埋土と絡むためにやや複雑であるが、基本的に掘削による開口と閉塞後の埋め土を繰り返していることが伺えた。こうした行為は土層から3回判断できる。まずc,d層は6,8,11層を切り、閉塞部に直接接している。最終埋葬にともなう閉塞埋め

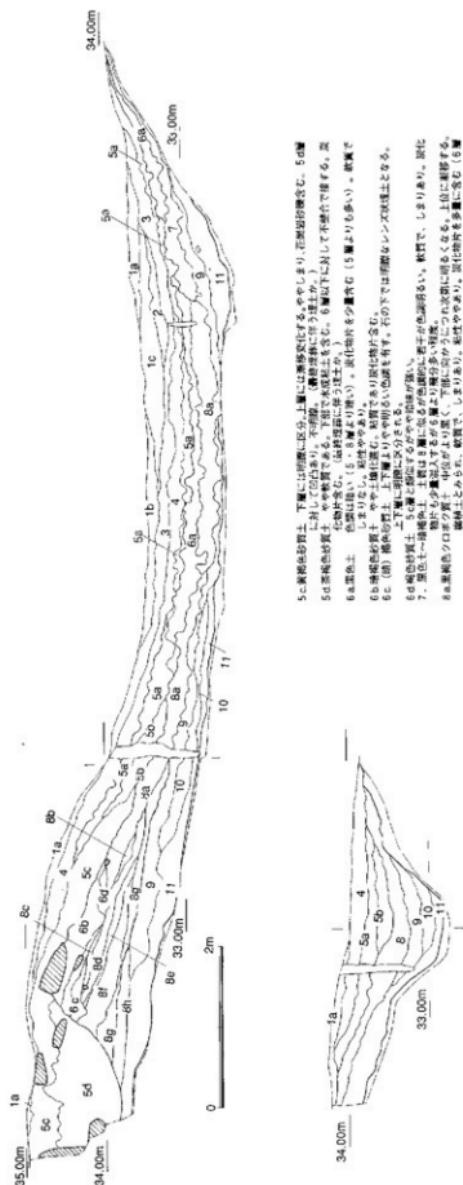


Fig.25 検原2号墳墓道～前庭部土層断面図 (1/60)

5. 前庭部地盤土 下層には砂質に区分され、上層には角礫化する。ややしまり、石炭化物含む。5. *db*
に付し、砂質である。不規則。(黒色地質をうほか)。
- 5d. 黄褐色がる土 やや粘質である。一部で水膜状土を含む。6. 以下に下して複合で層する。黄
褐色がる土。(黒色地質をうほか)。
6. 黄褐色 土色は黄褐色である。成層が少く、砂質が多いため、層の厚さは多くない。軟質で
て、砂質が入る。
- 6b. 黄褐色地盤土 5aと同様に砂質が多く、層の厚さは多くない。軟質で、砂質が入る。
- 6c. (8) 黄褐色土 上層部に砂質が混入する。下層部に砂質が混入する。石の下では厚い砂質土となる。
7. 黄褐色地盤土 上層部に砂質が混入する。下層部に砂質が混入する。軟質で、少し硬い。斑状
な黄褐色の柱状構造がある。
8. 黄褐色地盤土 地盤から土質へと入る。砂質が混入する。下層部に砂質が混入する。軟質で、少し硬い。斑状ややかい。斑状を多く含む。
9. 黄褐色地盤土 地盤から土質へと入る。砂質が混入する。下層部に砂質が混入する。軟質で、やや硬い。
10. 黄褐色 土色は黄褐色である。含水率が高く、含水率が高くなると、地盤が柔らかくなる。軟質で、
含水率が高くなると、地盤が柔らかくなる。
11. 黄褐色 土色は黄褐色である。含水率が高く、含水率が高くなると、地盤が柔らかくなる。下層
部には砂質が混入する。
- 11a. 黄褐色 土色は黄褐色である。含水率が高く、含水率が高くなると、地盤が柔らかくなる。
- 11b. 黄褐色 土色は黄褐色である。含水率が高く、含水率が高くなると、地盤が柔らかくなる。
12. 黄褐色 土色は黄褐色である。含水率が高く、含水率が高くなると、地盤が柔らかくなる。
1. 黄褐色土 砂質や砂を多く含む。下層には砂質の分離がある。
- 1b. 黄褐色土 砂質や砂を多く含む。下層には砂質の分離がある。
- 1c. 黄褐色土 砂質や砂を多く含む。下層には砂質の分離がある。
2. 黄褐色 土質は砂質から区分される。砂質や砂を多く含む。下層への移行部では
砂質が、土質の砂から区分される。砂質や砂を多く含む。下層には砂質の分離がある。
3. 黄褐色土 上層部は砂質を多く含む。下層部は砂質を多く含む。下層には砂質の分離がある。
4. 黄褐色 土質は砂質を多く含む。下層には砂質を多く含む。
- 5a. 黄褐色 土色は黄褐色である。下層には砂質を多く含む。下層には砂質を多く含む。
- 5b. 黄褐色土 ややとして砂質があり、上層部に付する層を含む。下層には砂質を多く含む。
- (註) 1-1' は、土質は層状に土質したのと想われる。5a-5b は、下層に下層と分離するがそのあり方の點が異なる。

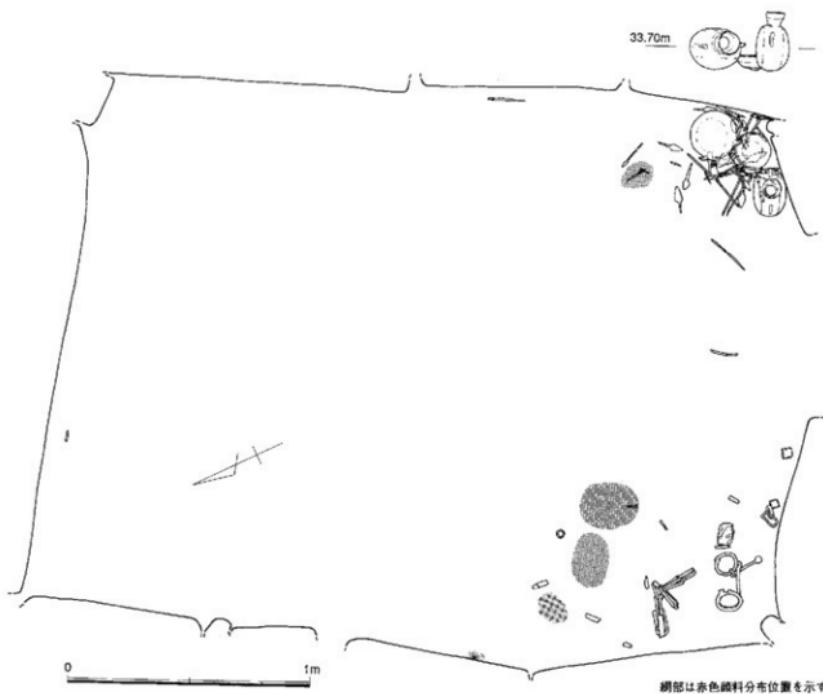


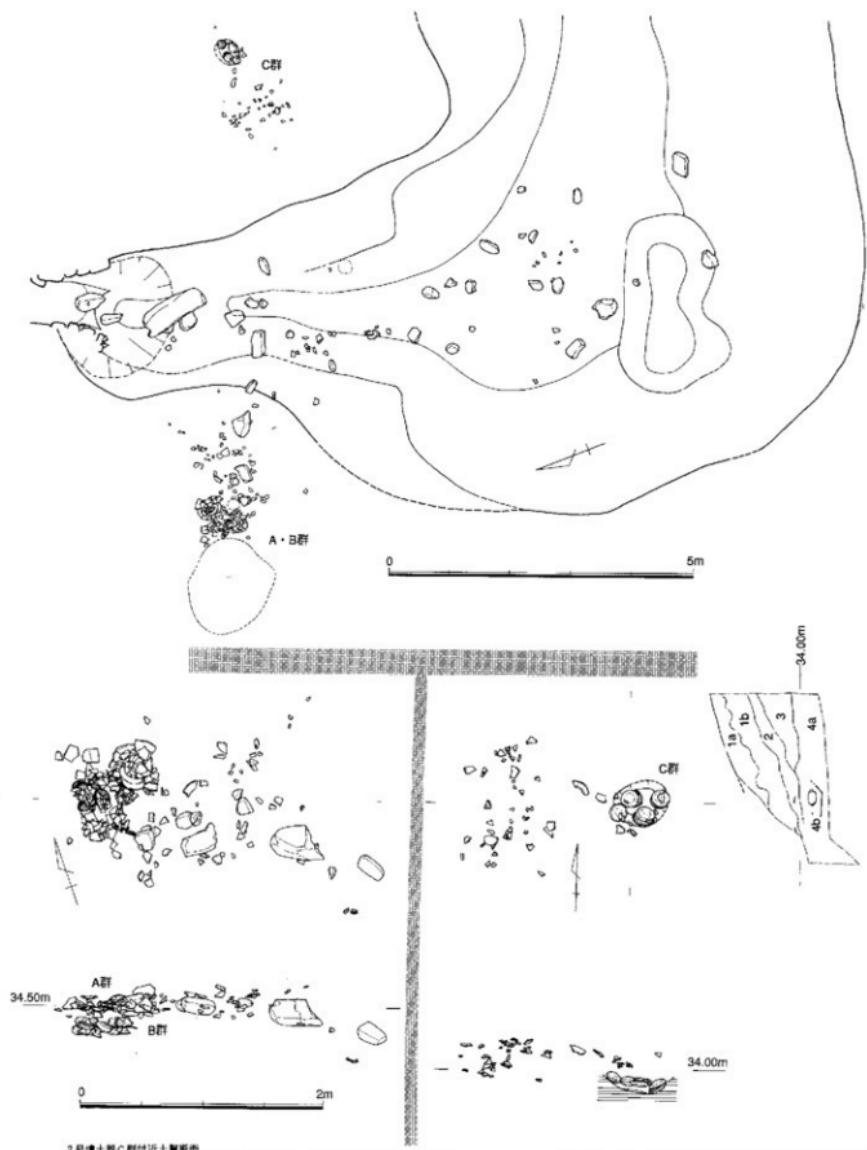
Fig.26 桧原2号墳石室内遺物出土状況 (1/20)

土と見られた。最終埋葬は墓道を大きく開口することなく、狭道開口部の前面に長さ約1.5m、幅約2.0mの掘り方を設け、閉塞に達している。なお、層として区分できなかつたが、5d層中の下部に硬くしまった面があり、掘削面と作業面の差を示すものかとみられた。6b, 6c, 8a~h層は9, 11層を切り、墓道上～中部に堆積する。上部は土壤化が進むが、基本的に黒色土と褐色土の互層からなり、人為的な埋め土と見られた。最下部の8h層は上面が硬くしまり、何らかの作業面と見られた。この面の延長は仕切石Cの底面に向かう。こうした点からこの埋土も埋葬にともなうものと見られた。9b, 10, 11b層は墓道底面の埋土であり、下半部に炭化物片を含む。初段階の埋葬にともなう埋め土とみられた。

なお、墓道上部から周溝内の埋土（1～4, 5a, 6a, 8a, 9a, 11a層）は全て二次的な流入土と土壤である。

4) そのほかの関連遺構 (Fig.21)

墳丘盛り上中ならびに地山整形面に掘り方や炭化物、焼土を含む遺構が認められた。SK01は石室北側に位置し、平面隅丸長方形で長さ5.5m、幅3m、深さ0.8mを測る。床面には焼土、炭化物が充満している。その他の土壤は平面円形で径1.5m以下、深さ0.3m以下である。墳丘築成に伴う土取り、炭化物作り、墳丘構築に関わる儀礼などの性格が考えられよう。



2号墳土群C群付近土壌剖面

1.a.褐色土(腐植土) 下層へは漸移的変化を示す。植物根等による下位層への入り込みが著しい。硬くしまる。粘性なし。(現表土)

1.b.褐色土(腐植土) 上層から更に土炭化進む。硬くしまりはあるが、1a層よりも軟らか。粘性あり。(現表土)

2. 黒褐色土 上層部、下層部が明確に分離できる。硬くしまり粘性高い。炭化物を若干含む。(炭化度高か?)

3. 茶褐色土 上、下位層が明確に分離可。花崗岩バイラン土がブロック状に多量

に混入する。硬く、しまりあるが、粘性なし。炭化物片を若干含む(2層よりも多い)。(盛土)

4.a.黒褐色~褐色土 上部に薄く茶褐色土がのるが、下位に行くにつれて色調が漸移的に明るくなる。茶褐色地の土をブロック状に若干含む。(多くもあり)

4.b.茶褐色土 やや軟らか。炭化物も若干含む(3層より少く2層より多い)。

Fig.27 桧原2号埴埴丘・前庭部遺物出土状況 (1/80・1/40)

なお、墓道の上部に配石が見られる点は注意される。配石は遺物A群から墓道まで約4mに6個の疎を並べている。石は花崗岩亜円礫であり、長軸が0.3~0.5m程度である。検出される標高は墓道部がやや下がっているものの標高34.0~34.5mであり、C群に近い位置は攪乱があり、この配石が続いているかは不明であるが、本来A群とC群を繋ぎ弧状に巡っていたと考えられる。また、墓道開口部から1.0~1.5mの位置に人石がある。石は6層群の上位にあり、長さ1.2m、幅0.5m、厚さ0.3mを測る。開口部正面であり、最終埋葬の掘り方がこの部分から掘り込まれていてことからみて、何らかの表石であった可能性がある。

5) 遺物の出土状態 (Fig.26,27)

石室は早く開口していたと伝えられ、副葬遺物は失われていると予測された。実際玄室北側が荒され、床面は敷石まで抜かれていた。しかし南半分の床面には敷石が残り、床面に多くの副葬品が出土した (Fig.26)。石室内の遺物は大きく二群に分かれる。玄室南東隅部には鉄鎌30点余りと須恵器提瓶2点、高杯蓋1点が集中して出土した。鉄鎌は床面に密着し、先端や基部を揃えることなく置かれている。提瓶(3)は袖口にもたせて直立させ、提瓶(4)は横置きとし、高杯蓋(1)は受部を上向きに据え置いてある。調査時の所見では鉄鎌を器台かわりに配置し、これらの須恵器を設置している。玄室南西隅部付近には馬具(轡、鏡、交具ほか)、鉄斧、弓金具、やや離れて耳環、刀や鏃、鞘金具の破片が出土した。これらは敷石上に分布し、留金具は敷石間の隙間に落ち込んでいた。この他には東側壁に添って鉄鎌1、奥壁に添って鉄鎌片1が出土した。また、西側壁の敷石上に赤色顔料が数カ所にみられた。赤色顔料は墓道部仕切石A-B間の敷石上にも少量認められた。このほか、石室内埋土中から須恵器高杯軸部(2)が出土したが、これは石室外からの二次的な流入と見られた。

墳丘からも遺物の出土があった。集中するのは墓道の両側墳丘上であり、出土状態から墓道西側をA群、B群、東側をC群ととらえた。

A、B群は、墓道端から西に2m離れた場所を中心とする。両者は重複し、A群が標高34.4~34.5m付近に、B群が34.25m付近をそれぞれ底面とする。A群は据え置かれ、破碎した須恵器壺大小2個(13,14)を中心に、須恵器杯蓋(5~10)、壺(11)、壺(12)の破片が散在する。壺は締まった黄褐色上に凹面を造り、底部が正置していた。B群は須恵器有蓋高杯6個と鉄鎌、碧玉管片1からなる。高杯はA群壺の真下に位置する。東西方向に3個二列に正置してある。高杯は南西端の1個(25)のみ蓋がなく、他の5個(15~24)は蓋をしたままである。なお、B群高杯(25)は形態、法量からみて石室内にある高杯蓋(1)が本来のセットであったと考えられる。B群高杯は互いに寄り添うように接するところから、検出はできなかったものの配列分布域の大きさに近い埋納土壤の中に据え置かれたものと見られた。鉄鎌、碧玉片はこの高杯の南側20cmの位置で標高34.3mに平面的に出土した。A、B群は合わせて積み上げたのではなく、B群配列後、埋め土をおこない、その後A群の形成があったとみられる。両者の時間的関係は調査で明らかにできなかつたが、両者の間は10cm以下と埋土が薄いにもかかわらず、配列に乱れがない。両者の埋置は連続的な行為ではなく、一定期間(どの程度かは不明だが)の時間的な間隔があったと考えている。

C群は、墓道端から東へ3m離れた位置を中心とする。墳丘盛土に埋納土壤を検出した。土壤は東西主軸の平面稍円形であり、東西0.5m、南北0.4m、深さ0.2mを測る。土壤内には須恵器蓋杯が4個、菱形に配列埋置されていた。杯蓋(26~33)は全て蓋をつけたまま正置されている。また、この土壤の西側に須恵器片の散布がみられた。須恵器は杯蓋(34,38)、無蓋高杯(35,39)、高杯蓋(36,37)、壺(40)などがあった。

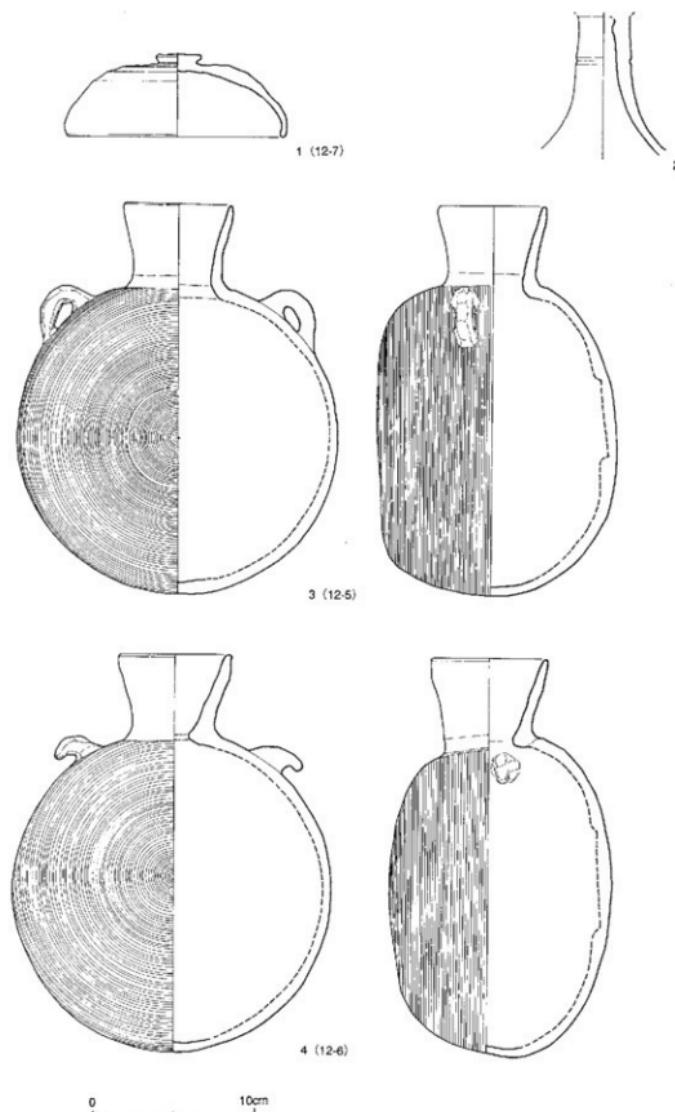


Fig.28 桧原2号填出土遺物 (1) 石室内 須恵器 (1/3)

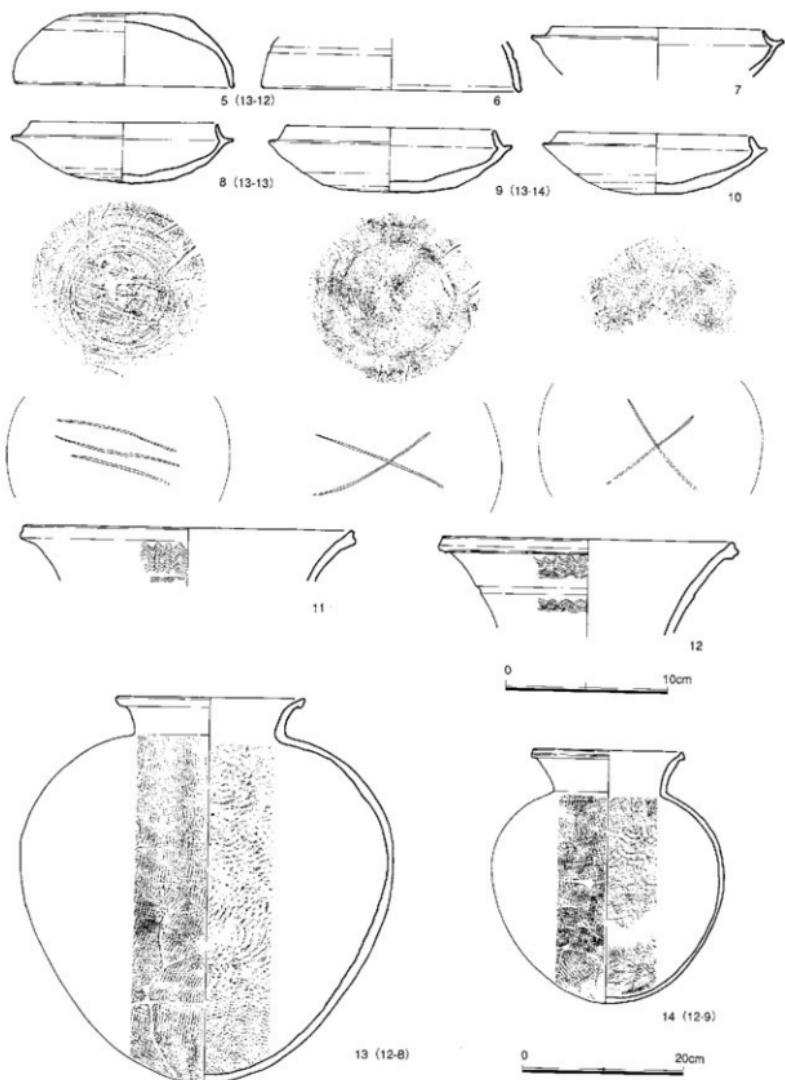


Fig.29 桧原2号墳出土遺物(2) A群 須恵器(1/3・1/6)

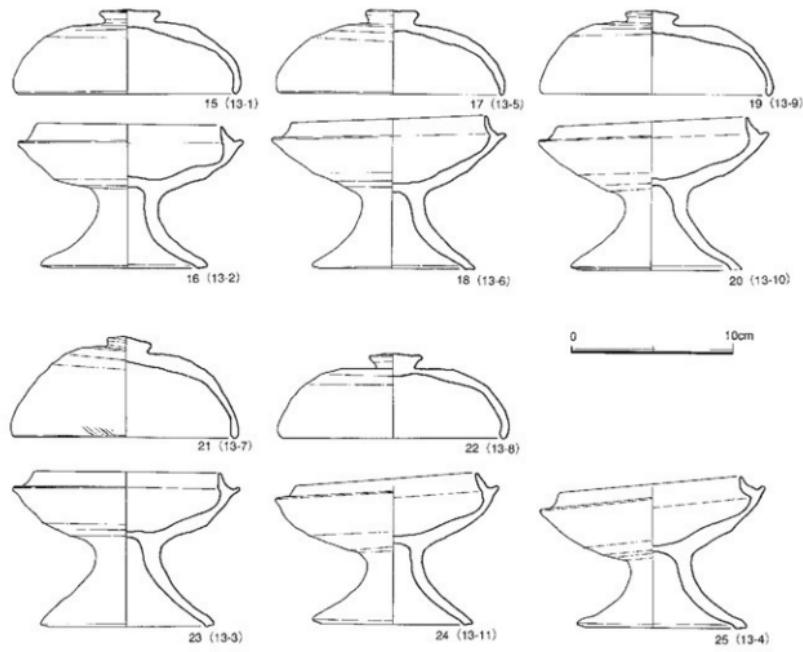


Fig.30 桧原2号墳出土遺跡（3）墳丘B群 須恵器（1/3）

この他に墳丘東斜面から、須恵器片が少量出土している。須恵器は杯身(41)、壺(42)、甕(43)などがある。

本古墳では墓道内から遺物の出土はほとんどなかった。最上部の6b,8a層に少量の須恵器片をみたのみである。これらは墓道両側の土器群からの二次的流入と見られた。墓道の前庭をなす墳丘南側の周溝内から少量の須恵器類などが出土した。これらは埋上5,6,8層を主に散漫に出土した。須恵器には杯蓋(44,45)、杯身(46~48)、壺(49,51)、甕(50)、器台(52~54)がある。

なお、周溝内3,4層中から黒色土器B類椀(55~57)が出土した。また墓道上部の4層中から鉄滓1点が出土している。何れも遺構は伴っていない。鉄滓は拳大の製鉄（精錬）滓であり、本古墳に直接伴うものか、黒色土器と共に古代以降の流入品であるかは判断できなかった。

6) 遺物 (Fig.27~40)

1.須恵器

須恵器は52個体を図化した。これ以外にも杯類や甕・壺類に個体識別できたものもあるが、図化に耐えず報告していない。それでも出土個体の総数は70個前後と予測した。器種ごとに蓋杯はC群で完形の4セットが出土した他は、全て破片である。4セット以外で図化できたのは杯蓋5、杯身9がある。これらの蓋杯は形態、法量から大きく三類(I~III類)に区分できる。I類は蓋外面に凹線があり、蓋で径15cm以上、身で径14cm以上と法量が大きい。口唇部内面に段をもつものがある。蓋(6)

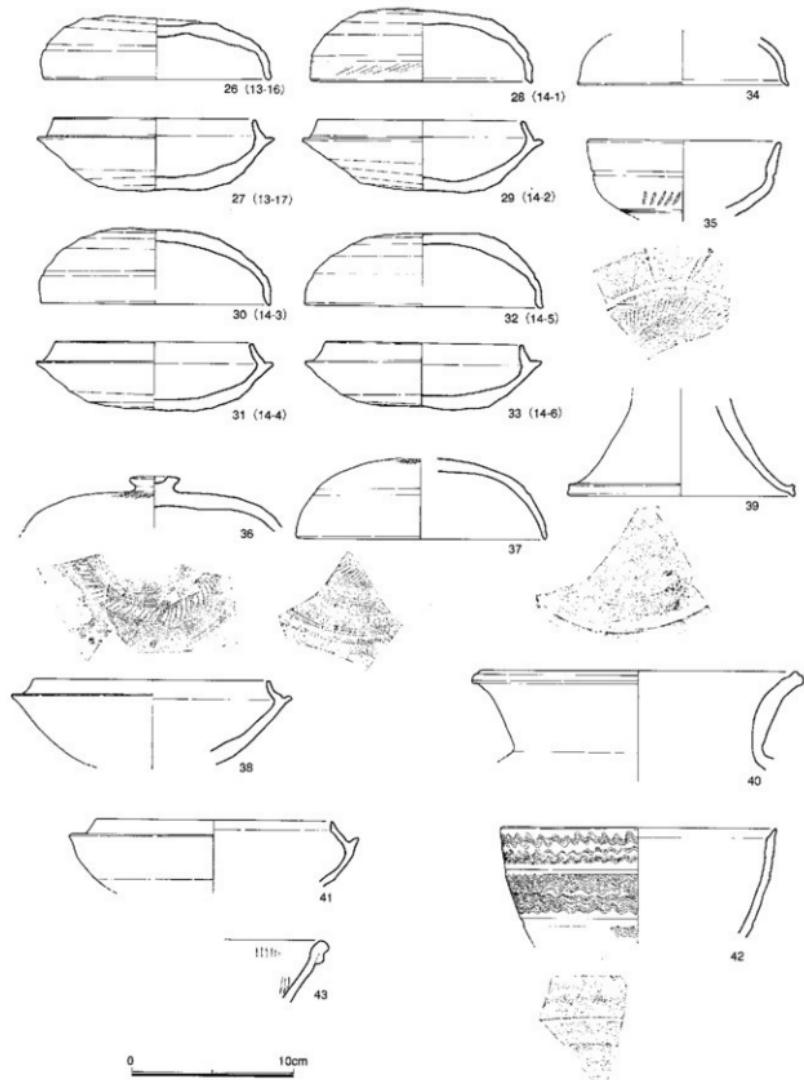


Fig.31 桧原2号墳出土遺物(4) 墳丘C群 須恵器(1/3)

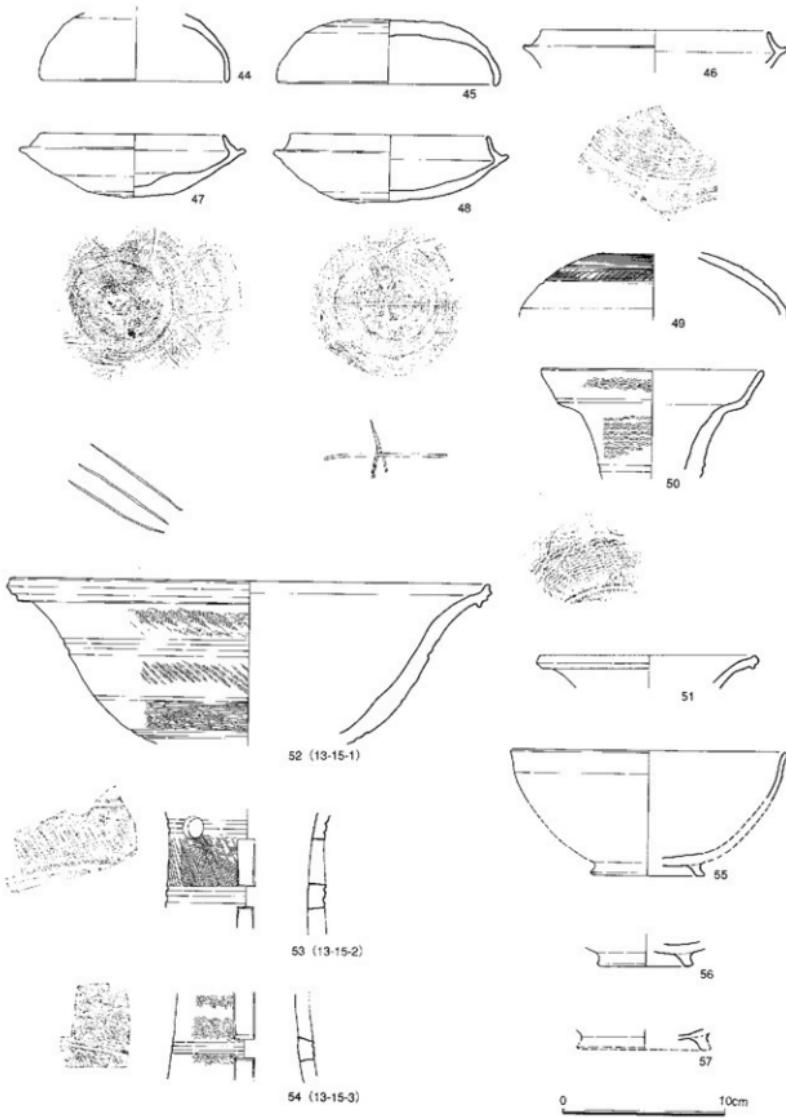


Fig.32 桧原2号墳出土遺物(5) 墓道・前庭部 須恵器他 (1/3)

と身(38,41,46)がある。Ⅱ類は蓋で径14cm前後、身で径12cm前後である。底面のヘラ削りは広く丁寧である。C群の蓋杯(26~33)のはか、蓋(5,45)と身(7~10,48)がある。Ⅲ類は蓋のみであり、口径13cm以下と小型である。34,44がある。有蓋高杯はB群と石室内出土蓋からなる6セット以外は破片である。6セット以外で図化できたのは蓋2、軸部1である。口径が15cm以上と大きく、丁寧な作りの36,37をⅠ類、B群をⅡ類とする。無蓋高杯は杯部1、脚部1である。2は長脚二段であるが、透かしがなく、小型の器種である。提瓶(3,4)は出土状態から同時期の供献とみられるが、3は取っ手が環状をなし左右調節形状が異なるなどより古い特徴をもち、4は退化した牛角取手で対象の胴部形となるなど新しい特徴をもつ。壺は全て破片であり、口縁部3と肩部1がある。口縁部でみると古式の特徴をもつⅠ類(42)と新式の特徴のあるⅡ類(12,51)に分けられる。甌は1個体がある。器台は全て破片である。52~54は胎土、焼成などから同一個体と見られるものである。52は受部であり、53,54は軸部の破片である。54は小破片からの復元のために直径が小さく推定されたかも知れない。甌は復元完形2を含む5個体がある。口縁部、口唇部に凹線が残り、装飾性の高いⅠ類(11,43)と簡略化したⅡ類(13,14,40)に区分される。

これらの須恵器は蓋杯を基準として、以下のように編年上おおまかに三時期に区分される。

1期

蓋杯Ⅰ類は形態からやや時期幅があり、小田編年によるⅢA期からⅢB期古相、田辺編年TK10に位置付けられよう。これには有蓋高杯Ⅰ類や壺Ⅰ類、器台が関連するものと考えられる。

2期

蓋杯Ⅱ類は、ⅢB期新相、TK43期に位置付けられよう。これには有蓋高杯Ⅱ類、無蓋高杯、提瓶、壺Ⅱ類、甌、甌Ⅰ類が関連しよう。

3期

蓋杯Ⅲ類は僅かな資料であり、IV期、TK209に位置付けられる。甌Ⅱ類の編年的な位置付けは困難であるがこの時期に関連する可能性がある。

以上のように、出土須恵器を三時期に区分したが、厳密には型式上更に細分される内容をもつ。特に1、2期は明らかに新古で二分できる。しかし、型式上の区分が現実的な時期区分とみることが可能であるが、出土遺構や層位で確かめるための検証資料が少なく、ここではこれ以上に区分することは控えたい。

2.土師器

本古墳からは古墳に伴う土師器は検出していない。前庭部に近い周溝内から古代の黒色土器A類楕が出土している。何れも破片であり、3個体を認めた。55は小破片からの復元であり、誤差がありうるが、径約17cm、器高約8cmとした。風化のために調整は不明である。形態からみて、10世紀後半~11世紀初頭に位置付けられよう。

3.玉

本古墳からは墳丘上の遺物B群に玉1点が出土した。これは碧玉製管玉片であり、片側を半欠し、さらに縦に半裁している。調査時に注意したが、周辺に他の玉や破片を発見することはできなかった。現状は長さ4.4cm、厚さ0.5cmである。復元するなら、本来径約0.8cm、長さ約3cmほどの管玉となろう。穿孔は両側からおこなわれており、古い特徴をもつ。孔内面には穿孔具による条線が明瞭に残されている。

4. 金属品

装身具

耳環 (Fig.33-1.2・PL.16-2-1・2)

左右一対と見られる2点がある。ほぼ同形同大の中実構造で、いずれも現状では緑青に覆われており表面装飾の痕跡も一切無いことから、もともと青銅製であったと考えられる。残りの良い1は外径2.8cm、環の太さ3.5mmを計る。突き合わせ部分は1mm程開いているがやや欠損が見られることから、本来は殆ど隙間がなかったものと思われる。

鏑子 (Fig.33-4・PL.16-2-4)

一般に鏑子(ジョウスあるいはショウス)と呼ばれるビンセット状の鉄器である。幅の狭い鉄板を折曲げ、中央頂部に環を作り出している。この種の遺物は弥生時代から古代まで長期間にわたって見られ、その用途については毛抜き、簪といった装身具説や、初期馬具の鏑とする説があるが(三島1977・橋口1989)、ここでは本例も含め出土する時代や状況から見て装身具の一種に分類した。他の出土例では熊本県龟ヶ妻ノ花地下式横穴墓例(三島1977)や福岡市の貝花尾1号墳出土例(飛高他1977)のようにくびれ部に針金を巻き付けたり、遊環を取り付ける例などが見られるが、本例ではそのような附属品は見られず、また有機質の痕跡も無い。大きさは現存する部分で長さ5.5cm、復元しても10cmに満たないものと考えられる。追葬の際の片付けや盗掘により二次的な移動があるため、出土位置から本来の使用部分を推測する手掛かりは失われている。

工具

鏃 (Fig.33-5・PL.16-2-5)

破片が2ブロックあるが、同一個体と考える。図左側の破片は図の左方において刃部が終わり、そこから数cm刃のない部分が続き、急激に細くなり茎に至る。また右に行くに従って若干幅が細くなっている。幅は最大で3cm、2片を合わせた現存長は約19cmである。刃は両側につくが、片側はピッチが粗いが(1cmあたり3~4本)明瞭に残り、反対側は細かく(1cmあたり6本前後)不明瞭といった違いがあり、何らかの使い分けがあった可能性も考えられる。刃の形状は二等辺三角形で、この時代の鏃の特徴に合致している。木質等有機物の遺存は観察できない。

鉄斧 (Fig.33-6・PL.16-2-6)

鍛造の袋状鉄斧である。鏃により実測不可能な状態に膨らんでいるため、略図と写真による報告に止める。計測可能な部分では全長10cm、刃部幅3.8cm、袋部の現存長径4cmを計る。

武器

鉄刀 (Fig.33-7~10・PL.16-2-7~10)

鉄刀の刀身とそれに伴うと考えられる刀装具が数点ある。

7は刀身の切先部分で最大幅3.1cmを計る。厚さは鏃による層状剥離と膨張のため計測不可能である。切先の付近に狭い範囲ではあるが鞘のものと思われる木質が付着している。

8は鍔である。全体の3割程度しか無いが、片側の尖った倒卵形に復元できる。厚さは外側と内側で異なっており、それぞれの端部で6.5mm、3mmである。

9と10は責金具であるが、断面矩形の鉄棒を曲げ、その両端を叩き合わせて輪にした構造で、外形は梢円形を呈する。刀装具か馬具の可能性が想定されるが、決め手はなくとりあえず前者に分類した。

弓金具 (Fig.34-11~15・PL.16-2-11~15)

2号墳からは5点が出土している。1号墳のものより遺存状況は良好で、1点が中央部で欠損している以外は完形である。しかし木質の遺存状態は悪く、広葉樹の組織が極一部で観察できるものの、あとは辛うじて弓の幅を想定できる程度である。11と14に若干皮金の折り返しが見られるがそれは

と明瞭ではなく意識的な成形も見られない。各部の計測値はTab.8-1を参照されたい。

鉄鎌 (Fig.34-16~36-79・PL.17・18-2-16~79)

ある程度形の分かれるものが41個体あり、それ以外に茎などの部分的な破片が幾つか見られる。大まかには長頸系と広根系に大別される。更に長頸系はA~Eの5類に分類できる。

A類 (16~29) は鎌身が片切刃造で鎌身関部が直角に成形されている柳葉形を呈する。頭部はまっすぐに伸び、範被は棘状に突出している。一部が欠失しているものも含めて13本あり、最も数が多い。

B類 (30~31) はA類と似たような外観を呈するが、鎌身関部が無いという違いがある。

C類 (32) は鎌身の平面形が長三角形気味で、片鑄造となっている。

D類 (33) は鎌身が短く、鋸のため判然としないが片丸造と思われる。

E類 (34~38) は他の長頸系と若干様相を異なるもので、腸抉をもつ長三角形の鎌身を持つ。長頸ではあるが頭部が4cmと他に比べて短い。

なおこれら長頸系は杉山分類ではA~D類が長頸鎌群B-IV、E類が長頸鎌群B-IIに含まれる。

広根系はとりあえず鎌身関部の形から大きく3種類に分類した。⁽²⁾

F類 (40~53) は鎌身の平面が長三角形を呈し、鎌身関部より曲線を描いて範被に至る。範被には突出(棘)を有するaと範被に棘を持たないbに細分されるものもあるが、鋸のため断定は難しい。また個体によっては刃部側線が平行、開き気味、鎌身平面が五角形に近いといった細かい差異が認められるが、刃は研ぎ方に拘っても形状が変化するため、分類は行っていない。

G類 (54~55) は鎌身関部が直角に成形されている。この中でも55は54に比べて鎌身の下部が開き、鎌身関部は直角より更に若干の角度が付いて腸抉気味になるという違いが見られる。

H類 (56) は明瞭に腸抉りが成形されている。

以上広根系は杉山分類ではF類が三角形鎌群B-I、G類が同C-I、H類が腸抉三角形鎌群Aにそれぞれ対応するものと考える。

この他は茎部分の破片である。ただし57と58は茎に相当する部分に有機質の付着が認められるものの他に比べて異様に太く、矢竹に収まるには無理があるようだ。それ以外は通有の太さで、繊維質の巻が観察されるものも少なくない。また79は長三角形の鎌身破片と考えられる。80は用途不明の棒状鉄器である。

馬具

轡 (Fig.38-81・PL.18-2-81)

長方形の矩形立間が付く鉄製素環鏡板付轡が1点出土している。一見後期古墳に一般的な轡であるが、この轡では引手の長さが図の左が17cm右が12cmと左右で極端に異なっている。また図の右側の引手は鏡板と接続する環と手綱を連結する環が90°捻れて作られており、左右で非常にアンバランスな構造となっている。鏡板は両方とも途中で破断し開いているが、復元すると長径9cm程度になるものと思われる。各部材の断面形はかなり鋸化が進み本米の姿からかけ離れているが、鏡板は円形、銜の部分は方形に作られていたようである。引手も面が形成されているようであるが鋸による膨張で不明確である。

引手は鏡板と接続する環と手綱を連結する環が90°捻れて作られており、左右で非常にアンバランスな構造となっている。鏡板は両方とも途中で破断し開いているが、復元すると長径9cm程度になるものと思われる。各部材の断面形はかなり鋸化が進み本米の姿からかけ離れているが、鏡板は円形、銜の部分は方形に作られていたようである。引手も面が形成されているようであるが鋸による膨張で不明確である。

鐘 (Fig.39~40・PL.18-2-87 ~ 89)

木芯鉄板張三角錐形壺鐘の金具が左右一対分2点ある。いずれも折り曲げられた状態で接着しており、鍔具の下に二連の兵庫鎖を介してハの字に開く板状の釣り金具が付く。全体伸ばすと金具部分だけで約42cmになる。全て鉄製である。吊り金具は片側が欠失しているが、その内側には僅かながら木質の遺存が認められる。木質部分固定のための鉄は等間隔に3ヶ所打たれており、頭は円形で足は断面方形である。

鐘の部品としてはこの他に、もう一点吊り金具部分の破片がある(89)。いずれにも直接接合しないため、どちらに属するものは不明である。ただし破片上端は両側の外形ラインが狭くなりはじめた部分にあたり、しかも裏面の木質の残存状況を見るとこの部分で終わっていることから、ほぼ上から下まで残っていることが見て取れる。ところが現存長は鉄を除いて約10cmと、全体の残っているAの同じ部分までの17cmと比べて極端に短い。先端が欠損しているBでも12cm残っており、鉄釘の位置から考えると少なくともあと3cm以上は続くと考えられる。また鉄も2本分しか無く別個体の可能性も考えられ無いが、他に関連する破片も見られない。一度くびれて上に続くのか、または左右非対称であったかは不明である。この破片では鉄の残りが良く、断面方形の足が約1.2cm鐘本体に打ち込まれたことを示している。

鉄地金銅張方形飾り金具 (Fig.38-82.83・PL.18-2-82、83)

ほぼ同形同大のものが2点出土している。一边約4cmで、方形の鉄の地板に金銅板をかぶせ、端部を僅かに折り返して固定している。更に4ヶ所鉄を打ち、皮帶等に固定したものであろう。裏面には有機物らしき痕跡が残る。2点分8ヶ所の鉄の内、只一ヶ所残る鉄頭の形状や材質は鉄のため詳しく分からぬ。しかし類例を見る限りは円頭に金銅板をかぶせた構造と推測される。鉄の足は断面矩形を呈する。

鉄製鉗具 (Fig.38-84.85・PL.18-2-84、85)

2点ありほぼ同形同大であるが、1点は刺金が失われている。外枠は断面凹形で綫長のカマボコ形の中央部をやや絞ってくびれさせた外形となっている。刺金は板状で基部が外枠に巻き付けられている。他に出土した馬具の状況から見て頭絡の固定に用いられたと考えるのが最も自然であろう。

鉄製帶金具 (Fig.38-86・PL.18-2-86)

馬具に属すると考えられる、長方形の鉄板に鉄が2ヶ所付けられた金具が1点ある。長辺の片側が鉄のため破損しているか否か分からぬが、もし破損していれば、辻金具の脚の可能性もある。

註

(1)しかし、その場合もどの部分に用いられたか今一つ判然とせず、刀身の幅と比べてその内径がややきつい印象は否めない。刀装具であれば少なくとも鞘に関連するものでは無く、柄の部分に用いられたと考えられる。この他に刀身から剥離したと思われる板状の破片が数点あるが、固化していない。

(2)本来は分類条件として鐵身の断面形や範被の形状といった要素も加味されるべきであるが、鉄のため本来の姿が失われていることもあり、広義系の分類には特に観察者の主觀が多分に影響せざるを得なかった。分類に関する責は全て筆者に帰するものである。

文献

飛高憲雄・井沢洋一編1977『席田遺跡群第1次発掘調査概報』福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第44集
福岡市教育委員会

三島格1977『貝をめぐる考古学—南島考古学の「視点」』学生社

櫻口達也1989『6馬具』『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 福岡市教育委員会

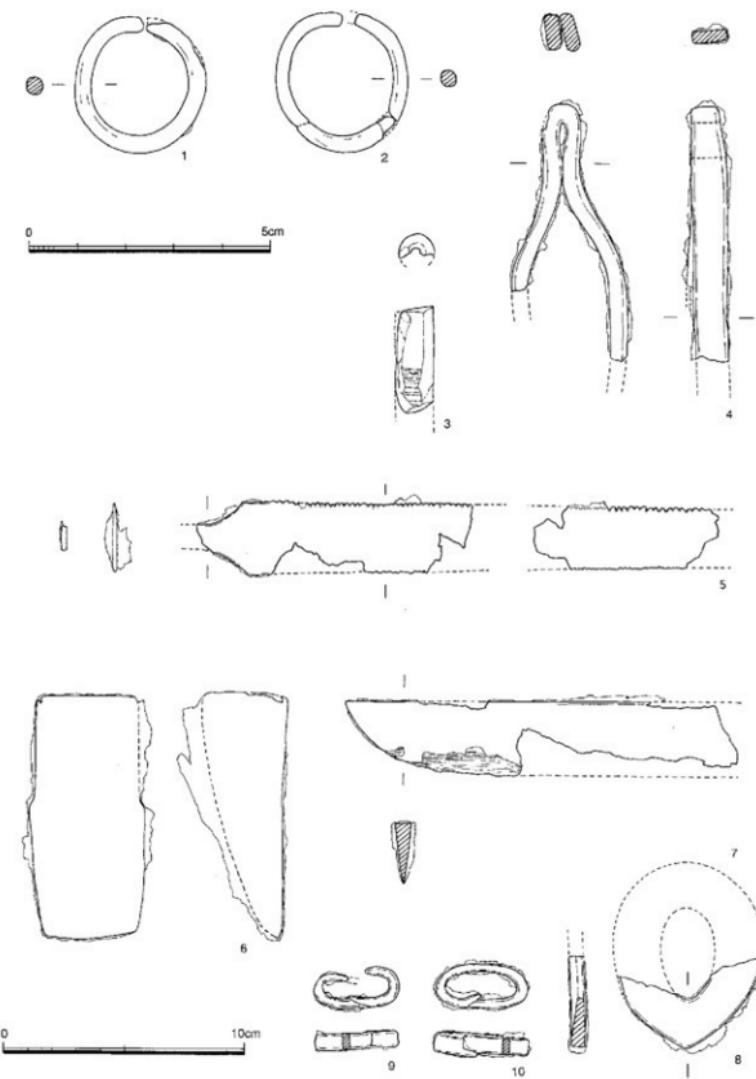


Fig.33 桧原2号墳出土遺物（6）玉・金属器1（1/1,1/2）

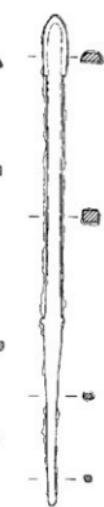
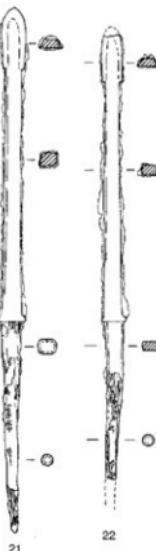
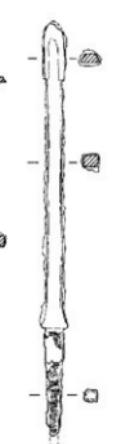
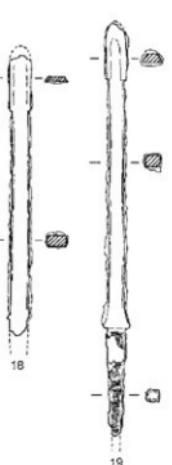
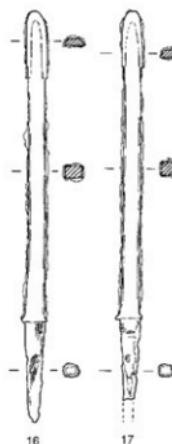
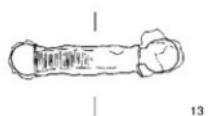
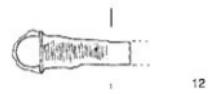
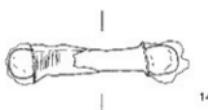
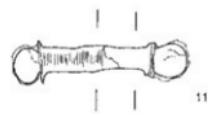


Fig.34 檜原2号墳出土遺物(7) 金属器2 (1/1,1/2)

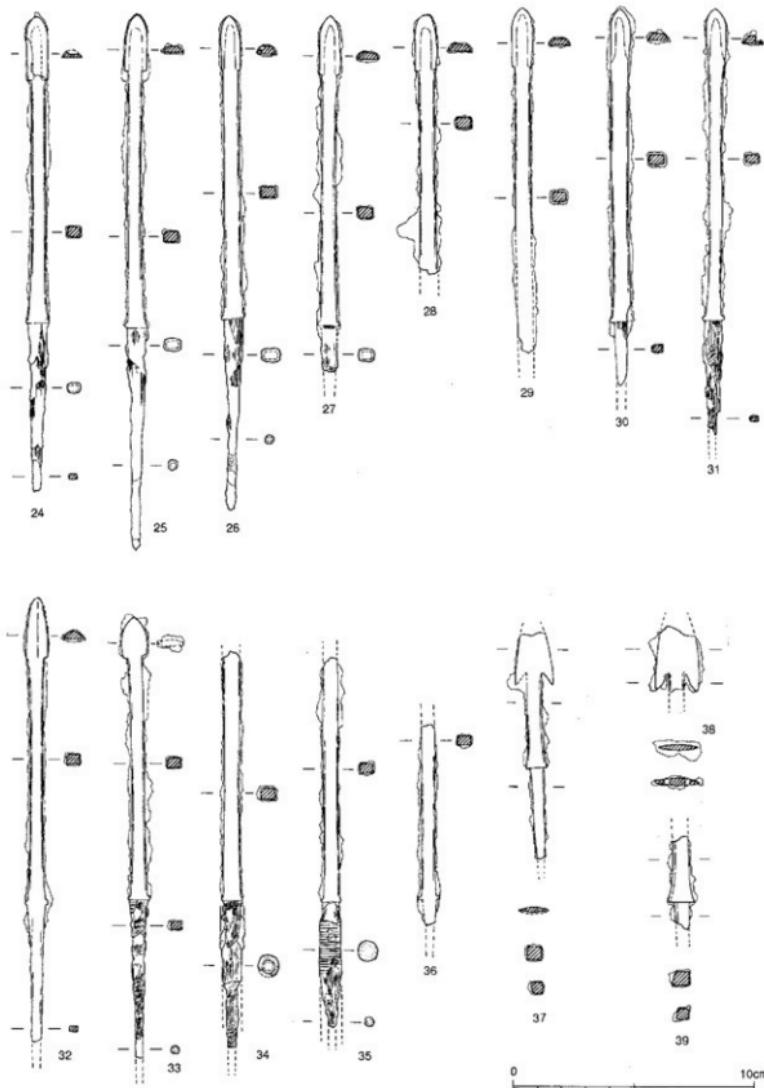


Fig.35 檢原 2 号填出土遺物 (8) 金属器 3 (1/2)

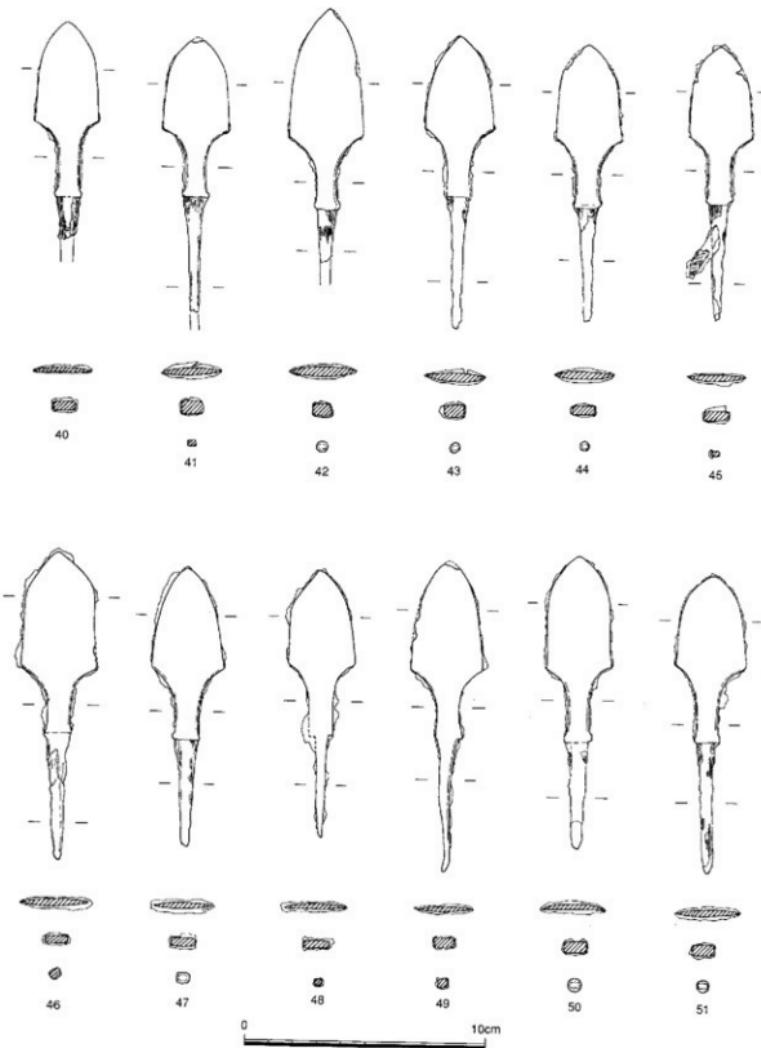


Fig.36 檢原 2 号墳出土遺物 (9) 金属器 4 (1/4)

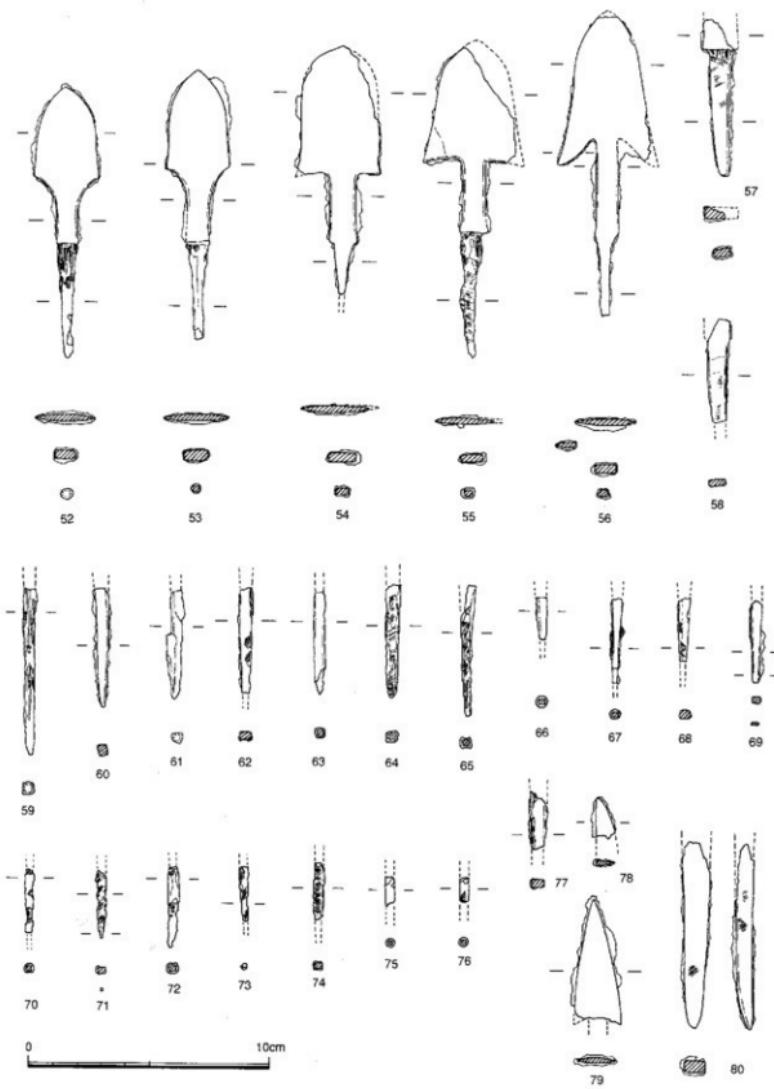


Fig.37 桧原2号墳出土遺物(10) 金属器5 (1/2)

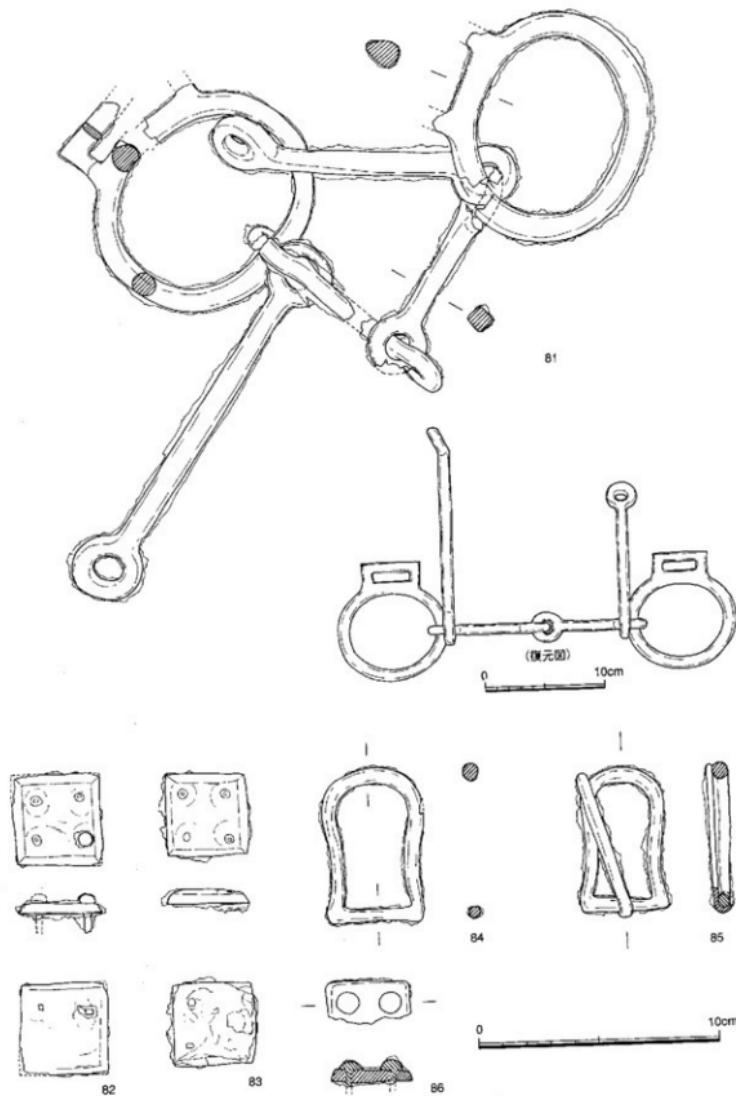


Fig.38 桧原2号墳出土遺物(11) 金属器6 (1/2,1/4)

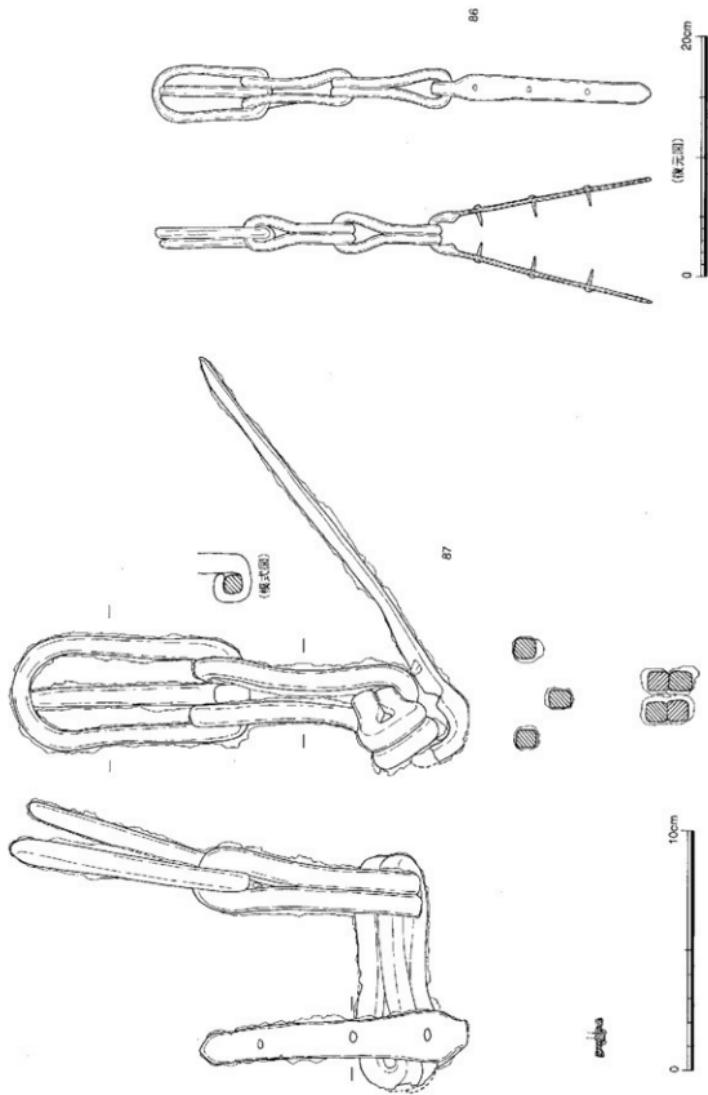
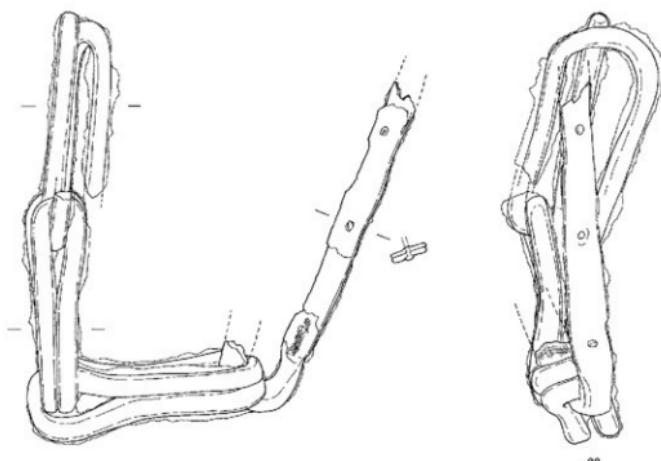
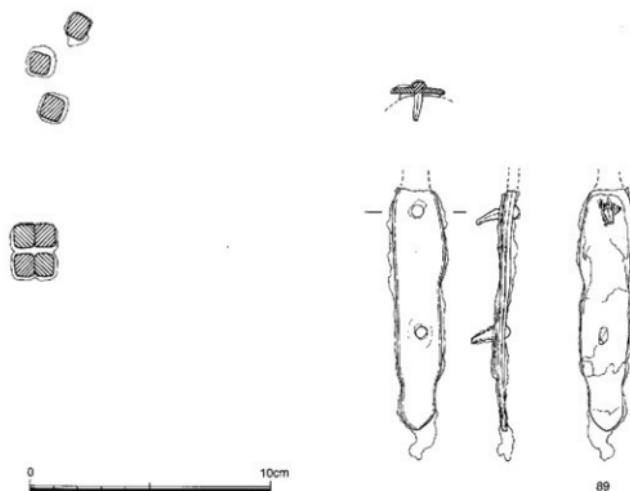


Fig.39 桧原2号墳出土遺物(12)金属器7(1/2,1/4)



88



89

Fig.40 桧原 2 号墳出土遺物 (13) 金属器 8 (1/2)

4、小結

1号墳は墳丘や主体部の破壊が著しい。あえて推定するなら南北20m、東西15m以上の円墳と考えられる。主体部は南に開口する横穴式石室と見られる。横穴式石室は復元から「ハ」の字形の羨道部をもつついわゆる初期横穴式石室と復元した。石室規模は長さ3.2m、奥壁幅1.5mである。墓道は一旦南に伸び、直角に振れて東側の谷に向かう。これは2号墳も同様であり、その谷添いに共通した幹道の存在を予測させた。

石室内からは人骨、副葬品などが比較的多く出土した。埋葬人骨は後章の分析によると4体分となるという。それらは本来の埋葬状態を示さず、全て集骨されていた。これは風化のために保存状態が悪く、集骨が一時期になされたものか、数回に及ぶものかは不明である。また、性別、年齢、埋葬順位などの詳細についても明確でない。副葬品からみると、石室中央部に耳環、玉の分布があり、本来の装着状態を保っていた。骨の遺存はなかったが、集骨との関係でみると、集骨後の最後の埋葬がここにあったと予測される。したがって、本古墳では最低5体の埋葬があったと考えられる。古墳の築造や埋葬の時期については、出土遺物や墓道埋土、閉塞が失われており、検討が困難である。出土遺物のみでは、墳丘下部から出土した須恵器類がⅠ期新相～Ⅱ期（MT23～TK15）のものであり、古墳構築や初葬時期を示しているとみられる。また、墳丘採集遺物にⅢA～ⅢB期（TK10～TK43）の須恵器があり、追葬や墳墓儀礼の下限を示しているとみられた。あえて年代を与えると、1号墳は6世紀初頭から6世紀後半までの経営であったと考えられる。

2号墳は全長約40mの前方後円墳である。墳丘は後世の擾乱で痛んでいるが、前方部一段、後円部二段築成と復元できた。各部は、前方部幅約15m、長さ約15m、くびれ部幅約12～13mとみられる。後円部は正円形ではなく、東西約28m、南北約25mの楕円形である。高さは後円部が9m、前方部が3m弱である。墳丘築成は三工程で行われ、石室、羨道の構築と連動していることがわかった。また、段築など墳丘外表面の形成は最後の工程である。墳丘の盛り土にあたって地山面や構築過程に火を焚く行為も認められた。儀礼的な面のみでなく、盛土中への炭化物の供給としての利用も考えた。

主体部は南に開口する单室両袖の横穴式石室である。規模は玄室が長さ3.1m、幅2.2m、高さ2m以上である。これに長さ3.4m、幅0.8m前後の羨道がつく。奥壁と羨道部には巨石とは言えないまでも大きな石材が用いられている。墓道は羨道から約6m延びた後、東へ折れ周溝に連続する。本古墳の石室には東側の谷から入ることになる。墓道埋土と閉塞からみて最低3回の埋葬が予測された。閉塞施設は礫積みでなく、板石を利用して古い特徴を有する。石室内は荒らされていたが、なお副葬、供獻遺物が出土した。馬具、刀、弓金具、複数型式の多くの鉄鏃など被葬者の性格を知る手がかりとなる。また、墳丘や前庭。周溝内から須恵器を主とした多くの遺物が出土した。須恵器は墓道両側の墳丘平坦面に埋置された三群以外は破碎し、二次的に動いたものばかりである。これらの須恵器はおおきく3時期に区分された。1期はⅢA期～ⅢB期新相（TK10）にあたり、すべて墳丘斜面から周溝内での出土である。このなかで杯蓋と器台は古い特徴をもち、本古墳の築造や初葬に関連すると考えられる。2期はⅢB期新相（TK43）で、平坦面のB、C群の埋置土器や石室内の供獻須恵器もこの時期である。とくにB群は石室内須恵器の1点とセット関係があり、同じ儀礼の過程で利用されたと見られた。この時期は墳丘、周溝内での須恵器破碎、散在が多い。3期はⅣ期（TK209）であり、僅かな資料しかない。周溝付近での須恵器破碎行為のはか、墳丘平坦面への甕の据え置き行為が予測された。2期での複数回の埋葬行為はほぼ確実である。3期には墳丘上での儀礼は僅かであるが、馬具等の副葬から埋葬があったことは明らかである。あえて年代を与えると、2号墳は6世紀中葉から7世紀初頭までの経営であったと考えられる。

第2節 桧原遺跡群第3次調査

1、調査の概要 (Fig.41)

調査の対象地は、桧原川の上流部であり、流域の沖積地としては最奥部にあたる。桧原川の東岸、丘陵の西斜面にあたる。対象地は資材置き場として利用されていたが、近年まで水田であった。この水田面は標高約31mであり、桧原川沿いの田面とは1~2mの段差ができている。また、東側の丘陵との間に1m前後の崖があり、開田にあたって、丘陵斜面をカットし造成したと見られた。

調査は試掘トレンチによって遺構が確認された場所を中心とした幅約20m、長さ約60mの約1200m²である。調査ではまず重機を用いて、表土や最近の客土を除去した。なお、水田面埋め立て以降に敷地内に多数のゴミ穴が掘られ、建築廃材などが投棄されており、その処理に苦慮した。それらを除去した段階で東側は造成により遺構は削平され、僅かしか残されていないことが判明した。逆に西側は造成土に覆われ、古墳時代の多くの遺構や包含層が残されていることがわかった。また、調査区南端では埋没した小さな谷が現れ、下部から時期不明の水田面が検出された。このため、当初予定しなかったこの部分の水田の調査も行うことになった。調査は手掘りにより、遺構の検出後、20mを単位とするグリットを設定した。グリットは北東端をA1区とし、西にB区、南に2、3…区とした。なお、土層作成のための深掘りや、攪乱穴の壁面から石器類の出土があった。このために古墳時代遺構調査後、掘り下げた結果、何等の遺構もなく、砂礫層に縄文時代以前の遺物が流入したものと判断した。

調査では堅穴住居は7棟あり、B1、2区に6棟、A3、B3区掘立柱建物3棟、土壙7基、柱穴50数基、溝2条、水田2面を検出した。

桧原遺跡群第3次調査は、1992年12月末に開始し、1993年1月31日に終了した。

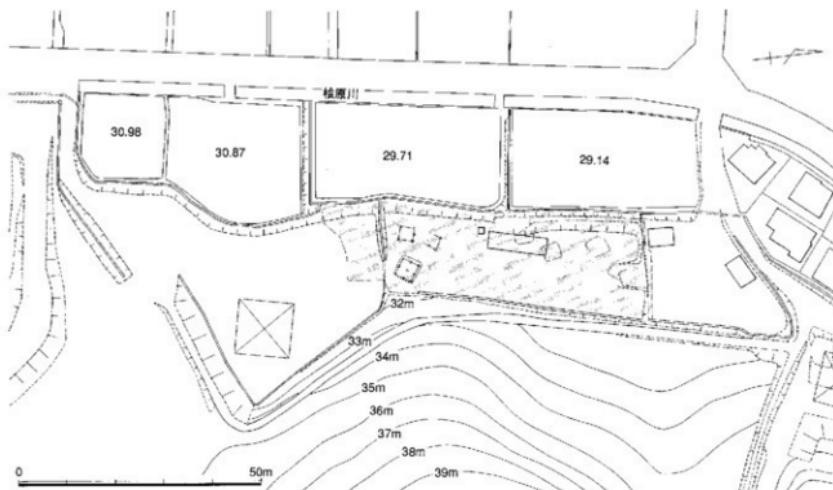
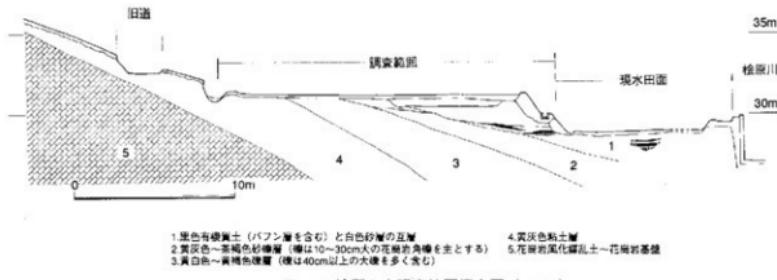


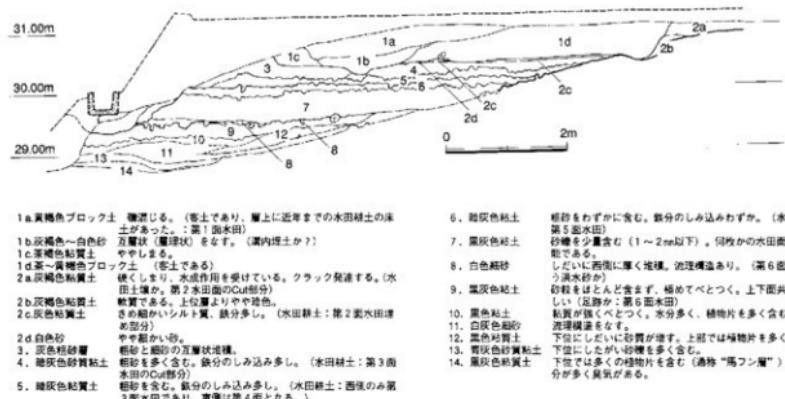
Fig. 41 桧原3次調査周辺地形図 (1/1000)



2、基本的層序 (Fig.42, 43)

桧原遺跡群第3次調査区は、谷部に接する丘陵斜面の端部に位置している。更新世以降の段丘ではなく、緩やかな丘陵斜面に立地している。基盤層は調査終了後、調整池として4～5m掘られた断面で観察した (Fig.42)。それによると調査区の基盤は、花崗岩の岩盤からなる丘陵斜面に形成された崖錐堆積物からなる。これらの堆積物はおおきく4層に区分される。まず第1層は、調査区西半分から桧原川に向かって厚く堆積し、最上層を形成する。黒色有機物層と砂層の交互層である。上部には古墳時代以降とみられる埋没水田土壌も含む。第2層は、砂礫層である。礫は基盤と同じ花崗岩であり、上部では数cm大の礫を多く含み、下位では30cm大のものも多い。さらに分層可能である。本層の上半部に旧石器から縄文時代の石器などの遺物が出土した。第3層は、礫層であり40～50cm以上の大きさの花崗岩礫を多く含む。1mを越える礫もある。礫間は碎石や砂が充填している。4層は黄褐色の粘質土である。丘陵の上方では花崗岩風化土や風成風化火山灰土となり、斜面下方では水成作用を受け、粘土化している。調査範囲内では西側の桧原川寄りで1、2層が、東側の斜面寄りで3、4層が削平により露出している。1～4層は何れも下位にしたがい水分が多く含まれる。

調査区南側で検出した水田部分は先の第1層に含まれている。この部分を細分、図化したのがFig.



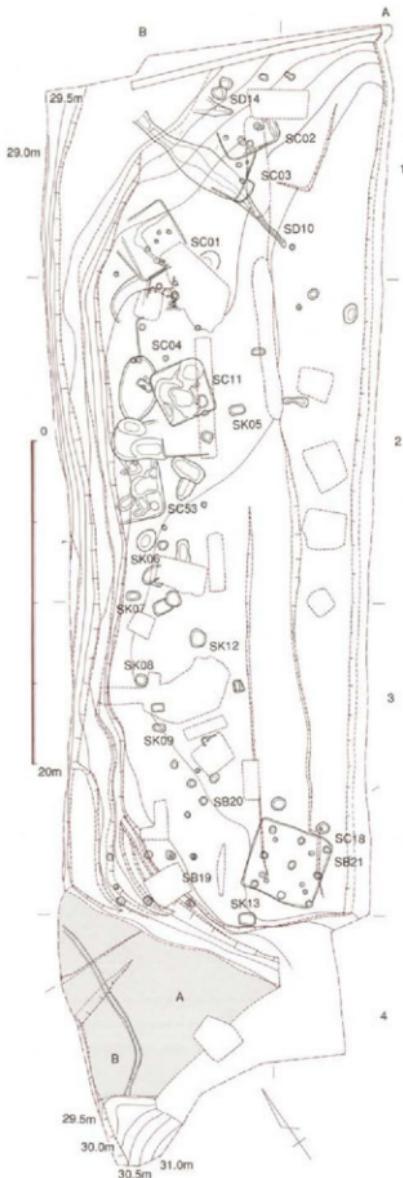


Fig.44 松原 3次調査遺構配置図 (1/300)

43である。ここでは最近の水田まで含めると6面の水田面を確認した。第5、6水田面は自然地形に沿った田面である。第4水田面より上位は斜面を段造成した田面であり、上位にしたがい造成幅が広がっている。

3、竪穴住居 (Fig.45~49)

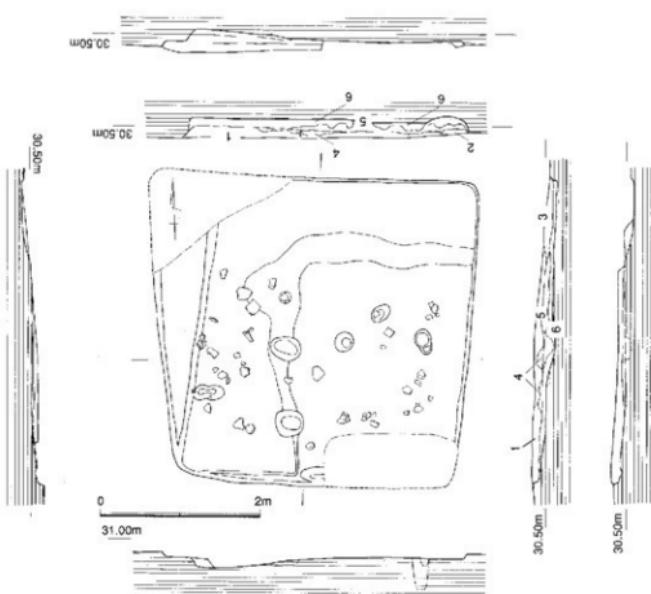
1号住居跡 (Fig.45)

調査区北西側、B1区で検出した竪穴住居跡である。搅乱により北西と南東の隅を破壊している。建物は、N-04°-Eに設けられている。竪穴部は南北3.8m、東西3.4m、深さ0.1~0.2mを測る。西側の床面は一段高まり、壁の方向が異なっている。いわゆるベット状造構とは考え難く、住居の重複か拡張による切り合いとみられる。また、床面を剥ぐと南東側が一段下がっており、方形の深さ0.2mの掘り方となった。床面に柱穴を6本みとめた。東西主軸で中心に近い2本が深いことから、主柱穴とみられた。床面に炉跡は確認できなかった。

遺物は、埋土中から須恵器杯身(Fig.53-1,2)、高杯(3)、甕片(4)、土師器碗(5~11)、甕(15~17)、瓶(14)、支脚(13)、手づくね土器(12)などが出土しており、ⅢB期に比定されよう。

2号住居跡 (Fig.46)

調査区北端、B1区で検出した竪穴住居跡である。南側の3号住居を切っている。北側は斜面状に削平され、南側のみが遺存している。建物は、N-11°-Eに設けられている。竪穴部は南北2.1m以上、東西3.7m、深さ0.1~0.2mを測る。東側の床面は一段やや高まる。南壁に沿って断続的に壁溝が残る。また南壁よりの床面に土壙2基がある。壁に近い1基は長さ0.4m、幅0.3m、深さ0.2mを測り、壁面からやや離れた土壙は長さ0.6m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。床面に柱穴を3本みとめた。東西主軸の2本が主柱穴とみられた。床面に炉跡は確認できなかった。



SC-01土塗断面

1. 青褐色～緑灰褐色土。粗いがはばゆ一の砂粒を多量に含む（細砂を少量含む）。谷筋は下位にしたがい細く均一となる（SC-01砂割田土塗削削面で観察）。実褐色粘土や鈍赤褐色粘土の小ブロックを少量含む。粒子状のものも少量含まれる。また、粗い砂を含む。粘性強。下層には漸移的に変化する。劣化物片は多量に混入する。
2. 黄褐色～灰褐色土。粗いがはばゆ一の砂粒を多量に含む。谷筋は下位にしたがい細く均一となる（SC-01砂割田土塗削削面で観察）。実褐色粘土や鈍赤褐色粘土の小ブロックを若干含む。しかしりく軟質（1層以上複数）である。粘性は強。層別分離は明確である。
3. 地親色土。粗く均一でない砂粒を多量に含む。穂も多量に混入する。地親色（粘土）土をブロック状に若干含む。しかしりくやわらかめ。粘性あり。層別分離は明確である。
- 4a. 鮎灰色土。粗いがはばゆ一の砂粒を多量に含む。しまり弱く、硬い。粘性強。上部質（1層）からの漸的変化は漸移的である。
- 4b. 黄褐色～鯉鰐色土。粗いがはばゆ一の砂粒を多量に含む。軟質でしまり若干あり。粘性ややあり。下段質へは漸移的に変化する。
5. 鮎青色土。（一部鯉鰐色土） 粗いがはばゆ一ではない砂粒多量に含む。軟質でしまりなし。粘性ややあり。
6. 黒褐色土。やや砂質である。

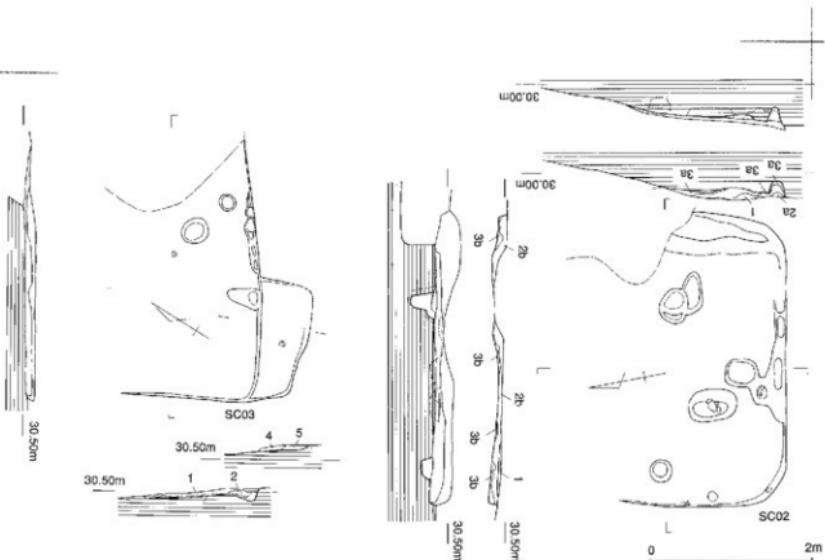
Fig.45 壺穴住居 SC01 (1/60)

遺物は、埋土中から土師器碗(Fig.53-18,19)、甕(20～22)、羽口片(23)などが出土している。Ⅲ B期頃に比定されよう。

3号住居跡 (Fig.46)

調査区北側、B 1区で検出した壺穴住居跡である。北側の2号住居に切られている。北側は斜面状に削平され、南側隅のみが遺存している。建物はおおよそN-30°-Wに設けられている。壺穴部は南北1.7m以上、東西3.2m以上、深さ0.1mを測る。南辺隅部は一段階段状に高まる。その範囲は幅1.5m、長さ0.7mであり、出入り口かと思われる。南壁に沿って断続的に壁溝が残る。また南壁に接して土壙がある。長さ0.4m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。床面に柱穴を2本みとめたが、主柱穴とは考え難い。床面に炉跡は確認できなかった。

遺物は、埋土中から須恵器杯身(Fig.53-24)が出土している。Ⅲ A期に比定されよう。



- SC03 南北土層断面
1. 鮎浜褐色土～黑褐色土：粗い砂粒を多量に含む。黄褐色地土や黄褐色粘土をブロック状に並べて入する。しまりよく硬い。粘性弱い。
 2. 鮎浜褐色土～灰褐色土：粗くばね均一な砂粒を多量に含む。黄褐色土（粗くばね均一な砂粒）をブロック状に並べて入する。下層には漸移的に変化する。軽質でしまり弱い。
 3. 灰褐色土：粗くばね均一な砂粒を多量に含む。黒色土（粗くばね均一の砂粒を多量に含む）を多く含む。しまりなく軟弱。1層との接面は明瞭。区分できるが上位2層からの変化は漸移的である。
 4. 黄褐色土：粗く、均一でない砂粒を多く含む。しまりよく硬い。粘性あり。
 5. 黄褐色土：粗く、均一でない砂粒を多く含む。しまりよく硬い。粘性弱い。
- SC02 土層断面
1. 黑褐色土：粗く不均一な砂粒を多量に含む。黒褐色土（粗くばね均一の砂粒がつまる）をブロック状に並べて入る。下層には漸移的に変化するが、区分は弱い。
 - 2a.灰褐色土：粗いが均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。弱い粘性あり。下位置では漸移的に変化する。
 - 2b.灰褐色～黄褐色土：粗く均一でない砂粒を多量に含む。下位にしたがって粗くばね均一の砂粒が増す。しまりよく柔軟。粘性ややあり。炭化物を若干含む。
 - 3a.块状褐色～灰褐色土：粗くばね均一の砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。上層との分界は明瞭である。
 - 3b.块状褐色～黑褐色土：粗く、均一でない砂粒の塊状褐色土中に、粗いビードを多く含む。黒褐色土がブロック状に多量に含まれる。しまりよく硬い。粘性あり。上層との層の関係は明瞭に分離できる。

Fig.46 穫穴住居 SC02, 03 (1/60)

4号住居跡 (Fig.47)

調査区北西側、B 2 区で検出した竪穴住居跡である。南側の 11 号住居に切られている。また全体に削平を受け、また、攪乱土壌により各所を破壊している。僅かに西側壁面と南壁が部分的に遺存している。両辺は平行せず、一連の住居構造として疑問が残るが、埋土の状態から区分できず、床面からも共通していたことから図のように示した。建物は隅丸の台形を呈し、N-35°-W に設けられている。竪穴部は南北 2.6~4.5m、東西 3.5m 以上、深さ 0.1~0.2m を測る。床面での上壌や柱穴は検出できなかつた。また床面に炉跡も確認できなかつた。

遺物は、住居埋土の中央付近から比較的まとまった遺物が出土した。遺物には須恵器杯蓋 (Fig.54-25 ~29)、杯身 (30~32)、土師器杯身 (33)、甕 (34~36, 38, 39)、取っ手 (37)、砾石 (Fig. 58-14) が出土している。これらは III A 期に比定されよう。なお、覆土中から縄文時代後期に比定される石錐 (Fig. 57-7) が出土した。



Fig.47 壺穴住居 SC04 (1/60)

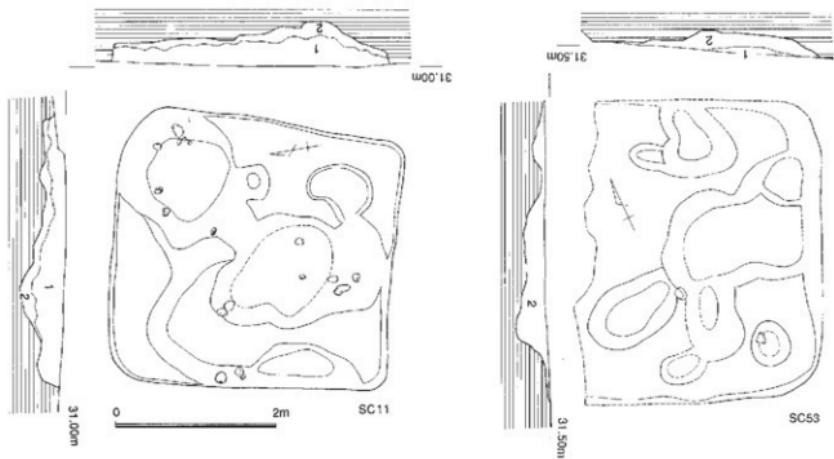
11号住居跡 (Fig.48)

調査区北西側、B2区で検出した壺穴住居跡である。北側の4号住居を切る。ほぼ全体が遺存しているものの、床面に大きな掘り方が數カ所あり、凹凸が著しい。建物は僅かに北側が広い隅丸方形を呈し、N-12°-Eに設けられている。壺穴部は南北3.4m、東西は北側で3.3m、南側で3.1m、床面までの深さ0.2mを測る。床面には不整形な土壙がある。土壙は中央、北東隅、南東隅、南西壁添いにあり、深さは0.3m程度である。土壙内に特に遺物の集中などはないが、地山礫が多数含まれていた。柱穴は検出できなかった。また床面に炉跡も確認できなかった。住居内埋土は単純であり、床面の土壙については住居廃絶時の掘削と見られる。このことから、床面の土壙は廃絶の際の柱抜き跡ではないかと考えた。

遺物には須恵器杯身(Fig.54-40)、土師器壺(41)、手づくね土器(42)が出土している。ⅢA期に比定されよう。

18号住居跡 (Fig.49)

調査区南側、A3区とB3区の境界で検出した壺穴住居跡である。全体に削平により削られており、地形の下がる西側では壁面が失われている。本住居には重複して21号掘立柱建物が切っている。建物は隅丸方形を呈する。竈のある壁面を基本とすると、N-37°-Wに主軸を向けて設けられている。壺穴部は主軸で4.5m、横軸で4.5m、床面までの深さは0.1mを測る。南西側の壁面に接して竈が設けられている。竈は基底部だけの遺存であり、保存状態も悪い。現状は竈本体の残骸と見れる水成粘土がおよそ1.5m四方に広がり、焼土、炭化物片が分布していた。構造は壁面の中央付近に浅い土壙を掘り、土壙壁に添って水成粘土で竈壁を造り上げたとみられる。土壙の規模は長軸で1.3m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。土壙の南東側は地山が上手状に削り出されている。これが竈壁の基底をなすとみら



SC-11土壟断面
1. 青色土（やや緑めの砂質） 程く不均一な砂質を多量に含む（下位や部分的に砂質を多く含む状態で剥離出来る）。また2~4cm厚の砂質も若干含み、冲山の暗褐色砂質土とプロック状に疊合される。土色より僅い。粘性なし。下層へ漸移的に変化する。炭化物片を少量含む。
2. 黄褐色土
軽くほぼ均一の砂質を多量に含む。礁を少量含む（1層よりも若干多い）。しまりよいが軟質、粘性なし。

SC-53土壟断面
1. 黄褐色砂質土上
2. 実～青褐色台状質土
3. 暗褐色粗砂質
砂質をおびる。下位にしたがい漸移変化する。
砂質より砂細層に近い。

Fig.48 壺穴住居 SC11,53 (1/60)

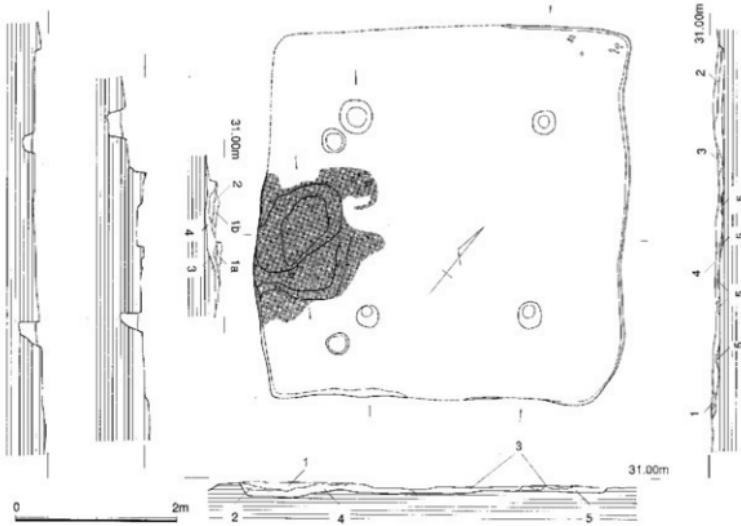
れた。壺のおおよその形態と焚き口の位置が予測される。焚き口は壁面から約1.0m離れた位置と推定される。また、煙道については不明である。柱穴は6本検出した。何れも床面から25cm程度の深さある。配置から主柱は4本であり、壺両側は2本づつとなっている。これは建て替えによるものか、添え柱となるのか明かでない。

遺物は壺内や住居北側隅部の床面に少量の上部器片（甕？）が出上しているが、図化できるものはない。

5 3号住居跡 (Fig.48)

調査区中央付近西側、B 2区で検出した壺穴住居跡である。全体に削平により削られ、浅く痕跡程度に残っている。北側を不整形な土壤（搅乱？）が切り、また西側を水田造成時の段により削平されている。11号住居と同様に床面に大きな掘り方が数ヵ所あり、凹凸が著しい。建物は隅丸方形を呈し、N-24°-Wで設けられている。壺穴部は南北3.7m、東西3.1m以上、床面までの深さは0.1m以下を測る。床面には不整形な土壤がある。土壤は中央から東壁、北側、南側2箇所あり、深さは0.4m程度である。土壤内に特に遺物の集中などはないが、地山礫が少量含まれていた。柱穴は南側に2本検出した。床面に炉跡は確認できなかった。住居内埋土は単純であり、床面の土壤については11号住居と同様に住居時の掘削と見られる。廐縁の際の柱抜き跡ではないかと考えられる。

遺物は少量の須恵器片、土師器片が出上しているが、図化できるものはない。



SC-18 東面土壁断面

1. 淡灰褐色土 粗いがほぼ均一の砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。炭化物、炭化物片、赤褐色の砂土ブロックを多量に含む。
2. 淡青褐色 (4層に比べて若干黄味がかる) 粗くばら一の砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。炭化物、炭化物片を多く含む。(1層より少なし)。
3. 淡青褐色土 粗いがほぼ均一の砂粒を多量に含む。やや砂質である。赤褐色粘土をブロック状に少量含む。しまりよいが硬質。粘性なし。
4. 淡青褐色 地いがほぼ均一の砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。
5. 灰褐色土 (砂質土層) 粗いがほぼ均一の砂粒を多量に含む。3層とは明確に分離できる。しまりよく硬い。粘性なし(上位は砂粒が粗く下位は細い)。

SC-18 西面土壁断面

1. 淡灰褐色土 粗いがほぼ均一の砂粒を多量に含む。しまりなく軟質である。下層とは明確に区分される。
2. 黄褐色土 (色調暗い) 粗く不均一の砂粒を多量に含む。暗褐色粘土をブロック状に若干含む。しまりよく硬い。粘性あり。

3. 淡青褐色土 4層に土質が近く、色調は青味が強い。粗い砂粒(ほほ均一) 多量に含み、様も若干含む。しまりよく硬い。粘性あり。

4. 淡青褐色 粘土層と層と層と層。

SC-18 西面土壁断面

- 1a. 黒色-淡灰褐色土 硬質層と同質であり、粗い塊が細く均一である。しまりよく硬い。熱、炭化物を多量(堆肥層2層より多い)に含みし、赤色の熟土ブロックを少量混入する。
- 1b. 淡灰褐色土 細かい層に同じ。
2. 淡青褐色土 (若干黄味がかる) 粗い塊一の砂粒を多量に含む。黄褐色の赤土をブロック状に多量に混入。しまりよく硬い。粘性あり。炭化物、炭化物片多量に含む(1層より少なし)。
3. 赤褐色土 粗いがほぼ均一の砂粒を多量に含む。赤褐色土がブロック状に多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。
4. 淡青褐色土 粗く均一の砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。

Fig.49 壁穴住居 SC18 (1/60)

4. 据立柱建物跡 (Fig.50)

S B 1 9

調査区南側、B 3×4で検出した二間×二間の総柱建物である。主軸をN-37°-Eにとる。規模は南北2.9m、東西2.9~2.6mを測る。丘陵の南斜面にあたり、厚い包含層を除去した後に、基盤の砂礫層上面で確認した。中央部に大きな擾乱があり、現状で柱掘り方が5基残されている。掘り方は円~梢円形であり、長軸は0.4~0.6m、深さ0.2m程度である。これからみて本來の掘り方底面は数十cm上にあつたと見られる。斜面において掘り方底面は何れも同様の深さを示し、斜面を平坦に造成することなく、建築したものと見られた。埋土から柱痕は認められなかったが、底面に径12~16cmのシミ状の落ち込みがあり、柱痕とみられた。また、南西隅柱の掘り方底面には円窪があり、礎石状をなしている。掘り方内からの出土遺物はない。

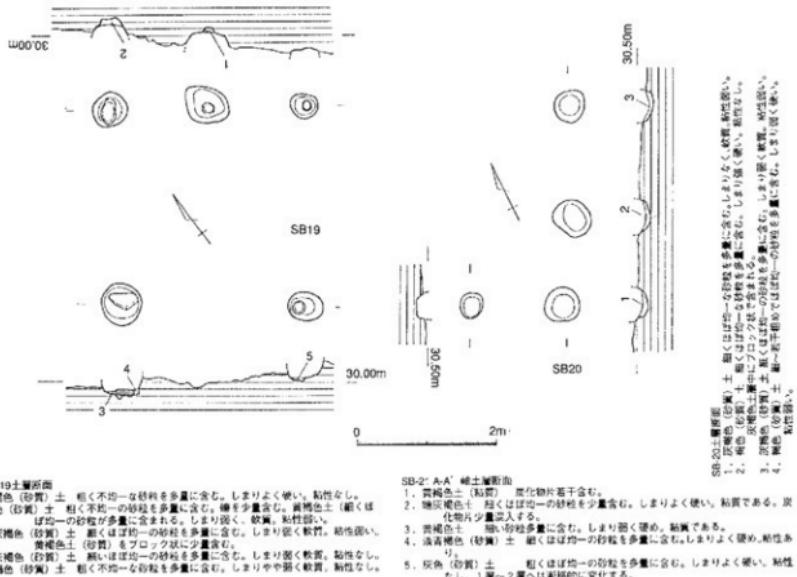
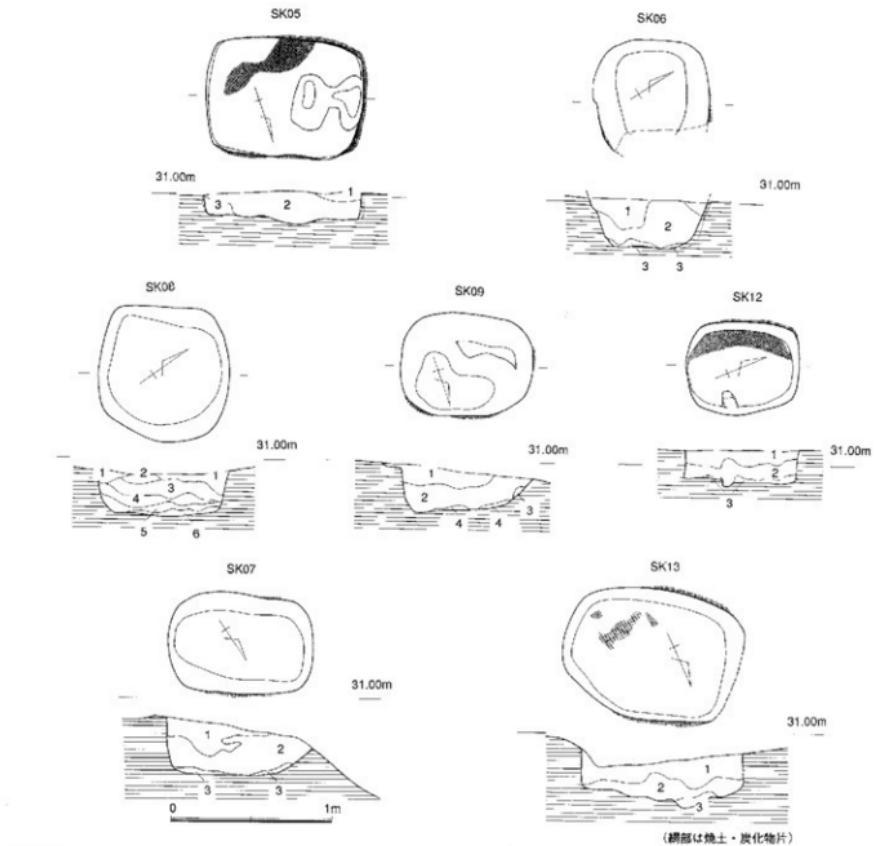


Fig.50 摂立柱建物 (1/80)



(細部は地土・炭化物)

SK-05土層

- 黒褐色土 下層は灰色気味。炭化物片を含む。
- 黒褐色土 部分的に砂利ブロックあり。炭化物を多量に含む(下位に増加)。
- 茶褐色土 炭化物片を多く含む。

SK-06土層

- 茶褐色土 茶褐色色をブロック状に多量に含む。しまり弱く軟質で、粘性あり。
- 黒褐色土 細く均一であり、強く砂粒を多量に含む。粘性ある。炭化物片を多量に含む(集中しない)。
- 灰褐色土 細いばばぬけの砂粒を多量に含む。しまりよく硬く、粘性あり。

SK-07土層

- 黄褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりは弱く軟質であり、粘性あり。炭化物片を多量に含む。(3層: 1層より量的には少ない)。
- 黒褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性よい。
- 灰褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性あり。炭化物片を多量に含む(下位に集中する傾向があるがば層中全体的に分布する)。

SK-08土層

- 褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性ややあり。炭化物片を多量に含む(3層: 1層より量的には少ない)。
- 灰色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりはばらけの砂粒を多量に含む。炭化物片を多量に含む。
- 黑褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性あり。炭化物片を多量に含む。
- 黄褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性高い。炭化物片を若干含む。
- 黑褐色土-褐色土 細いが均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性あり(3層と土の質は同じ)。炭化物、炭化物片を多量に含む。

- 黄褐色(砂質)土 細くばらけの砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性なし。炭化物も若干含む。

SK-09土層

- 黄褐色土-灰褐色土 細いが均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性あり。炭化物片を若干含む。
- 黑褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性あり。炭化物片を多量に含む。
- 黄褐色土 細いが均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性高い。炭化物片を多量に含む。
- 灰色(砂質)土 細くばらけの砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性なし。炭化物片を若干含む。

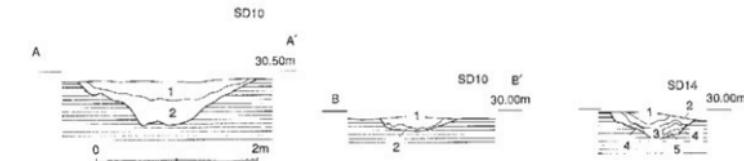
SK-10土層

- 黄褐色土-灰褐色土 細いが均一でない砂粒を多量に含む。暗灰褐色土(細いが均一でない砂粒が多量に含む)。粘性あり。炭化物片を多量に含む。
- 黑褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性あり。炭化物、炭化物片を多量に含む。
- 黄褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性高い。炭化物片を多量に含む。

SK-11土層

- 暗灰褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。しまりよく硬く。粘性あり。炭化物片を多量に含む(2層: どちらも(または集中分布しない))。
- 黑褐色土 細く均一でない砂粒を多量に含む。さてて溶けたした土をブロック状に少量含む。しまりよく硬く。粘性あり。炭化物片を多量に含む(集中分布する)。
- 灰褐色土 細くばらけの砂粒を多量に含む。しまりはよいがやや軟質。粘性生じる。

Fig.51 土壌 (1/30)



SD-10 A' 断面図

1. 黒色土（下部は薄褐色へと漸移する）。粗くばばらの砂粒を多量含む。下層とは明確に区分出来る。しまり固く軟質である。粘性強い。炭化物片を若干含む。
2. 黄褐色土。粗く不均一な砂粒を多量に含む。細山土をブロック状に多量含む。炭化物片を若干含む。

SD-10 B' 断面図

1. 黒色土。粗く不均一な砂粒を多量に含む。黄褐色土をブロック状に若干混入する。下層に漸移的変化するが、その分層は明瞭である。しまりよく硬い。粘性強い。
2. 黄褐色土へ葉緑色土。粗くばばらの砂粒を多量に含む。しまりよく、1層より繊維状質である。粘性あり。

SD-14 C' 断面図

1. 砂褐色土～黒褐色土。粗く均一な砂粒を多量含む。しまりよく硬い。粘性あり。
2. 離散色土。粗くばばらの砂粒を多量に含む。灰褐色粘土上をブロック状に若干含む。しまりよく1層よりも硬い。粘性あり。
3. 黒色土。離ればばらの砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。2・4
4. 棕褐色土。粗く不均一な砂粒を多量に含む。しまりよく硬い。粘性あり。
5. 黄褐色土。粗く均一な砂粒を多量に含む。黄褐色土（粗くばばらの砂粒を多量に含む砂質土）をブロック状に層中に混入。しまり固く軟質である。粘性あり。

Fig.52 溝 (1/60)

S B 2 0

調査区南側、B 3 区で検出した現状で二間×一間の建物である。柱間の規模から本来は二間×二間の総柱建物であったとみられる。主軸をN-27°-Eにとる。規模は南北3.0m、東西1.8m（一間分）を測る。現状で柱掘り方は4基残されている。掘り方は円～楕円形であり、長軸は0.3～0.6m、深さ0.2m程度である。埋土から柱痕は認められなかった。遺物の出土はない。

S B 2 1

調査区南側、A 3 区とB 3 区の境界で検出した二間×二間の総柱建物である。堅穴住居跡SC18の掘り方に重複し、埋土を切る。斜面に建てられたSC18の掘り方を造成面代わりにして、建築したものと見られた。主軸をN-36°-Eにとる。規模は南北3.5m、東西3.5mを測る。掘り方はほぼ円形であり、長軸は0.4～0.5m、深さ0.2～0.4m程度である。埋土から柱痕は認められなかった。遺物の出土はない。

5、土壤 (Fig.51)

S K 0 5

調査区中央西側、B 2 区に検出したいわゆる「焼土壤」である。隅丸長方形を呈し、主軸をN-71°-Wにとる。長さ0.95m、幅0.73m、深さ0.2mを測る。壁面と床面の一部が赤く焼けている。覆土には炭化物を多量に含む。遺物の出土はない。

S K 0 6

調査区中央西側、B 2 区に検出したいわゆる「焼土壤」である。隅丸長方形を呈し、主軸をN-56°-Wにとる。東側は搅乱で壊れている。長さ0.75m以上、幅0.7m、深さ0.3mを測る。壁面の上部が赤く焼けている。覆土には炭化物を多く含む。遺物の出土はない。

S K 0 7

調査区中央西側、B 2 区に検出したいわゆる「焼土壤」である。隅丸長方形を呈し、主軸をN-56°-Wにとる。長さ0.95m、幅0.73m、深さ0.2mを測る。壁面と床面の一部が赤く焼けている。覆土には炭化物を多量に含む。遺物の出土はない。

S K 0 8

調査区南西側、B 3 区に検出した。隅丸方形を呈し、主軸をN-37°-Eにとる。長さ0.82m、幅0.84m、深さ0.25mを測る。壁面は焼けていないが、覆土に炭化物を多く含む。遺物の出土はない。

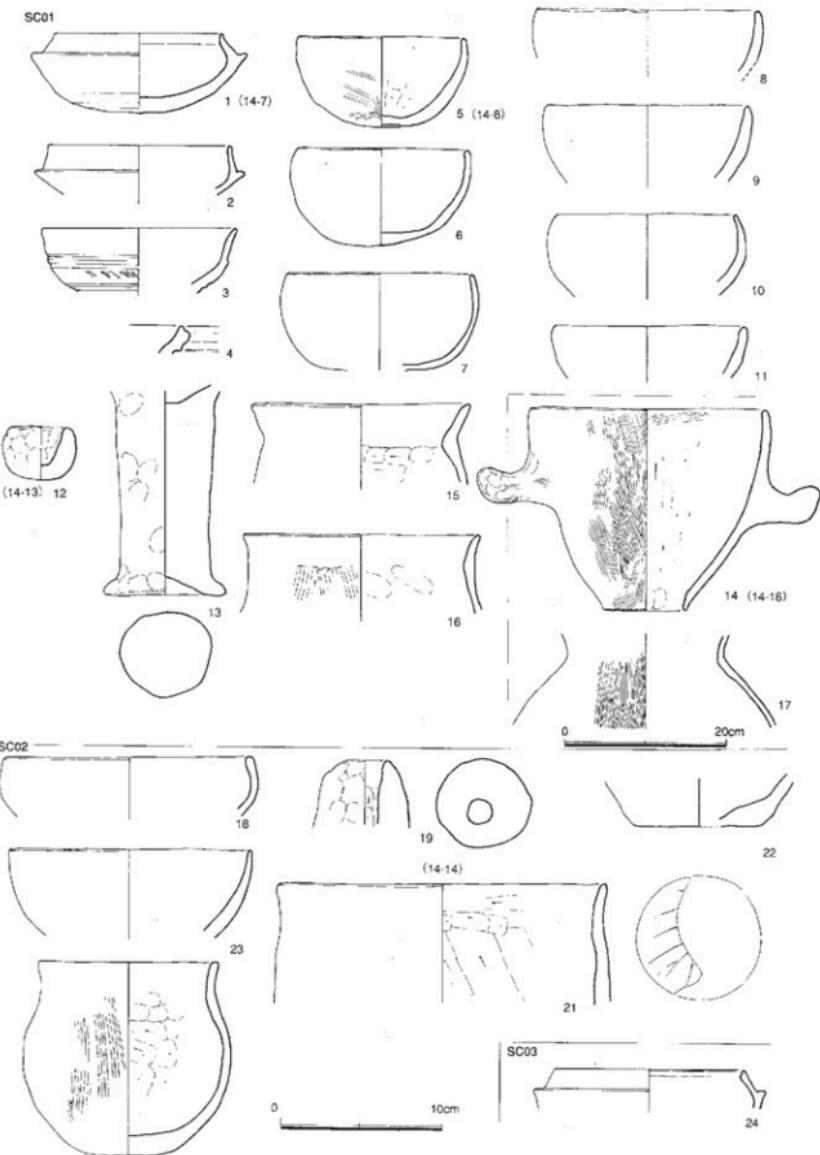


Fig.53 桧原3次出土遺物 (1) 住居 (1/3,1/6)

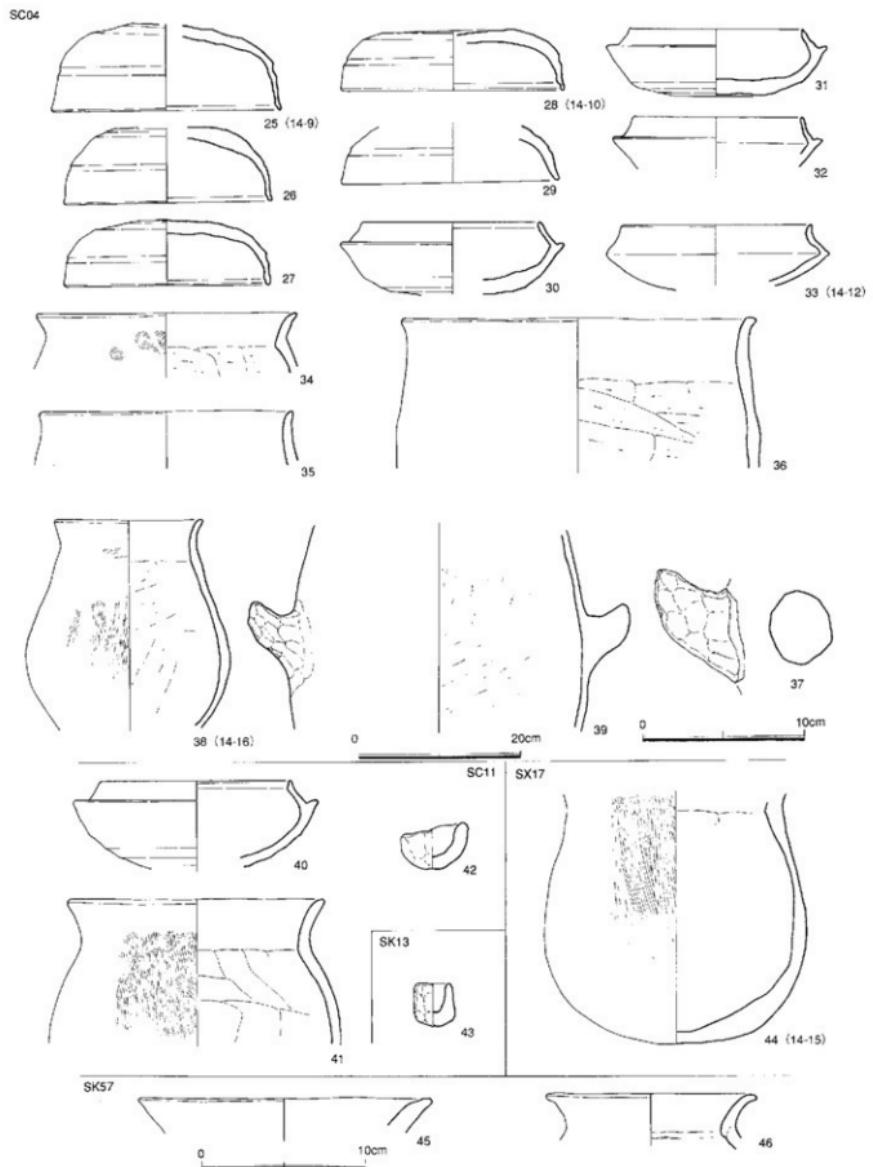


Fig.54 桧原3次出土遺物(2)住居・土壤(1/3,1/6)

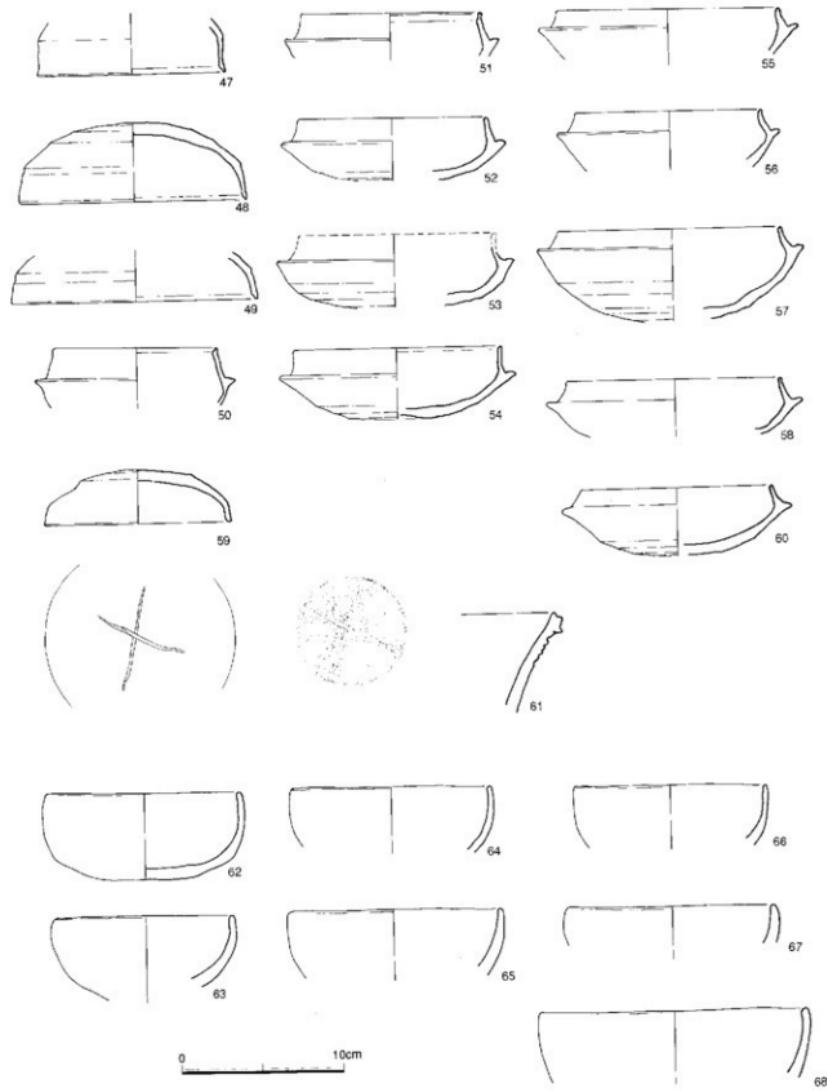


Fig.55 檢原 3 次出土遺物 (3) 包含層 (1/3)

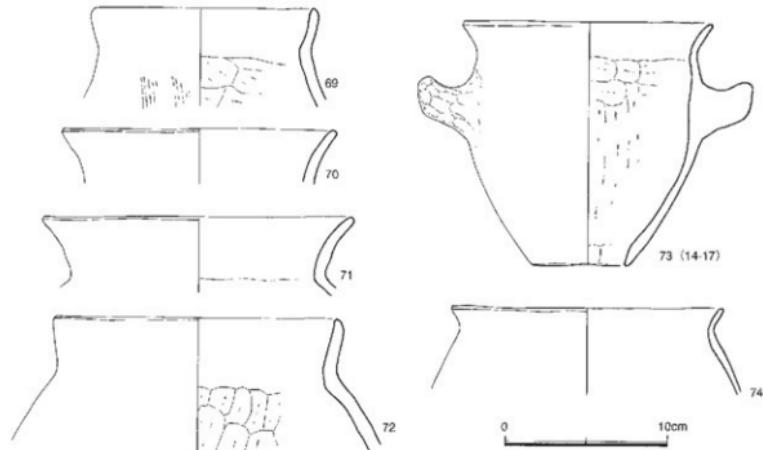


Fig.56 桧原3次出土遺物(4) 包含層(1/3)

SK09

調査区南西側、B3区に検出したいわゆる「焼土壙」である。隅丸長方形を呈し、主軸をN-71°-Wにとる。長さ0.81m、幅0.64m、深さ0.29mを測る。壁面の一部が赤く焼けている。覆土には炭化物を多量に含む。遺物の出土はない。

SK12

調査区南西側、B3区に検出したいわゆる「焼土壙」である。隅丸長方形を呈し、主軸をN-23°-Eにとる。長さ0.70m、幅0.58m、深さ0.2mを測る。壁面と床面の一部が赤く焼けている。覆土には炭化物を多量に含む。遺物の出土はない。

SK13

調査区南側、B3区とB4区の境界上に検出したいわゆる「焼土壙」である。隅丸長方形を呈し、主軸をN-66°-Wにとる。長さ1.09m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。壁面がよく焼け、床面に壁面の崩落がある。覆土には炭化物を多量に含む。土師器でづくね上器(Fig.54-43)が出土した。

6、溝 (Fig.52)

溝は二条共に調査区北端のB2区にあり、丘陵の地形に沿って南から北へ延びている。SD10は長さ約12m以上あり、3号住居の下で検出し、最大幅約2.1m、深さ0.6mである。SD14は2号住居の下方から約2.2m延びている。最大幅1.2m、深さ0.3mを測る。何れの溝からも少量の土器片が出土したが、図化あるいは時期を決めるものはない。

7、水田 (Fig.44)

基本的層序で示したように、本調査区南端のB4区において埋没した水田跡を確認した。最近の田面を除く5面の水田のなかで、2~4面は段造成を伴う近世水田と見られた。5、6面は近世以前の自然地形に沿った水田面である。ただし、5面は田面の保存が悪く、面的に検出することができなかった。6面は田面を薄い砂層が覆い、足跡も多数残されていた。面的に調査した結果、畦畔を検出す

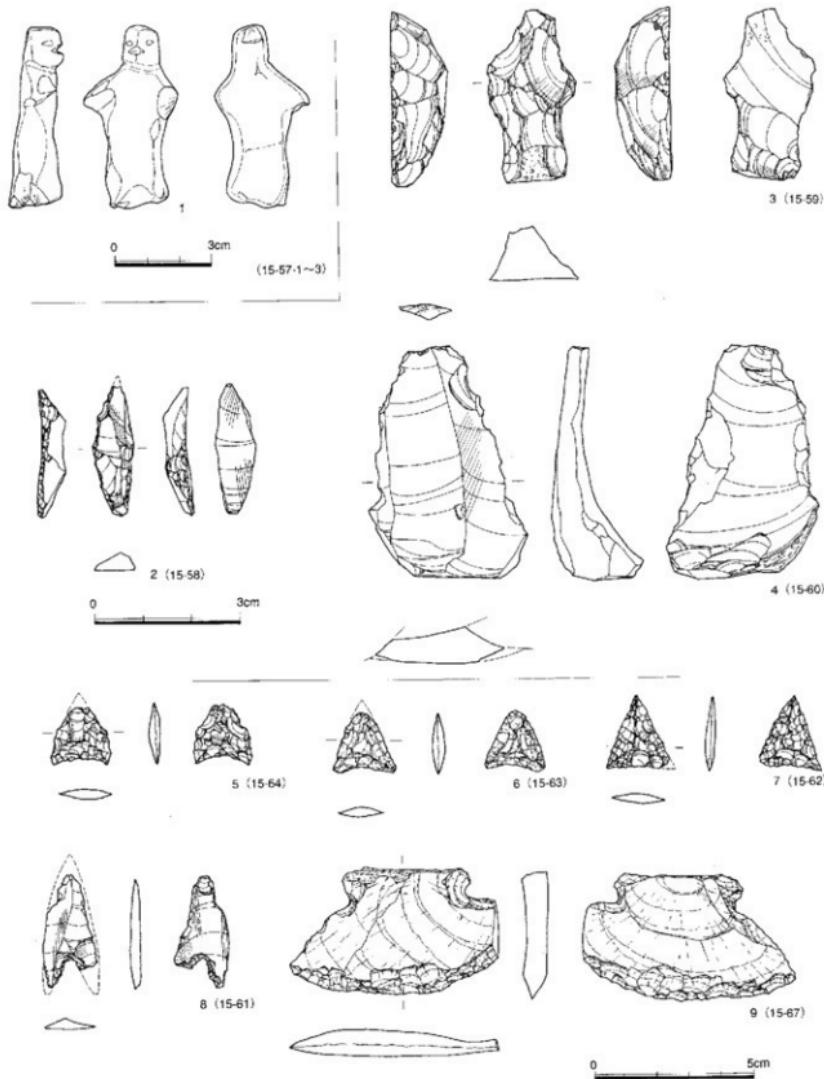


Fig.57 桧原3次出土遺物（5） その他の遺物（1/1,2/3）

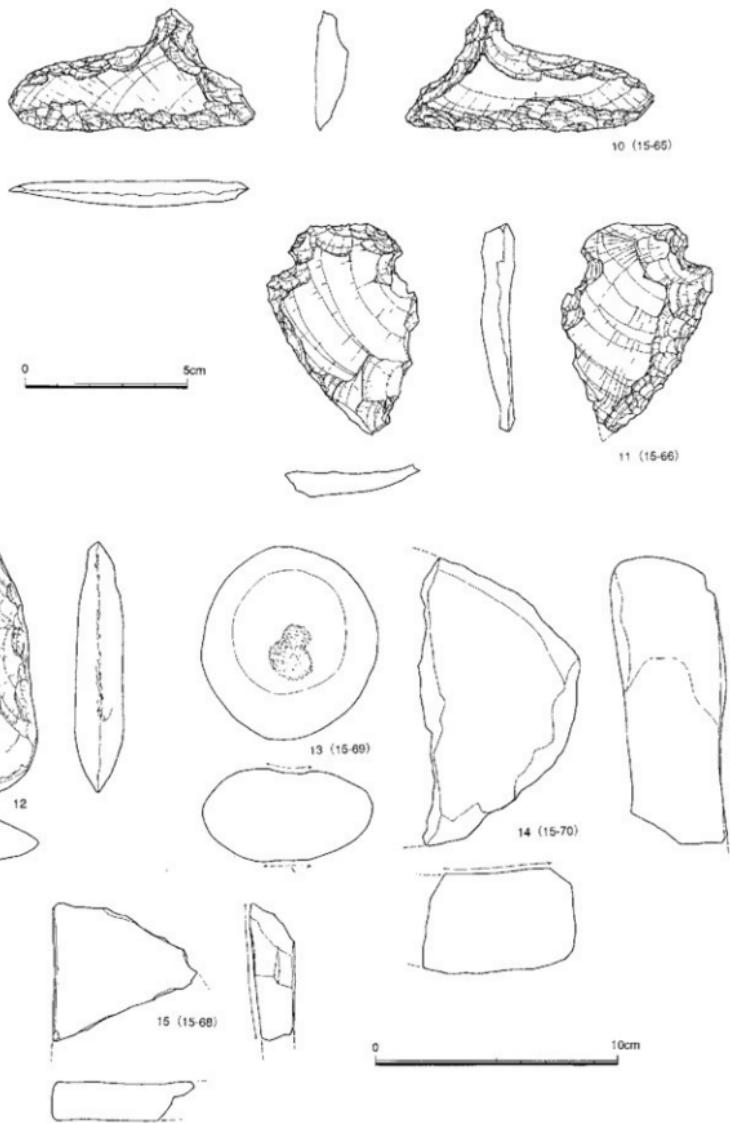


Fig.58 桧原3次出土遺物（6）その他の遺物（2/3,1/2）

ることができた。この6面水田を以下に報告する。

水田跡は幅約10mの狭い谷に造られている。この谷は桧原川から南東方向に開析して入る樹枝状の谷地である。調査範囲内ではこの水田がどれくらい上流まで設けられているかは不明である。田面は調査区内で二面を検出した。畦畔は等高線に沿って弧を描き、谷を横切るように敷設されている。幅0.3~0.4m、高さ0.1m以下の規模である。田面は畦畔を境に谷(東)側のA面と桧原川(西)側のB面に区分される。A面の田面標高は29.70m、B面は標高29.60mを測る。田面は谷の両端まで造られており、灌漑用の水路は見いだせなかった。用水は上方の水田から田越して導水されていたと考えられた。

田面からの出土遺物は古墳時代の須恵器、土師器片が少量出土した。しかし、田面下にも同時期の遺物が含まれている。この水田跡が古墳時代の田面かの判断は困難であった。

8、その他の遺構と遺物 (Fig.44,54~58)

本調査区では、以上の遺構の他に住居跡の集中するB1、2区付近に、多数の土器、柱穴が分布し、また遺物包含層が形成されていた。それらからはおもに古墳時代後期の遺物が出土している。土器からは甕類(Fig.54-44~46)が出土した。遺物包含層からは須恵器杯蓋(Fig.55,47~49,59)、杯身(50~58,60)、甕(61)や、土師器塊(62~68)、壺(Fig.69~72,74)、櫃(73)などが出土している。また、特殊な遺物として、18号竪穴住居の南側斜面から土師質の人形(Fig.57-1)が出土した。

これらの遺物は須恵器杯類でみると、ⅢA~ⅢB期を主体としながら一部はⅠB期からⅣ期に及んでいる。

また、古墳時代以前の遺物としては、基本層序で示した第2層の上部から後期旧石器、縄文時代の遺物が出土している。後期旧石器時代の遺物としては、ナイフ形石器(Fig.57-2)、三棱尖頭器(3)、剥片(4)がある。縄文時代の遺物としては、石鏃(5~8)、石匙(9~11)、磨製石斧(12)、くぼみ石(13)がある。縄文時代の遺物はおおまかに、早期と、後期の二期間に区分される。なお、調査区南側の包含層から出土した砥石(Fig.58-15)は古墳時代のものと見られる。

9、小結

桧原遺跡群第3次調査では、古墳時代後期の小規模な集落を調査した。調査面積が限られていること、水田段造成などの削平のために、集落遺構の全貌を明らかにできたとは言い難い。しかし、検出遺構と出土遺物の検討を経て、おおまかな様相を知ることができた。

まず、遺跡は桧原川流域でも沖積地を形成する最上流部にあり、沖積地に近い丘陵の西向き斜面に位置している。この丘陵先端は北と南に浅い谷部があり、幅50m程の独立した地形となり、集落の南北での限界を示している。検出された遺構の分布は中央に空闊地をおき、南北に二分される。南側には18号住居(床面積20m²以上)と縦柱式の掘立柱建物が点在する。これに対し北側には一辺4m(床面積15m²)以下の小型竪穴住居が一部重複しながら集中している。竪穴住居を見ても北側の住居には竈がなく、南側の18号住居には竈がある。

調査で検出された竪穴住居7、掘立柱建物3には切り合いがあり、推定した時期幅の中で同時に存在した施設はさらに少数となろう。調査以前に失われた遺構を想定しても、こうした集落を営んだ集団は極めて小規模となる。

集落の形成時期は、僅かにⅠB期、およそ5世紀末に遡り得る資料があるものの、遺構からの出土や、包含層出土遺物でみると、ⅢA期つまり6世紀中葉頃から本格的な集落形成が始まり、ⅢB期のうちには集落が縮小、Ⅳ期に入る頃つまり6世紀末から7世紀初頭には廃絶したと見られる。

時期を決定できる遺構は少ないが、3、4、11号住居はⅢA期、1、2号住居はⅢB期とみられる。この他に切り合いからみて、18号住居はⅢA期、53号住居はⅢB期と推定される。また、1、18号住居は建て替えの可能性があり、他より時期幅があるかも知れない。掘立柱建物は遺物の出土がなく時期は

不明であるが、18号住居を切る21号建物はⅢB期、規模のより小さな19、20号建物はⅢA期となる可能性がある。また、ⅢA期とした4号住居と11号住居は切り合いがあり、同時期には存在し得ない。こうした点から検出した遺構をみると、ⅢA期の住居5棟(1a,3,4,11,18)、掘立柱建物2棟(19,20)はさらに二時期に区分されよう。ⅢB期は住居3棟、掘立柱建物1棟となる。

こうしてみると、本集落は次の三段階の変遷が予測できる。

一段階（ⅢA期前半）：南側の住居18aと掘立柱建物1棟（19or20）、北側の小型住居2棟（3,4）

二段階（ⅢA期後半）：南側の住居18bと掘立柱建物1棟（19or20）、北側の小型住居2棟（1a,11）

三段階（ⅢB期）：南側の掘立柱建物1棟（21）、北側の小型住居3棟（2,1b,53）

これ以外にも時期は不明であるが、土壙、柱穴などがある。このうち、焼土壙は中央の空閑地に集中している。また、注意されるのは、一段階の住居の方位は地形に沿って不規則であるが、三段階になると住居は北方位に揃った配置となることである。このように南北50m程、東西20mの範囲に須恵器2型式の間に三段階の集落形成がなされている。集落は明確な区画等はないものの、一貫して竪穴住居と倉（掘立柱建物）と空閑地で構成されている。住居には倉に隣接する大型住居1棟と離れた小型住居2～3棟からなる。

さて、古墳時代後期の集落については様々な議論がなされている。都出比呂志氏(1989)は、群馬県黒井峯遺跡などの調査成果から、古墳時代中～後期の住戸数軒と倉からなり、ときに菜園を備えた集落の単位を「小経営単位」と概念化し、固定的な親族集団を背景とするとした。田中良之氏(1995)は、大分県佐知遺跡と上ノ原横穴墓群の調査成果から、集落を構成する一区画内の住戸数棟と倉、空閑地（菜園）という居住単位は、当時の家族集団の単位に対応し、さらに区画間の住居の格差は、直系親族と傍系親族の格差に相当すると説いた。

桧原遺跡3次の集落は周囲に同時期の集落はなく、まさに最小規模の經營単位と呼べるものである。周辺での同時期の拠点集落は1、2次調査の周辺や柏原M遺跡に予測される。本集落はこれらの拠点集落の分村であり、非家長世帯である傍系親族の分節化・独立による一単位と見ることができよう。この場合、集落内での大型住居(18)は新たに台頭した傍系親族内の長と見ることもできよう。このような小規模な集落を成立させた背景は、狭く細長い谷地、追地という地理的条件ゆえに、集落内での区画による独立より、占有する生産地の隣接地に居住域を選択したためであろう。集落の成立はこの地域の群集墳の形成と解体の時期と一致しており、造墓規制の緩和がこの集落に及んでいた可能性は高いと考えている。

最後に本集落の生産活動についてふれる。集落の西側前面の低地に広がる水田は1haを越えない面積である。近年の大規模な丘陵斜面への段水田を加えても、大きな生産量は見込めない。また、桧原川沿いの低地は近年でも湿润で水はけが悪いといふ。予測されるこの場所での農業生産はかなり厳しいものである。集落による生産は農業以外にも向けられた可能性が高い。2号竪穴住居で出土した羽口片や空閑地に集中する「焼土壙」の検出から、鉄牛産に関与した集団を想定することもできよう。油山北麓では、近年古墳時代から古代・中世にかけての鉄牛産遺跡が多数知られるようになった。隣接する柏原遺跡では、古墳時代後期に河川沿いの狭長な水田開発と鉄牛産を並行して進めたことが確認されている。集落内で鉄滓などの鉄生産関連遺物の出土はないが、「焼土壙」は鉄生産用の炭つくりの遺構と考えられている。本集落では空閑地が「菜園」ではなく、鉄生産に関わる作業空間としての利用も推定できる。本集落の農耕期の生産活動の一端を示していると言えよう。その場合、少なくとも流域内の複数集落が、生産活動において関連する動きがあったことを予測しておきたい。

第4章 調査資料の分析、検討

1. 桧原2号墳出土の赤色顔料について

1)

本田 光子

桧原2号墳出土赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察および蛍光X線分析を行った。墳墓出土例に関する現在までの知見に寄れば出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

試料

実体顕微鏡下で出来る限り調整（混入土砂、骨片等夾雑物の除去）し、赤色物を針先に付く程度の量を探り検鏡用に、残りを研和して蛍光X線分析に供した。

顕微鏡観察

顕微鏡により透過光、反射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無等を観察するものである。三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していないければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。本試料にはベンガラ粒子を認めた。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。理学電機工業（株）製蛍光X線分析装置システム3511を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては鉄が検出され、水銀、鉛は検出されなかった。

結果

顕微鏡観察と蛍光X線分析の結果から本試料はベンガラと考えられる。

今回、調査の機会をいただきました福岡市教育委員会および同吉留秀敏氏に感謝いたします。蛍光X線分析の測定は九州産業大学総合機器センターで行ったもので、ご協力いただきました同古賀啓子博士に感謝いたします。

1) 別府大学文化財学科助教授

2、桧原1号墳出土の人骨について

金幸賢・田中良之¹⁾²⁾

1.はじめに

桧原1号墳から人骨が出土し、福岡市教育委員会の依頼を受けて、筆者らは発掘調査の段階から現場における人骨の観察・調査を行った。人骨はその後九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座に搬入し、整理・調査を行った。

なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状態 (Pl.4-7)

横穴式石室は西側壁の一部と北側奥壁の一部のみが遺存していたが、奥壁の近くから頭骨片・四肢骨片と遊離歯が出土した。出土状態は本末の位置関係を保つものではなく、これらの人骨は片づけられたものと考えられる。まず、複数体分の大脛骨片、胫・腓骨片、上腕骨片が75×20cmの範囲に、長軸を東西方向におおむねそろえた状態でまとめられていた。また、より奥壁側からこれら四肢骨に接した状態で頭蓋冠片が出土した。遊離歯は、西側壁近くの一群と奥壁近くの一群、また片づけられている四肢骨と混在する一群と頭蓋冠に伴う一群の、計4群を認める。西側壁近くの一群には銅環が伴う。

なお、4群からなる歯牙のうち頭蓋冠に伴う歯牙は、片づけられている四肢骨に混在する一群と同じく上顎の歯であるが、重複する歯種もあることから、相互に別個体のものと推定される。また四肢骨でも、左大脛骨が3体分以上認められることから、複数個体の埋葬であることがわかる。

3.人骨所見

人骨の保存状態は不良で、取り上げる際に合成樹脂で固定した上で行ったが、計測などに耐えうるものはなかった。しかし、断片的な資料ではあるものの、年齢推定や性判定はある程度可能である。よって、以下に所見を記すことにしたい。

まず、西側側壁の銅環の附近から確認された遊離歯の残存歯式は以下の通りである。

M ₁		M ¹	(○歯槽開放	×	歯槽閉鎖	/	欠損	△歯根のみ
		M ₂	●遊離歯	(未萌出	Cう歯			以下同様	

歯牙の咬耗度はいずれも柄原(1957)の1b°である。また、北側壁の近くから検出された遊離歯の残存歯式は以下の通りである。

C		C	M ¹						
C	I ₂		P ₁	P ₂	M ₁	M ₂			

これらの咬耗度はおおむね柄原の1a°に該当し、また上顎の犬歯と下顎の第2小白歯では歯冠のみ

1) 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座助手

2) 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座教授

が認められ、歯根がまだ形成されていない。頭蓋骨にともなって検出された歯牙は、上顎右第2大臼歯であり、咬耗度は柄原の1b°を示す。

四肢骨が片づけられている部分からも、一部歯列を保持している歯牙と遊離歯が認められる。歯式は以下の通りである。

\dot{M}^2	\dot{M}^1	\dot{P}^2	\dot{P}^1	
				M_2

咬耗度は柄原の1c—2a°に相当する。

頭蓋骨は矢状縫合を含む左右頭頂骨部分とラムダ縫合を含む後頭骨の左側片が残存している。縫合線は矢状縫合、ラムダ縫合とともに内板側が閉鎖している。

四肢骨は片づけられた状態で出土した。これらは、腓骨片1点、大腿骨片6点と左右の同定が困難な上腕骨片1点、脛骨4点を含む。これらの個体識別は困難であったが、左大腿骨を3体分認めたことから、遊離歯との関係も考えあわせ、最低でも3体分以上はあるものと考えられる。なお、これらの大腿骨のうちでは、1体の粗線が発達しているものの、他の2体では発達していない。

遊離歯は、検出場所毎に重なる歯種がないことから、各々は別個体と推定される。これらのうちわけは歯牙の咬耗度から、成年2体、小児1体、成年後半から熟年1体の計4体分と推定される。また、上記のように、大腿骨からも3体分以上の存在が確認される。なお、大腿骨では小児と考えられるものは認められず、3体共に成人のものと推定される。粗線の状態から男性1体、女性2体の可能性を考えることが出来るものの、より積極的な根拠はない。

以上のように、桧原1号墳から出土した人骨は、小児1体、成年2体、成年後半から熟年1体の、計4体分が確認されたことになる。

最後に、調査時から今日までいろいろと便宜を図っていただいた福岡市教育委員会の吉留秀敏氏に感謝申し上げたい。また、人骨整理などでご協力いただいた九州大学大学院比較社会文化研究科石井博司氏に謝意を表する。

参考文献

- 柄原博,1957:日本人歯牙咬耗に関する研究.熊本医学会雑誌,31,補冊4.

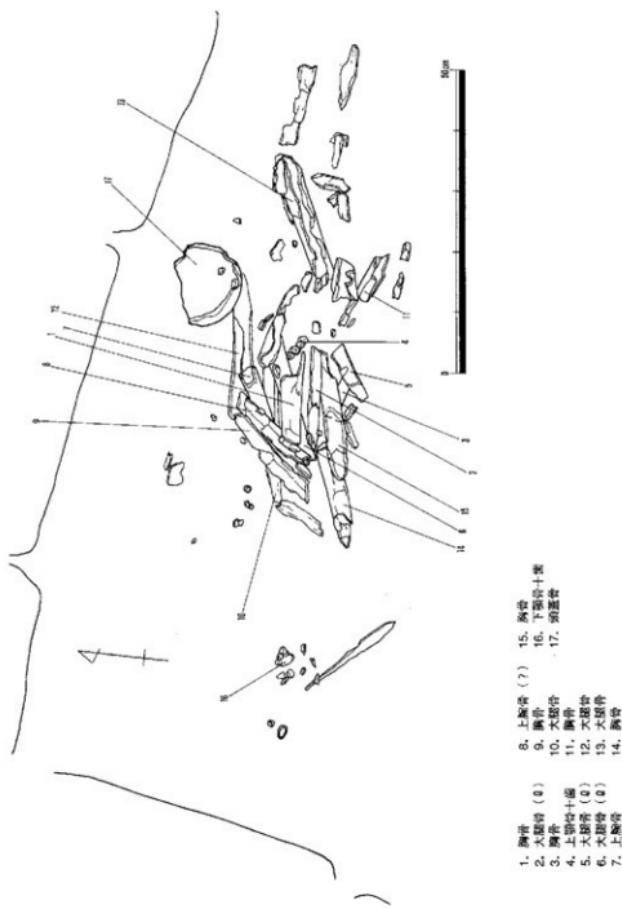
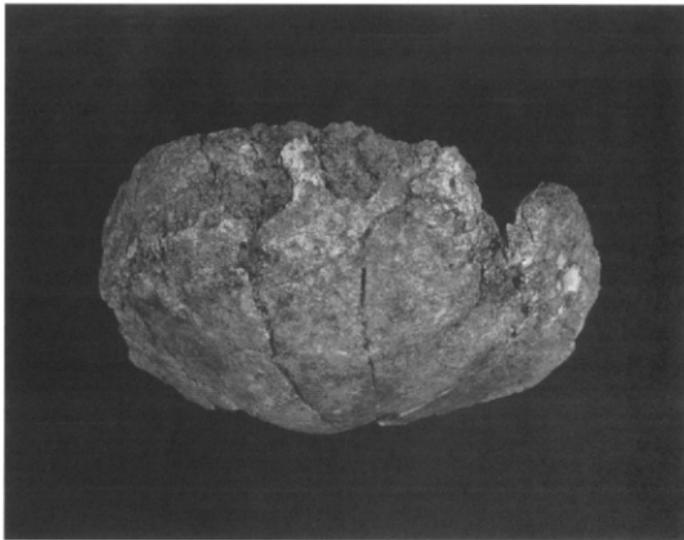
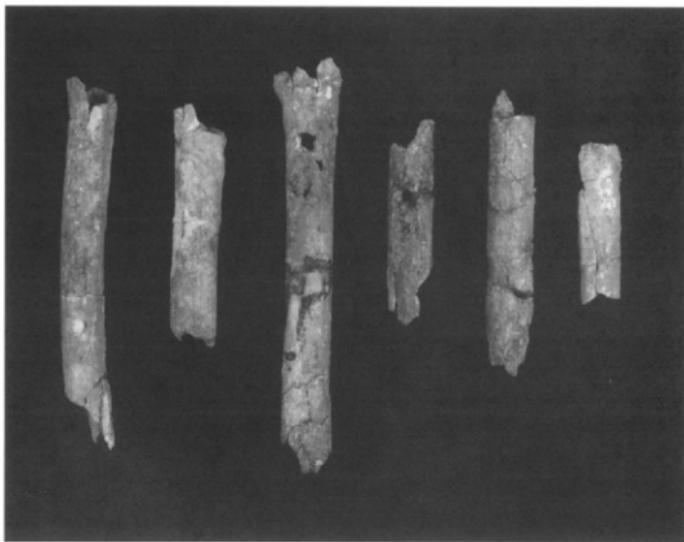


Fig.59 檜原1号墳人骨出土状態 (1/8)



1.頸蓋骨片



2.大腿骨片

PL.0 檢原1号墳出土人骨

3、桧原古墳群出土金属器の検討

11

比佐陽一郎

古墳群の調査では、豊富な種類の金属器が出土した。特に1号墳の吉銅製鉗、錫製の耳環、2号墳の鏃子、鏡等は全国的にも出土例が限られる特殊な遺物といえる。そこで以下これら金属器について、概要説明で触ることのできなかった点なども含め若干の検討を行いたい。

《装身具》銅鏡

銅鏡は周辺地域では大牟田市岬ヶ原37号墳(山田編1990)、那珂川町井河1号墳(沢田編1983)、同観音山古墳群I・9号墳(佐藤・茂編1988)等で刻みのあるタイプが出土している。このうち那珂川町の2例は、出土した須恵器が前者がII段階、後者がIIIa段階と桧原1号墳と比較的近い時期を示している。ここからは2古墳合わせて4例が見られるが、鉗断面は桧原と同じ偏平なものや、円、縦長円に近いものまで様々である。これらに比較すると極端に新しい岬ヶ原例(6世紀末~7世紀初頭)では断面が矩形を呈している。

耳環

古墳時代の耳環は銅製の芯金に金や銀の薄板を被せたものが一般的であるが、その他にも材質の組合せやあるいは単独の材質に、様々な種類のあったことが知られている。桧原古墳群でも銅製の他に、1号墳出土の2個が錫製であることが、宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏、別府大学本田光子氏(前福岡市埋蔵文化財センター)の分析によって明らかになった。また同時に関連資料の分析が行われ、この他にも特殊な材質の装身具が徳永古墳群、大牟田古墳群、山崎古墳群、羽根戸古墳群等で確認された。今回それらの分析結果を両氏の御好意によって、ここに掲載する。

(Tab-1) (同時に弥生時代の資料ではあるが、これまで青銅製として報告されていたカルメル修道院遺跡出土の鏡についても、分析によってその材質が錫であることが確認されたことから、この機会に合わせて報告する。)

錫や鉛は現在でこそ腐食して亀裂が生じたり白化しているが、製作された当時は銀色の金属光沢があり、いわゆる銀環と大差無い外観を呈していたものと想像される。当時も貴金属であったであろう鏡の代用品としての性格が考えられる。

鏡子

宇野慎敏氏の研究(宇野1985)では古墳時代から古代まで含め北海道から鹿児島まで30数例が集められており、関東周辺と九州に分布の中心があることが分かる。同氏による型式分類では桧原の出土例はII-aに属するもので、最も類例が多く古墳時代全般にわたって見られる型式であり、時期的な

出土遺跡	遺物名	遺物登録番号	報告	Fig	材質
カルメル修道院遺跡1次調査	鏡		市原記録*		錫
カルメル修道院遺跡2次調査	鏡		市原記録*		錫
カルメル修道院遺跡3次調査	鉗		市原記録*		錫
大牟田古墳群11号墳	耳環		未報告		鉛
玄武古墳群3号墳	鉗	750203064	古銅1集	43-1	錫
徳永古墳群2次1号墳	耳環	790501051	市銅56集	6-31	錫
徳永古墳群2次1号墳	耳環	790501052	市銅56集	6-32	錫
徳永古墳群2次	耳環	790503121	市銅56集		錫
羽根戸古墳群E群1号墳	耳環	874610105	市銅198集	7-10105	錫
羽根戸古墳群E群2号墳	耳環	874620202	市銅198集	12-20202	鉛
山崎古墳群2次	耳環	926300202	市銅380集	11-202	鉛
松原古墳群1号墳	耳環	9234	市銅540集	15-3	錫
松原古墳群1号墳	耳環	9234	市銅540集	15-4	錫

*『福岡平野の歴史、発見充実された遺跡と美術』福岡市歴史資料館977

Tab.1 福岡市内出土錫・鉛製装身具一覧表

特定は難しい。またこれまでに得られた知見を逸脱する要素も無いものの、全国的には決して普遍的な遺物ではなく、存在そのものは注目に値する。

《農工具》鋤

遺跡出土の鋤に関しては伊藤実氏の研究から多くを知ることができる。(伊藤 1993) それに拠れば松原の例はII-b類に属する、片側に長めの茎を持つ形式で、6世紀代に出現するとされている。またこの形式の鋤は宗像地域の中小円墳に極めて濃厚に分布していることが指摘されており、伊藤氏は周辺同時期の須恵器、鉄器生産の遺跡と関連づけて、これら新しい生産活動に携わった人々により伝えたことを推測されている。福岡平野も古代における鉄生産の重要な地域であり、更には油山周辺には鉄滓を供献する古墳が数多く知られていることからも、この推測を裏付ける材料の一つとして加えることができそうである。

《武器類》弓金具

昨年度に別稿で福岡県内の出土例を84ヶ所(内市内17ヶ所)としたが(比佐 1996)、その後新たに確認したものと、この松原例を含めると91ヶ所(内市内21ヶ所)に増えた。今回は特にこれまでの考えを修正する要素は見当たらないが、松原の例も含め、出土する古墳群(地域)とそうでない古墳群が明確に別れる傾向が顕著になった印象が強い。

《馬具》

2号墳出土の馬具は轡を中心とする頭絡の部品と、鎧の金具ということで、最低限騎乗に必要な馬具としては鞍が欠けているが、全て有機質で作られていれば遺存しないため、その存在を完全に否定することはできない。副葬品として被葬者が所有していた全ての馬具を納めた保証も勿論無いが、逆に有機質の鞍廻りの存在を想定するならば2号墳の馬具は極めて実用本意のセットといえる。

古墳出土遺物の中でも馬具は須恵器との共作關係から各部位毎に比較的細かい編年作業が進んでいる。それに拠れば2号墳出土の轡、鎧はどうやら古式と新式の要素が混在するやや複雑な様相を呈しているが、概ねTK-43~209型式併行期に位置付けられ(岡安 1984、齋藤 1986)、従って初葬にまでは遅らず、2期或いは3期の最終埋葬に伴うものと考えられる。

また馬具の中では今回特に轡の引手が左右で異なる点に注目してみたい。この様な例について調べるため、できるだけ多くの類例を一度に見る方法として、各県毎の馬具が集成された文献を用いた。近年、宮代栄一氏らの精力的な研究によって集成作業も進んでおり、10県分約280例の実測図を見ることができた。(千賀 1977、関・宮代 1987、松尾 1985、名木 1987、青木 1990、赤木剛 1993、宮代、白木原 1994、宮代 1995、宮代 1996、群馬県 1996) 勿論この数字は全国の馬具の出土数からすれば極一部であろうが、ある程度の傾向は知ることができるものと考える。しかし轡も引手が両方完存しているものは限られており、110例程に過ぎない。更に環状鏡板系の轡は更に絞られる。その結果左右の引手の長さが異なるものは7例であった。このなかには左右の差が松原のもの程無く、意図的なものか判断が付きかねる例も含まれているが、唯一、長野県下諏訪町天白古墳出土例(Fig.60)は、(図の)左が16cm、右が12cmで松原例とはほぼ同じ、更に短い方の引手両端の環が銜側と手綱側で90°捻れている点まで酷似しており、偶然の産物とはとても思えない状況である。これだけ似たものが存在することは構造のあるいはその使用において何らかの意

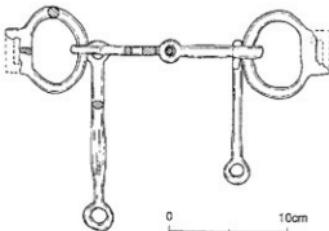


Fig.60 長野県天白古墳出土轡 (1/4)
(松尾1985より再トレース)

味を持っていたと考えざるを得ない。ただ、どのような意味を持つのかまでは、現時点で言及することは筆者の知識不足から不可能である。特に実際の馬の副駕に関しては全く素人であり、今後類例も含めて御教示を頂ければ幸いである。今回参考にした文献には馬具の図面しか無く、そのほかの遺物については不明であるが、文章をそのまま引用するなら7世紀代とのことであり若丁桧原のものより新しい。他の馬具として鉢形で中央頂部に装飾のある辻金具（鉄地金銅張製？）と桧原からも出土している平面綫長カマボコ形の上半部をくびれさせた鉄製カコの枠金具が各1点ずつ図示されている。

以上の様な希少遺物を含んだ豊富な副葬品がこの古墳群において見られることは、被葬者がこれら特殊な品物入手できる立場にいたことを物語っている。古墳群の全体的な評価は吉留氏が述べるとおりであるが、金属器からもその優位性、特殊性を知ることができる。そして何より製鉄と関連する？鋸、特殊な轡など、鉄、馬といった当時の先端文化の存在を伺わせる遺物の出土は、これまでに解明されてきた油山丘陵周辺地域の状況に合致するものであり、今後福岡平野の古墳時代を考える上で重要な資料の一につなることは間違いないであろう。また桧原古墳群の位置する油山丘陵の東側には柏原古墳群、大牟田古墳群等、豊富な副葬品を有する一大群集墳が営まれており、これら周辺古墳群における未報告遺物の整理も含めて検討を進めることで、更に当該地域の群集墳造営集団の動向・位置付けがより詳しく行えるのと思われる。機会を見つけて作業を進めたい。

（参考文献）

- 青木豊昭 1990 「丸山4号墳と馬具等出土遺物について」『福井県考古学会誌』第8号 福井県考古学会
赤木剛 1993 「出土遺物について」『上寒之谷1号墳』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第16集 豊橋市教育委員会
宇野慎敏 1985 「鐵子考」「末永先生米寿記念獻呈論文集」「末永先生米寿記念会」
岡安光彦 1984 「いわゆる「蒸環の轡」について—環状鍍板付轡の型式学的分析と編年ー」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
群馬県古墳時代研究会（編）1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
斎藤弘 1986 「古墳時代の埴輪の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会
佐藤昭則・茂和敏（編）1988 「銀音山古墳群」那珂川町文化財調査報告書第17集 那珂川町教育委員会
沢田康夫（編）1983 「井河古墳群」那珂川町文化財調査報告書第10集 那珂川町教育委員会
関義則・宮代栄一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14 埼玉県立博物館
千賀久 1977 「奈良県出土の馬具集成」『平群三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書33冊 檜原考古学研究所
名本二六雄 1987 「愛媛県出土古墳時代の馬具」『遺跡』第30号 遺跡発行会
比佐陽一郎 1996 「三吉水浦1号墳出土の弓金具」「三吉水浦遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集 福岡市教育委員会
松尾昌彦 1985 「信濃の馬具」「東日本における古墳時代遺跡・遺物の基礎的研究」昭和57~59年度科学研究補助金（一般研究C）研究成果報告書
宮代栄一・白木原宣 1994 「佐賀県出土の馬具の研究」『九州考古学』第69号 九州考古学会
宮代栄一 1995 「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』第70号 九州考古学会
宮代栄一 1996 「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』第9号 肥後考古学会
山田元樹（編） 1990 「岬ヶ原古墳群」大牟田市文化財調査報告書第35集 大牟田市教育委員会

第5章 まとめ

1、福岡平野における群集墳と小集落の成立過程

松原古墳群において2基の古墳を調査した。また隣接して同時期の小集落を調査した。以下ではまとめて、それぞれの出現の背景と関係についてふれてみたい。

松原古墳群1次調査では、2基の古墳を調査した。1号墳は南北20m、東西15m以上の円墳で初期横穴式石室を内部主室としている。墳丘、石室ともに規模は比較的大きい。墓道は2号墳と同様に東側の谷添いの幹道に通じていたと予測した。石室内からは5人以上の埋葬が推定され、少量の副葬品が出土した。人骨はある時点に集骨されていた。古墳の築造や初葬の時期は、墳丘下部から出土した須恵器類からⅠ期新相～Ⅱ期（MT23～TK15）であり、ⅢA～ⅢB期（TK10～TK43）まで埋葬や墳墓儀礼がある。

2号墳は全長約40mの前方後円墳である。墳丘は前方部一段、後円部二段築成と復元される。一見すると前期古墳と惑う前方部の低さが注意される。こうした墳丘形態は、樋井川以西にいくつかの類例がある。城南区梅林古墳(27m)や西区谷上古墳(37m)、同石ヶ原古墳(56m)なども横穴式石室を主体としながら、後円部に対して低い前方部が造られている。こうした形態古墳の分布は、旧早良郡から糸島郡にかけて共通する地域的な特色の一つであると言える。松原2号墳の主体部は單室両袖の横穴式石室である。人骨は失われていたが、墓道と閉塞からみて最低3回の埋葬が予測された。石室内には副葬品や供献品が出土した。また、墳丘などから多くの遺物が出土した。遺物は三時期に分かれⅢA期～ⅢB期古相（TK10）が築造や初葬に関連すると考えられる。ⅢB期新相（TK43）からⅣ期（TK209）まで埋葬や墳墓儀礼があったとみられた。

本古墳群は、1号墳が6世紀初頭から6世紀後半までの経営であり、2号墳は6世紀中葉から7世紀初頭までの経営であったと考えられる。造営開始が早く、古墳の規模が比較的大きいこと、幹道を通じて関連していることなどから、樋井川流域では傑出した有力家長層の累代墓と考えられる。

松原遺跡群第3次調査では、古墳時代後期の小規模な集落を調査した。遺跡は古墳群の南約500mにある。丘陵先端の幅50m程の独立した地形に集落が営まれている。遺構は中央に空闊地をおき、南北に二分される。南側には比較的大きな住居と縦柱式の掘立柱建物がある。これに対し北側には小型住居が一部重複しながら集中している。また焼土壙が中央の空闊地に集中している。

集落は、僅かにⅡ期以前に通り得る資料があるものの、ⅢA期から本格的な集落形成が始まり、ⅢB期のうちに集落が縮小、Ⅳ期に入る頃には廃絶したと見られる。

本集落は一～三段階の変遷が予測できた。その間、一貫して堅穴住居と倉（掘立柱建物）と空闊地で構成されている。住居は空闊地を挟んで倉に隣接する同時期に大型住居1棟と、離れた小型住居2～3棟からなる。本集落の生産活動は空闊地の焼土壙などからみて農業生産とともに鉄生産に関与した集団を想定した。この集落は周囲に同時期の集落ではなく、まさに最小規模の経営単位であり、この時期に直系の親族集団を離れた傍系親族の分離化・独立による一単位と見た。こうした小集落内でも新たな家長の創出を見ることができる。

以上のように、松原古墳群では群集墳成立期の古墳を、また松原遺跡群では同時期の小集落を調査した。古墳時代後期になると各地で群集墳の形成が始まる。福岡平野と周辺地域でも、2000基を越える古墳の存在が予測されている。これらの群集墳は5世紀末から6世紀前半に築造が始まり、6世紀末頃には減少している。その成立過程は、月隈丘陵について一度ふれたことがあり(吉留1987)、その

後土井基司氏(1992)も博多湾岸を対象として検討を加えている。

今次の調査を経て注目したいのは、群集墳形成の当初に直径15m以上の比較的大きい古墳が少数造られていることである。これらは群集墳形成の契機となり、後出する古墳より大きい墳丘、石室を有している。その性格は新たに造墓権を獲得した家長層であり、この段階ではなお傍系親族による造墓権は認められていないと考えられる。分節化・独立した傍系親族による造墓の開始は次の段階である。ただし、その現れかたに地域差があることが注意される。例えば、月隈丘陵の古墳群である觀音浦、持田浦、堤ヶ浦古墳群などや早良平野に面する羽根戸古墳群、今宿平野の徳永～相原古墳群などは丘陵上に最初の古墳が造られ、これを中心に群集墳がつくられている。それに対して桧原古墳群を含む油山北麓地域では桧原、七隈、柏原A群、タカバン塚などが当初丘陵上に造られ、後出する倉瀬戸、大谷、西油山、柏原B群などは後背地である山麓部にやや離れて造られている。なお、月隈丘陵では当初の造墓以降、群集墳を形成することなく造墓活動を中断している例があることはすでに記した。造墓権の獲得以降、地域集団、家長層ごとにさまざまな動向があり、それが色濃く群集墳経営に現れていると言えよう。本地域の同時期の首長墓を含めた検討は紙数の都合もあり、別の機会にゆずりたい。

2、桶井川流域の大型古墳と首長系譜

今次調査によって桧原2号墳が、小規模な前方後円墳であることがわかった(Fig.61)。墳丘や、石室は荒らされ、古墳や被葬者の性格についての情報は少ない。ここでは周辺地域、とくに桶井川流域の前方後円(方)墳や、大型古墳を概観し、桧原2号墳の位置付けを行う。

1)京ノ隈古墳（

Fig.62-1)

京ノ隈古墳は城南区田島三丁目にあり、桶井川下流の西岸丘陵上に造られた前方後方墳である。1974年に発掘調査が行われた。調査以前に前方部を失っていたが、後方部辺約19m、全長約40mの規模と復元されている。墳丘は二段築成である。部分的に葺石の痕跡があり、後方部北側に造出し状の高まりがある。主体部は粘土構、

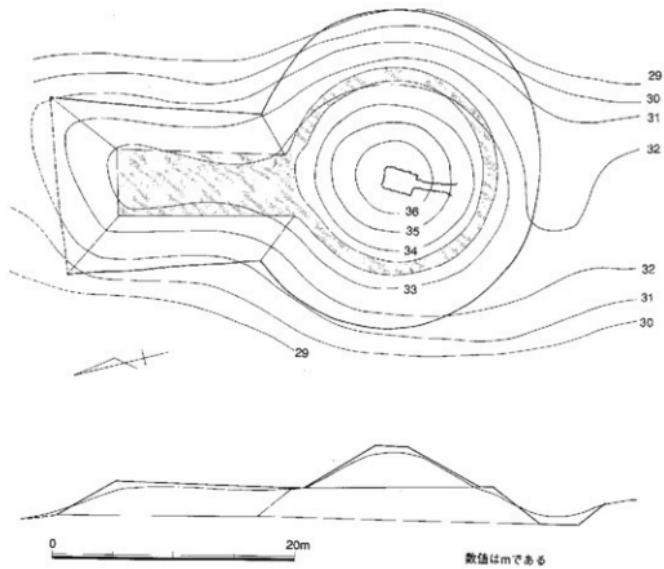


Fig.61 桐原2号墳墳丘復元図 (1/400)

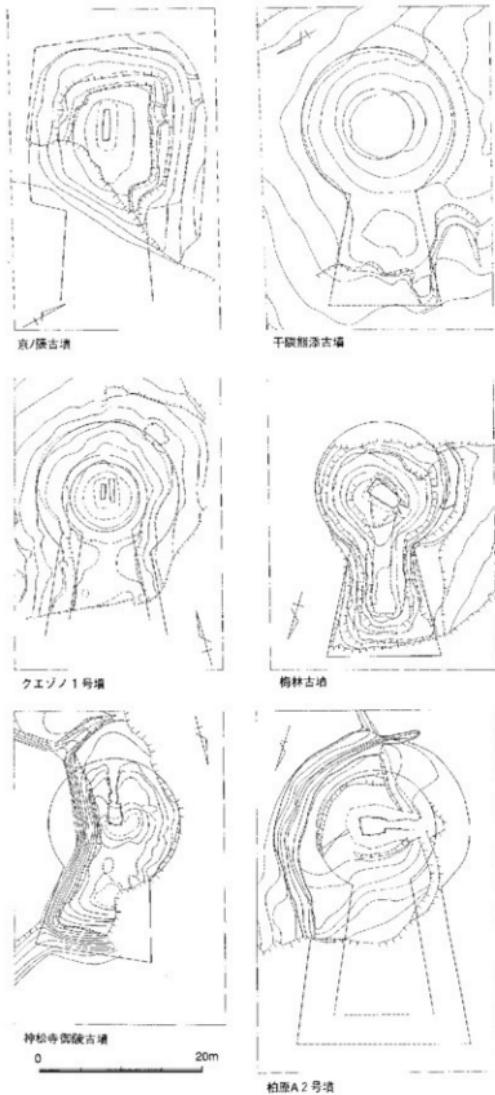


Fig.62 桶井川流域の前方後円(方)墳 (1/600)

割竹形木棺であり、刀、鎌、鋤先などの鉄製品の副葬があった。前方後円墳集成編年(近藤義郎編1989、以下“集成”とする)の3期から4期の築造と見られる。

2)千隈、千隈熊添古墳 (Fig.62-2)

千隈、千隈熊添古墳は城南区飯倉にあり、同じ丘陵上に300m離れて立地している。千隈古墳は墳丘側を道路で削られ明確でないが、径約24mの円丘部が残存していた。発掘調査は1979年におこなわれた。主体部は箱式石棺で内法で長さ1.8m、幅0.4mを計る。棺内は盗掘で荒らされていたが、碧玉製管玉、ガラス製小玉が検出された。この古墳の南側に壺墓、土壙墓2がある。調査者はこれらの埋葬遺構を墳丘下の土壙墓群と同時期とみている。しかし、この壺棺は布留式中段階のものであり、土壙墓からは璧玉製管玉、滑石製勾玉、白玉が出土している。玉類は藤井寺市野中古墳周辺内出土玉類や、博多37次SX-730出土玉類に類似し、5世紀前葉頃のものとみられる。したがって、墳丘南側の埋葬遺構は古墳構築以後に設けられた関連遺構であろう。千隈古墳は集成6期に位置付けられる。なお、墳丘下の埋葬遺構は分布が墳丘下に限られており。埋葬形態や朱の利用状態から弥生時代終末期～古墳時代初頭の区画(墳丘?)墓と推定できる。弥生時代の墳丘墓を古墳に取り込む例としては、ほぼ同時期の築造である西区糙波古墳がある。

千隈熊添古墳は、測量調査がおこなわれているのみであり詳細は不明である。測量報告では円墳2基(1、2号墳)が近接しているものと理解されている。その後、現地踏査を数回おこなった結果、形態と墳端ラインから前方後円墳ではないかと推定した。図は測

量図に踏査の記録を加え修正したものである。現時点では可能性の段階であるが、後円部約19m、くびれ部幅約9m、全長約33mと推定した。出土遺物はないが、墳形と後円部頂の平坦面が広いことから前期古墳であろうと考えている。

3) クエゾノ1号墳 (Fig.62-3)

クエゾノ1号墳は早良区梅林に所在し、1992年に発掘調査が行われた。丘陵頂部に立地する前方後円墳である（註1）。前方部を南に向いている。前方部上は近世以降の墓地として造成され、また墓地の南端の境界まで宅地造成がおこなわれ、墳端が失われている。また後円部は各所に土取り跡があり、永く竹林であったために、植根による土壤化が進み盛土や墳端が不明瞭となっている。図のように後円部径約18m、くびれ部幅約11m、前方部長約10m以上と復元した。埋葬主体は後円部頂に2基、前方部に3基ある。中心主体は後円部で第一主体の剣抜き式木棺と二次主体の組合式石棺がある。木棺は長さ2.8m程度であり盜掘されていた。石棺は内法が長さ1.4m、幅0.4mである。未盜掘で成人女性人骨1体と縁泥片岩製勾玉、管玉が出土した。くびれ部を中心に赤色顔料埋納土師器小壺、陶質土器類等が出土している。集成6期に位置付けたい。

4) 梅林古墳 (Fig.62-4)

梅林古墳は城南区梅林にあり、クエゾノ1号墳の北西800mの位置にある。飯倉丘陵の中央部に立地する。西側には早良平野が見渡せることから、樋井川流域と言うより、早良平野の首長墓と見るむきもあるろう。1989年に発掘調査が行われ、その後保存整備された。墳丘は二段築成の前方後円墳であり、全長約27m、後円部径15m、くびれ部幅7~8mと復元されている。特異な点は前方部に対し後円部が倍の高さであり、一見すると前期古墳を思わせる形態となっている。主体部は初期横穴式石室であり、室内から豊富な副葬、供獻品が出土した。築造はⅠ期（TK47）であり、Ⅱ期（MT15）までの追葬が予測された。集成8期にあたる。

5) 神松寺御陵古墳 (Fig.62-5)

神松寺御陵古墳は城南区片江にあり、片江川を見おろす丘陵頂部に立地している。1977年に発掘調査が行われた。周囲に古墳はなく、単独墳である。神社の設置や土取りなど墳丘の遺存は悪い。全長20m、後円径15m、くびれ部幅10m前方部幅15mと復元された。墳丘下の旧地表面でいわゆる「内周溝」が確認された。前方後円墳での例としては、春日市日拝塚古墳がある。主体は後円部中央の副室両袖の横穴式石室である。石室材として石棺材の転用を含む板材が平積み使用され、占式の特徴をもつ。比較的豊富な副葬、供獻品があり、須恵器にはⅢA~Ⅳ期の幅がみられた。築造は集成9期と考えられる。

6) 柏原A2号墳 (Fig.62-6)

柏原A2号墳は南区柏原にあり、樋井川最上流域の比高差の少ない河岸段丘上に立地する。1979~1984年に発掘調査が行われた。柏原古墳群中ではA1号墳と共に最も低い位置に立地する古墳である。古墳は開田のための削平でほとんどの墳丘は失われ、石室部分と周溝の一部が遺存している。石室の東側の周溝の状態から前方後円墳と判断された。周溝の屈曲部をくびれ部として後円径20~23m、全長30~40mと復元されている。主体は单室両袖の横穴式石室であり、副葬品、供獻品を多く出土した。築造時期はⅢb期すなわち集成10期に位置付けられよう。なお、隣接するA1号墳は墳形は不明であるが、A2号墳より大きな横穴式石室を主体とし、径22m以上の墳丘が推定されている。出土した須恵器は同じⅢb期であるが、やや古い様相をもつことからA2号墳に先行する古墳と見られている。

7) その他の古墳 (Fig.63)

桶井川流域の大型古墳は、この地域が福岡都市圏の拡大による開発行為が早かったために、知られていない。それでも、最近幾つかの例が知られるようになった。まず福岡城内、鴻臚館跡付近の古墳がある。福岡城は桶井川河口部の東側丘陵先端付近にあたる（註2）。1989～1990年の鴻臚館跡第3～6次調査では古代の包含層中から銅鏡片、銅鏡、ガラス玉等が出土している。銅鏡の鏡背に赤色顔料、布痕が残り、本来古墳の副葬品であったものと推定された。丘陵上にあった古墳が鴻臚館造営により破壊されたものと見られた（山崎純男1991）。墳丘規模などは不明であるが、副葬品の内容からこの地域では代表的古墳であり、2～3期に位置つけられよう。また福岡城に近くの中央区桜坂から警固では、山崎純男氏により近年数基の前方後円墳が発見されている（註3）。茶臼塚古墳は全長60～70m、後円部径約40mの前方後円墳である。茶臼山古墳も同規模とみられる。このほか、貝原益軒による『筑前国統風土記』(1703年)には、このほか壺形埴輪の存在を予測させる「丸山」の記載があり、2基の前方後円墳以外にさらに周辺に古墳が存在することが予測される。現時点でこれらの古墳の時期や性格を知る資料はない。



Fig.63 桶井川流域の主要古墳分布図 (1/50,000)

このほかに樋井川水系上流域の油山山麓では、群集墳内や隣接して比較的大型の古墳が見られる。城南区七隈の七隈5、6号墳（塩屋1985）は径20mを越える円墳でありここに含めてみた。

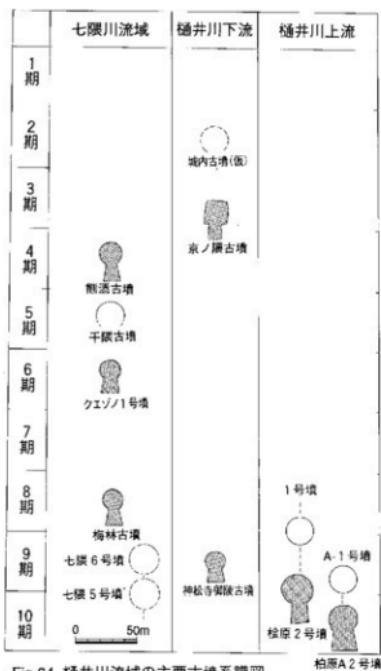
以上をふまえて、樋井川流域の大型古墳をみると、古墳の規模に大きな変化がなく、樋井川下流、上流、七隈川とおおきく三つのグループに分かれる。また幾つかの時期に欠落があるものの、流域全体として変遷を辿るように推移している（Fig.64）。これから本流域にひとつの首長系譜を推定することができる。ただし分布や松原、柏原古墳群の様相でみると、その系譜は一系統ではなく、小地域の有力層を輪番的に推移するあり方と見ることができよう。

【註】

1)調査者は「版築状の盛り土や埴輪、葺石などの外部施設」の有無を前方後円墳定型化の基準ととらえて、クエゾノ1号墳を「定型化はしていないが前方後円墳を意識した古墳」と位置づけている。極めて曖昧な規定であるが、北部九州では版築、埴輪、葺石を合わせても古墳はほとんど皆無と言ってよく、近畿地域ですら要素を満たすものは少ない。基本的な墳形、主体部、儀礼などの共通性を除くと、古墳は地域毎に多様な様相を示している。重要な点は、それぞれの地域の中であり方と普遍性の存在である。著者は前方後円墳を意識した古墳など存在しないと考えている。なお、報告書では、現況の地勢を生かし全長22~25m、後円部径14m程度、墳丘頂高2.5m程度とみている。これに対して著者は、くびれ部の認定、段築面から本文のような復元案を考えている。

2)現在の樋井川は七隈川と合流後、北西に向きを変え、鳥飼付近の砂丘を横切り百道浜で博多湾に注いでいる。この流路は近世初期に黒田藩の福岡城、ならびに城下町造営にあたり付け直したものである。それ以前は、草香江、大濠をぬけ、福岡城西側の荒津から博多湾に注いでいた（下山ほか1991）。

3)朝日新聞1996年7月13日福岡版夕刊による。



【参考文献】

- 田中良之1995「古墳時代親族構造の研究」柏書房
- 都出比呂志1989「日本農耕社会の成立過程」岩波書店
- 下山正一、磯望、野井英明、高塚瀬、小林茂、佐伯弘次1991「福岡市鳥飼低地の海成第四系と更新世後期以降の地形形成過程」『地球惑星科学』17-1 九州大学理学部
- 山崎純男編1991「鴻盧館跡」発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集 福岡市教育委員会塩屋勝利1985「七隈古墳群の調査」「鳥越・七隈古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第124集 福岡市教育委員会
- 山崎純男編1976「京ノ原古墳」段谷地所株式会社
- 山崎純男編1978「神松寺遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 福岡市教育委員会
- 山崎純男編1986「柏原遺跡群II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集 福岡市教育委員会
- 濱石哲也、菅波正人、林田憲三1991「梅林古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集 福岡市教育委員会
- 常松幹雄1995「クエゾノ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第420集 福岡市教育委員会
- 土井基司1992「横穴式石室から見た群集墳の諸相」『九州考古学』67号 九州考古学会
- 吉留秀敏編1987「堤ヶ浦古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集、福岡市教育委員会

Fig.64 樋井川流域の主要古墳系譜図

(時期区分は「集成」編年による)

Tab.4 3次調査出土須恵器・土師器観察表観察表(2)

(数値はcm)

Fig.No.	古跡番号	器種	已上塗	口径	底直径	高さ	保有部位	焼付率	焼成	色調	地土	
54-36	00082	杯身	灰	SC04	-	13.8	-	44	口縁破片	赤	やや良 灰青色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む
54-31	00083	杯身	灰	SC04	-	13.6	-	36	口縁破片	1/4	やや良 灰青色	1.5~1mm大砂粒わずかに含む
54-32	00084	杯身	灰	SC04	-	13.0	-	-	口縁破片	-	やや良 灰色	0.5mm大砂粒わずかに含む
54-33	00085	杯身	灰	SC04	11.4~11.8	-	-	28	口縁破片	2/3	やや良 にふい系褐色	0.5~1mm大砂粒多く含む
54-34	00078	甕	土	SC04	-	16.0	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい赤褐色	0.5~1mm大砂粒多く含む
54-35	00079	甕	灰	SC04	-	15.6	-	-	口縁破片	-	やや良 黄褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む
54-36	00080	甕	土	SC04	-	22.0	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~2mm大砂粒少々含む
54-37	00077	甕	灰	SC04	-	-	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む
54-38	00075	甕	土	SC04	16.6~17.0	-	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい赤褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む
54-39	00076	甕	灰	SC04	-	-	-	-	断面のみ	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~3mm大砂粒多く含む
54-40	00083	杯身	灰	SC-1	-	15.0	-	53	口縁破片	1/4	やや良 にふい灰褐色	精良
54-41	00096	甕	土	SC11	-	15.8	-	-	口縁~底部	1/4	やや良 黄褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む
54-42	00139	手づくね	土	SC11	-	-	21~30	完形	-	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む
54-43	00088	手づくね	土	SK13	24	-	25	完形	1/2	やや良 にふい黄褐色	0.5~1mm大砂粒多く含む	
54-44	00087	甕	土	SK17	-	16.0	-	-	断面~底部	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む
54-45	00141	甕	土	SK57	13.0	-	-	-	口縁破片	1/10	やや良 にふい黄褐色	0.5mm大砂粒少々含む
54-46	00140	甕	土	SK57	13.0	-	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~1mm大砂粒多く含む
53-47	00115	杯底	灰	包含層	-	11.6	-	-	口縁破片	-	やや良 灰褐色	精良
55-48	00090	杯底	灰	包含層	-	14.0	-	48	全体	-	やや良 青灰色	0.5mm大砂粒わずかに含む
55-49	00089	杯底	灰	包含層	-	15.0	-	28	口縁破片	1/12	やや良 青灰色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む
55-50	00094	杯身	灰	包含層	-	12.4	-	-	口縁破片	1/6	やや良 黒褐色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む
55-51	00114	杯身	灰	包含層	-	13.2	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい褐色	精良
55-52	00116	杯身	灰	包含層	-	13.8	-	38	-	1/2	やや良 灰褐色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む
55-53	00097	杯身	灰	包含層	-	14.6	-	-	-	1/4	やや良 青灰色	0.5~2mm大砂粒わずかに含む
55-54	00092	杯身	灰	包含層	-	14.6	-	43	-	1/12	やや良 青灰色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む
55-55	00113	杯身	灰	包含層	-	16.0	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい褐色(内)にふい褐色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む
55-56	00093	杯身	灰	包含層	-	13.5	-	-	口縁破片	1/6	やや良 青灰色	0.5~2mm大砂粒多く含む
55-57	00096	杯身	灰	包含層	-	16.4	-	56	-	-	やや良 (外)にふい褐色(内)青灰色	0.5~2mm大砂粒多く含む
55-58	00095	杯身	灰	包含層	-	15.8	-	33	-	1/4	やや良 青灰色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む
55-59	00110	杯底	灰	包含層	-	11.5	-	34	口縁破片	-	やや良 赤褐色	0.5~1mm大砂粒少々含む
55-60	00091	杯身	灰	包含層	-	14.2	-	41	口縁~底部	1/5	やや良 灰褐色	0.5~1mm大砂粒多く含む
55-61	00102	甕	灰	包含層	-	-	-	-	-	-	やや良 青灰色	0.5~2mm大砂粒わずかに含む
55-62	00100	杯身	土	包含層	-	11.8	-	53	1/3	やや良 にふい褐色	0.5~1mm大砂粒少々含む	
55-63	00101	杯身	土	包含層	-	10.8	-	56	1/4	やや良 にふい褐色	0.5~1mm大砂粒わずかに含む	
55-64	00111	杯身	土	包含層	-	12.2	-	-	1/8	やや良 黄褐色	精良	
55-65	00112	杯身	土	包含層	-	15.8	-	-	1/8	やや良 褐色	0.5~1mm大砂粒少々含む	
55-66	00109	甕	土	包含層	-	11.8	-	-	1/6	やや良 にふい黄褐色	0.5~1mm大砂粒少々含む	
55-67	00107	杯身	土	包含層	-	12.8	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい褐色	0.5~1mm大砂粒少々含む
55-68	00103	杯身	土	包含層	-	16.4	-	-	口縁破片	1/8	やや良 にふい褐色	0.5~3mm大砂粒多く含む、底端は少々含む
55-69	00104	甕	土	包含層	-	14.2	-	-	口縁破片	1/8	やや良 にふい黄褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む、底端は少々含む
55-70	00105	甕	土	包含層	-	16.8	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい褐色	0.5~1mm大砂粒少々含む
55-71	00106	甕	土	包含層	-	16.0	-	-	-	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~1mm大砂粒多く含む
56-72	00108	甕	土	包含層	-	17.5	-	-	-	1/6	やや良 にふい黄褐色	0.5~2mm大砂粒多く含む、底端は少々含む
56-73	00098	甕	土	包含層	-	20.4	-	20.0	-	1/2	やや良 にふい褐色	0.5~1mm大砂粒少々含む
56-74	00099	甕	土	包含層	-	22.3	-	-	口縁破片	-	やや良 にふい黄褐色	0.5~3mm大砂粒多く含む、底端は少々含む

Tab.5 1号墳出土玉類觀察表（1）

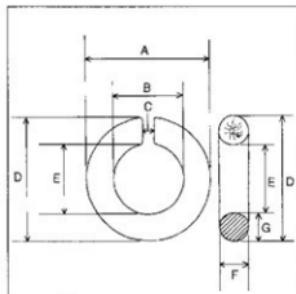
Fig.No.	立派番号	器種	表面色調	出土遺物	尺寸(mm × mm)	高さ(mm)	口径(mm × mm)	備考
13-6	10001	管(ト)	白玉	1号墳No36	55×85	25.0	35×10	欠損
13-1	10022	管(ト)	白玉	1号墳No17	70×85	24.5	30×10	完形
13-2	10023	管(ト)	白玉	1号墳No19	70×70	23.5	35×10	完形
13-3	10004	管(ト)	白玉	1号墳No26	70×65	26.5	35×10	完形
13-4	10005	管(ト)	白玉	1号墳No18	75×70	25	25×10	完形
13-5	10006	丸玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No24	90×90	25	20×20	完形
13-6	10007	丸玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	95×90	20	15×10	完形
13-7	10008	丸玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No25	80×80	15	20×15	完形
13-8	10009	丸玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No21	75×70	5.0	10×15	完形
13-9	10010	丸玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No26	70×70	5.0	20×15	完形
13-10	10011	丸玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No22	65×55	4.5	20×10	完形
13-11	10012	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳No15	50×45	3.0	12.5×10	完形
13-12	10013	小玉	ガラス(緑)	1号墳石室床面	50×45	3.0	20×15	完形
13-13	10014	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室床面	50×40	3.5	20×15	完形
13-14	10015	小玉	ガラス(緑)	1号墳No4	45×40	1.5	10×10	完形
13-15	10016	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	50×45	3.0	15×10	完形
13-16	10017	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳No27	40×35	3.0	20×15	完形
13-17	10018	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室床面	40×35	2.5	10×10	完形
13-18	10019	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	40×35	1.5	25×10	完形
13-19	10020	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室床面	50×40	3.0	20×15	完形
13-20	10021	小玉	ガラス(緑)	1号墳石室床面	40×35	2.5	12.5×10	完形
13-21	10022	小玉	ガラス(緑)	1号墳石室床面	40×35	2.5	15×10	完形
13-22	10023	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	40×35	3.0	15×10	完形
13-23	10024	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	40×35	2.0	10×10	完形
13-24	10025	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室	35×35	3.5	10×10	完形
13-25	10026	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室床面	35×35	2.5	12.5×10	完形
13-26	10027	小玉	ガラス(緑)	1号墳No.2	35×35	2.5	10×10	完形
13-27	10028	小玉	ガラス(青緑)	1号墳石室	35×35	2.5	15×10	完形
13-28	10029	小玉	ガラス(緑)	1号墳石室床面	35×30	3.5	12.5×10	同色のスジ有
13-29	10030	小玉	ガラス(白面した黄緑)	1号墳石室	30×30	1.5	10×10	完形
13-30	10031	小玉	ガラス(緑)	1号墳石室床面	40×30	3.0	10×10	完形
13-31	10032	小玉	ガラス(緑)	1号墳玄室床面A部	40×30	3.0	10×10	完形
13-32	10033	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室床面	30×30	2.0	15×10	完形
13-33	10034	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室床面	40×30	3.5	10×10	完形
13-34	10035	小玉	ガラス(青緑)	1号墳No.2	35×30	3.0	10×10	完形
13-35	10036	小玉	ガラス(緑)	1号墳石室	25×30	2.5	10×10	完形
13-36	10037	小玉	ガラス(緑)	1号墳No.7	30×30	1.5	10×10	全縁に縦溝など凹凸が入る
13-37	10038	小玉	瑪瑙(赤)	1号墳玄室床面B部	30×30	2.0	10×10	完形
13-38	10039	小玉	ガラス(スカイブルー)	1号墳石室床面	35×30	3.0	10×10	完形
13-39	10040	小玉	ガラス(緑)	1号墳玄室床面	30×30	2.5	10×10	完形
13-40	10041	小玉	ガラス(緑)	1号墳玄室床面A部	35×30	2.5	10×10	完形
13-41	10042	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×30	1.0	12.5×12.5	欠損
13-42	10043	小玉	ガラス(黄緑)	1号墳石室床面	35×30	2.0	10×10	完形
13-43	10044	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×30	1.5	10×10	完形
13-44	10045	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳玄室床面A部	30×30	1.0	10×10	完形
13-45	10046	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳玄室床面A部	30×25	2.0	0.5×0.5	完形
13-46	10047	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	25×25	1.5	0.75×0.75	完形
13-47	10048	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No.30	30×25	1.5	10×10	欠損
13-48	10049	小玉	瑪瑙(赤)	1号墳石室床面	30×25	2.0	10×0.75	完形

Tab.5 1号出土玉類観察表（2）

Fig.No.	登録番号	名 称	素材(色調)	出土遺物	幅mm × 高さmm	高さ(mm)	口径(mm × mm)	成 分	備 考
13-48	10050	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×25	15	10×10	欠損	
13-50	10051	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	20×20	15	6.5×6.5	完形	
13-51	10052	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	25×20	20	10×10	完形	
13-52	10053	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	26×20	17.5	6.7×6.75	完形	
13-53	10054	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	26×20	15	6.7×6.75	完形	
13-54	10055	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面A	15×15	15	6.7×6.75	完形	
13-55	10056	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×25	15	10×10	欠損(1/2)	
13-56	10057	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×25	15	10×10	欠損(3/4)	
13-57	10058	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No.23	30×30	10	10×10	欠損(3/4)	
13-58	10059	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×30	15	10×10	欠損(1/2)	
13-59	10060	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×30	10	10×10	欠損(1/4)	
13-60	10061	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×30	15	10×10	欠損(1/2)	
13-61	10062	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳石室床面	30×30	10	10×10	欠損(1/2)	
-	10064	丸玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳No.28	-	-	-	-	未測定
-	10065	小玉	ガラス(コバルトブルー)	1号墳不明	-	-	-	-	未測定

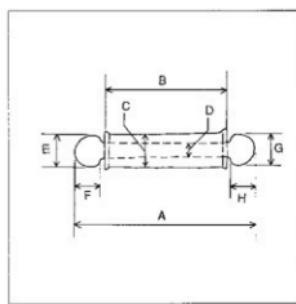
Tab.6 2号出土玉類観察表

Fig.No.	登録番号	名 称	素材(色調)	出土遺物	幅mm × 高さmm	高さ(mm)	口径(mm × mm)	成 分	備 考
23-3	10063	豆玉	碧玉(乳白色)	区土器B群C-609No.8	70×70	-	3.0×3.0	欠損	2号墳



Tab.7 古墳出土装身具計測表

Fig.No.	出土古墳	資料名	材質	A	B	C	D	E	F	G
14-1	1号墳	鏡	青銅	67.30	58.70	-	55.00	56.20	260	420
14-2	1号墳	鏡	青銅	68.30	60.00	-	67.20	58.50	250	400
15-3	1号墳	耳環	銀?	24.00	15.79	0.09	22.00	14.90	4.60	460
15-4	1号墳	耳環	銀?	24.00	15.50	0.03	25.30	15.70	5.00	420
15-5	1号墳	耳環	青銅	25.70	17.39	3.80	19.50	18.30	1.80	180
33-1	2号墳	耳環	銅	27.20	20.29	1.00	28.00	20.80	3.00	330
33-2	2号墳	耳環	青銅	27.70	21.70	-	28.50	22.20	3.20	350



Tab.8-1 古墳出土武器類計測表（弓金具）

Fig.No.	出土古墳	A	B	C	D	E	F	G	H
15-6	1号墳			5.40					
15-7	1号墳			7.00	3.00	6.20	5.40		
34-11	2号墳	35.75	24.50	5.19		8.50	5.70	8.40	7.75
34-12	2号墳			5.10	2.45	8.35	4.80		
34-13	2号墳	35.20	21.35	5.35		7.95	6.00	8.70	7.95
34-14	2号墳	36.40	23.29	5.25		7.30	5.90	6.69	7.75
34-15	2号墳	37.60	25.89	5.15		6.80	5.90	6.65	7.30

桧原遺跡

図版



1.



2.

1. 桧原遺跡遠景（油山中腹から）
2. 桧原遺跡3次調査区遠景（西から）



1.



4.



2.



5.

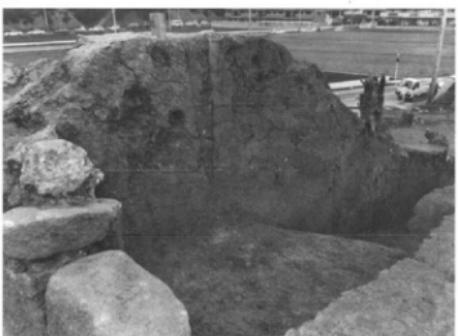


3.

1. 1号墳調査前近景（南から）
2. 1号墳調査前近景（北から）
3. 2号墳調査前近景（東から）
4. 1号墳から2号墳を見る
5. 2号墳から1号墳を見る



1.



2.



3.



4.



5.

1. 墳丘西側断面（北から）
2. 墳丘北側断面（南東から）
3. 墓道土層断面（南から）
4. 北側墳丘断面（北東から）
5. 前庭～墓道検出状態（南から）



1.



2.



3.

1. 石室全景 (南から)
2. 地山整形面状態 (南から)
3. 石室墓壙 (北から)



4.



5.



6.



7.

4. 墳丘内遺物出土状態 (須恵器)
5. 石室内遺物出土状況 (釧、鎌)
6. 石室内遺物出土状況 (耳環、玉)
7. 石室内遺物出土状況 (人骨)



1.



4.



2.



5.



3.



6.

1. くびれ部調査状況（北から）
2. 墳丘横軸断面（南から）
3. 墳丘西側断面（南から）
4. 墳丘東側断面（南から）
5. 前庭～墓道縦断面（南西から）
6. 墓道横断面（南から）



1.



4.



2.



5.



3.



6.

1. 石室全景（北から）
2. 石室全景（南から）
3. 石室東側壁（北東から）

4. 石室西側壁（南東から）
5. 美道部（上から）
6. 美道部前面（南から）



1.



2.



3.



4.



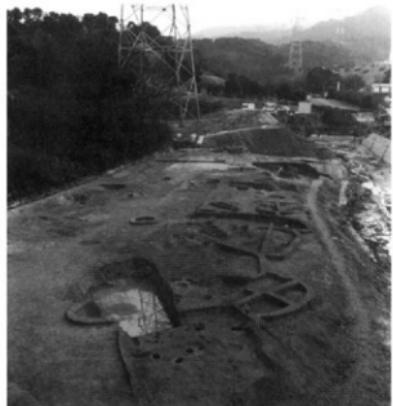
5.



6.

1. 閉塞施設（南から）
3. 旧地表面SX01（東から）
5. 遺物B群出土状態（南から）

2. 閉塞施設（上から）
4. 遺物A群出土状態（南から）
6. 遺物C群出土状態（東から）



1.



2.



3.



4.

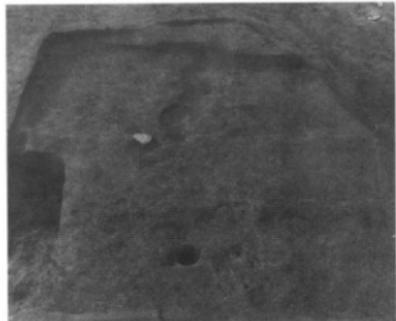


5.



6.

1. 調査区全景（北から）
3. 調査区北側遺構（北から）
5. 調査区南側水田遺構（西から）
2. 調査区全景（南から）
4. 掘立柱建物検出状態（北東から）
6. 水田遺構（南から）



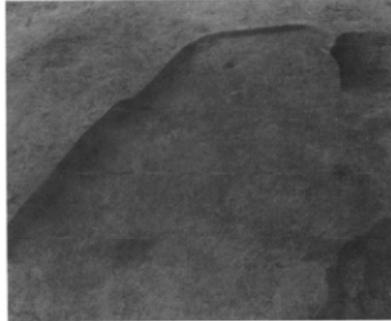
1.



2.



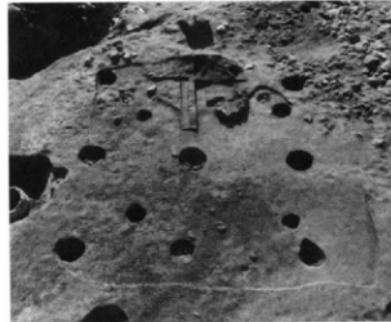
3.



4.

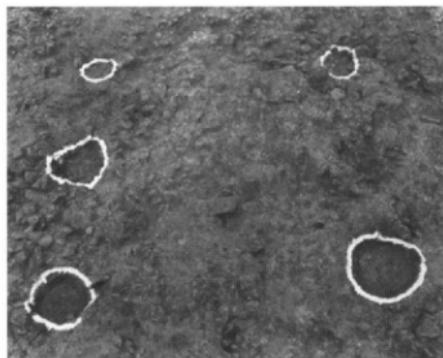


5.

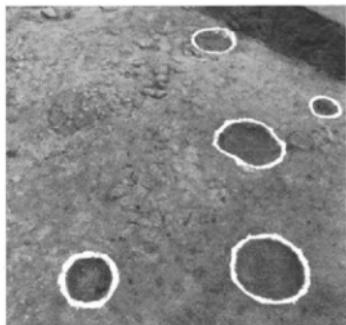


6.

1. 竪穴住居跡SC01 (東から)
3. 竪穴住居跡SC03 (北西から)
5. 竪穴住居跡SC11 (南から)
2. 竪穴住居跡SC02 (北から)
4. 竪穴住居跡SC04 (東から)
6. 竪穴住居跡SC18 (東から)



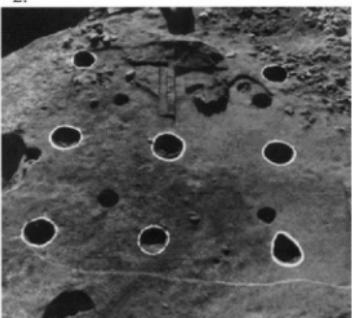
1.



2.



3.



4.



5.

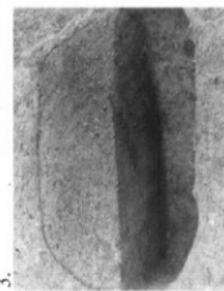
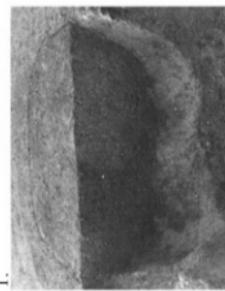
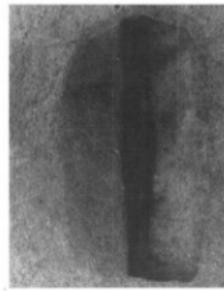
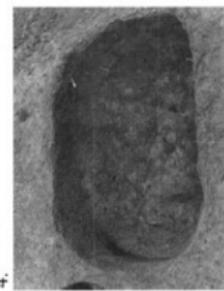
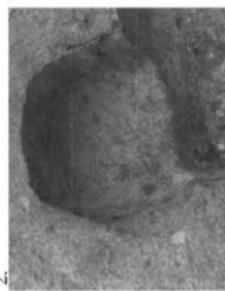
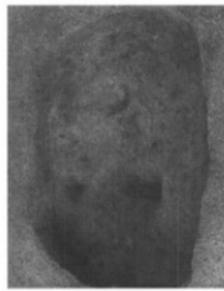
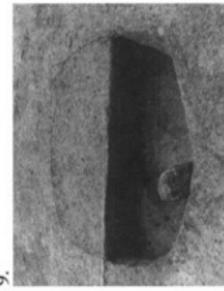
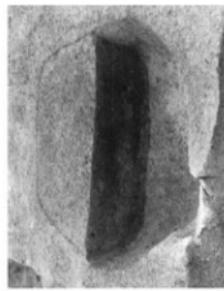
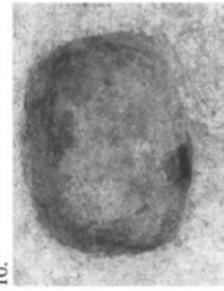


6.

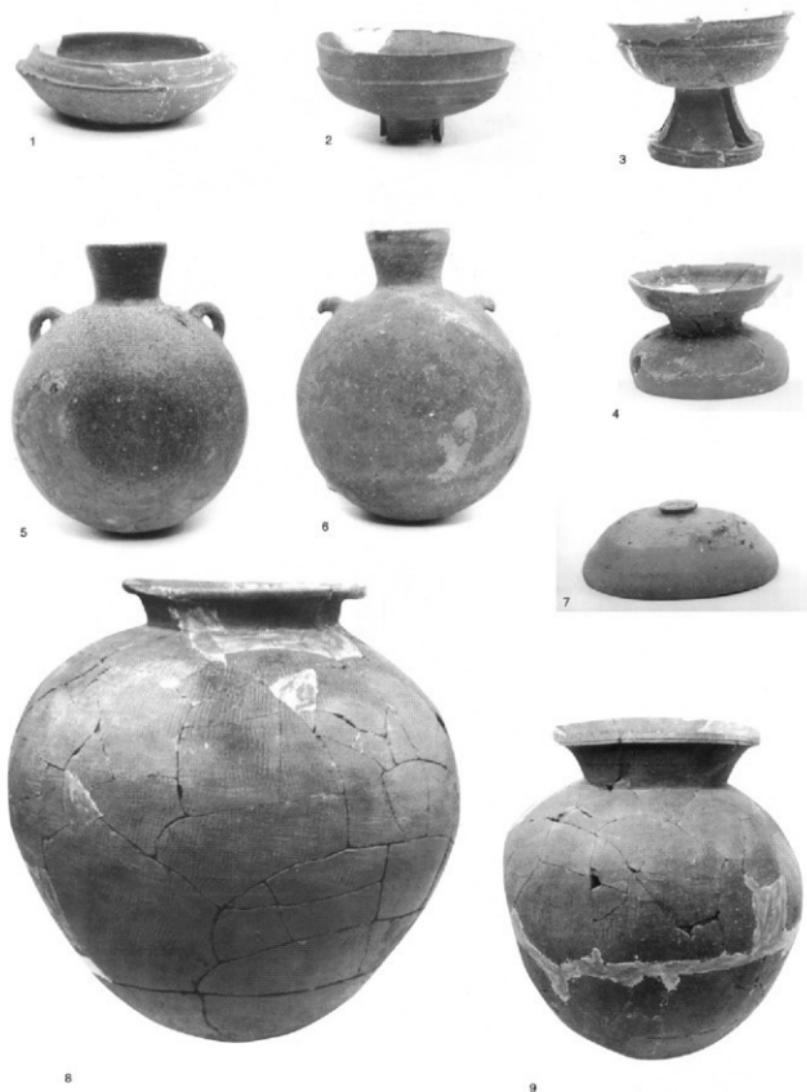


7.

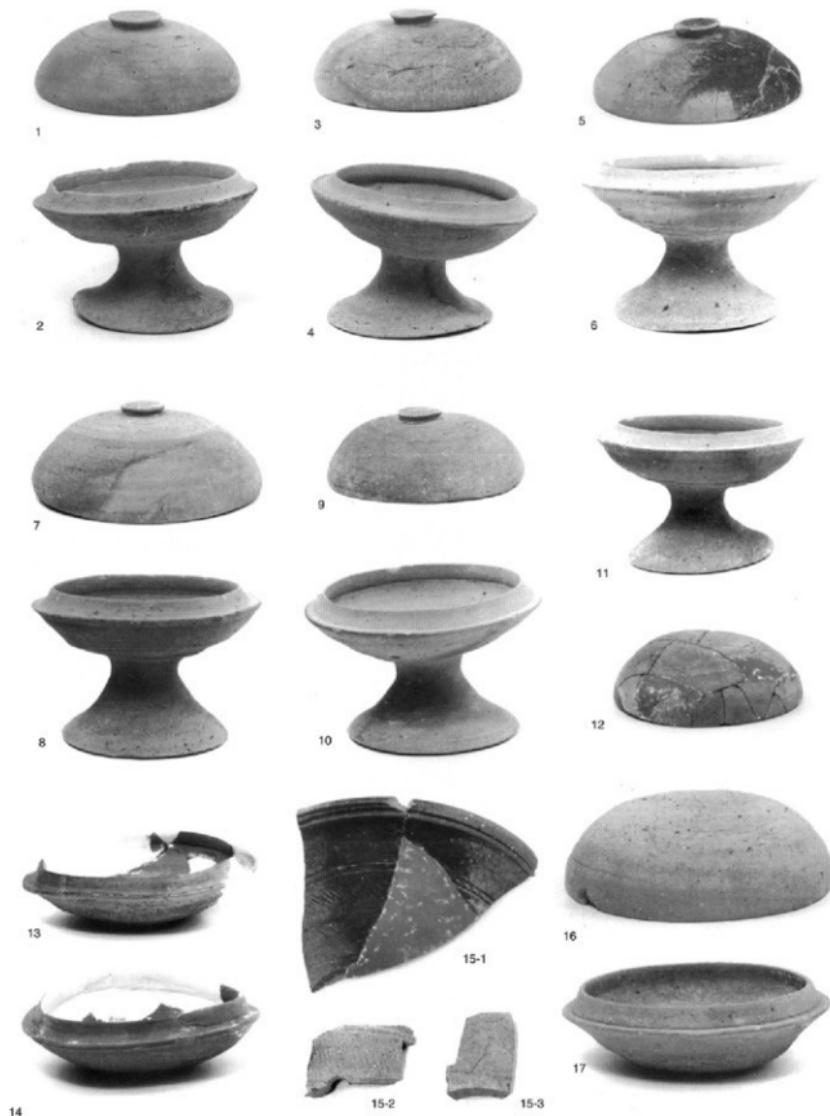
1. 挖立柱建物SB19（北西から）
2. 挖立柱建物SB20（南から）
3. 溝SD10全体（北から）
4. 挖立柱建物SB21（東から）
5. 溝SD14断面（南東から） 6. 土製人形出土状態
7. 土製人形



1. 土壌SK05断面 (北から)
2. 土壌SK05 (南から)
3. 土壌SK06断面 (東から)
4. 土壌SK06 (東から)
5. 土壌SK07断面 (北から)
6. 土壌SK07 (北車から)
7. 土壌SK08断面 (南東から)
8. 土壌SK08 (北東から)
9. 土壌SK09断面 (北から)
10. 土壌SK09 (南から)
11. 土壌SK12断面 (東から)
12. 土壌SK12 (車から)



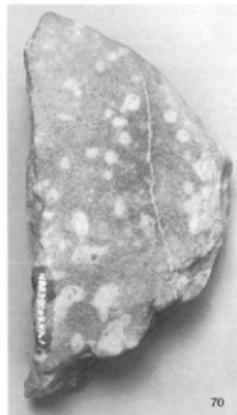
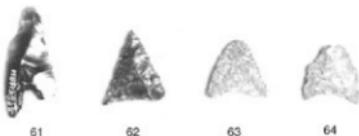
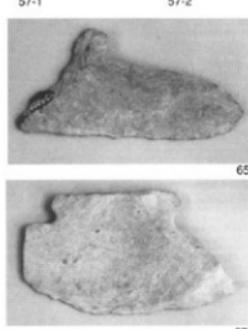
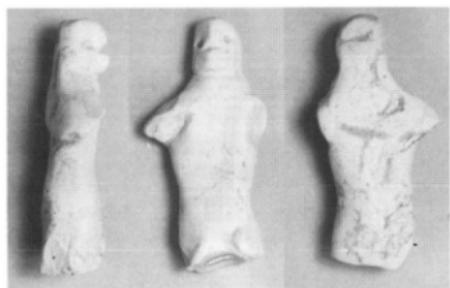
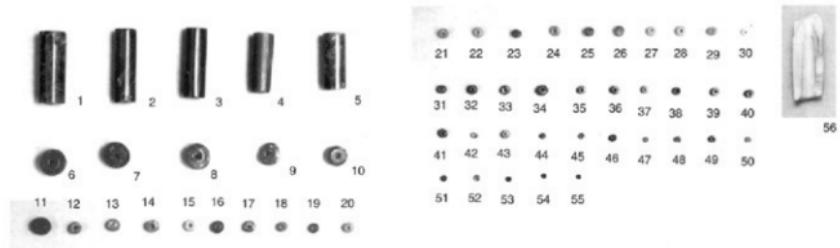
桧原5、1、2号墳出土須恵器（1）



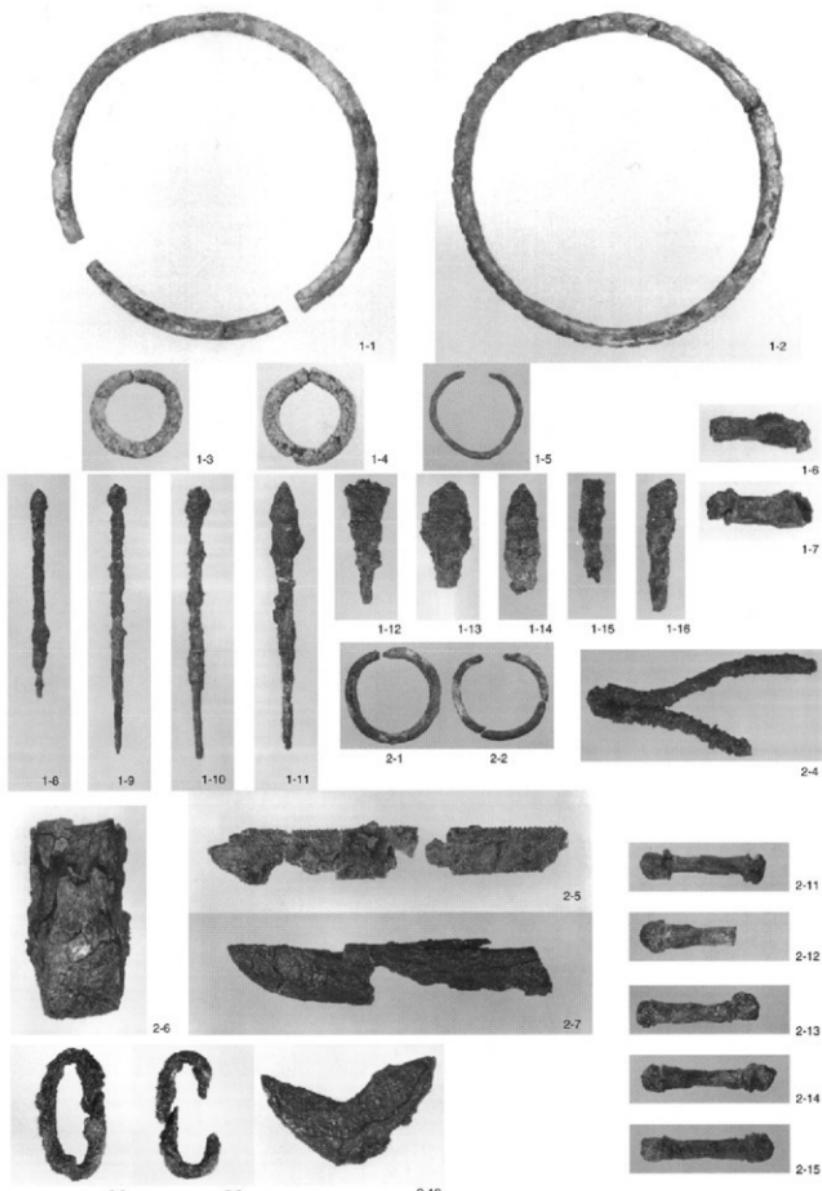
桧原2号墳出土須恵器（2）



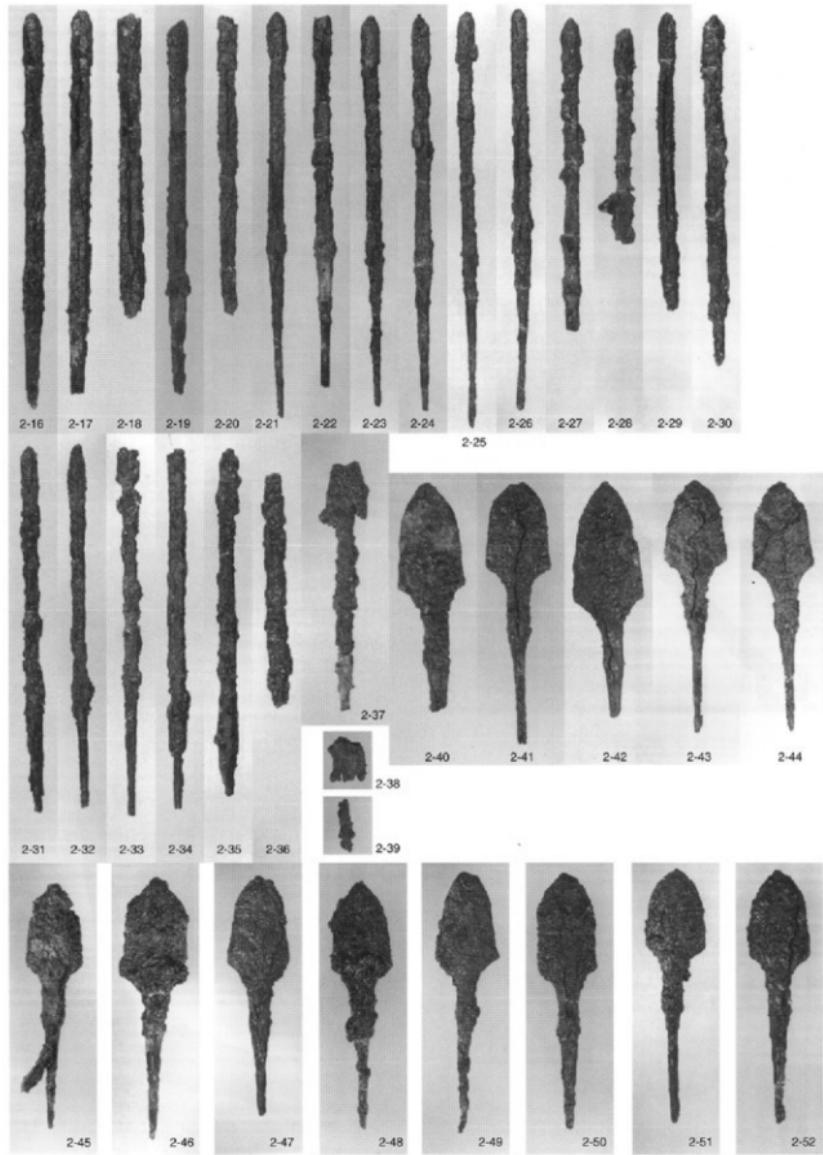
桧原2号墳(3)、桧原3次調査出土須恵器・土師器



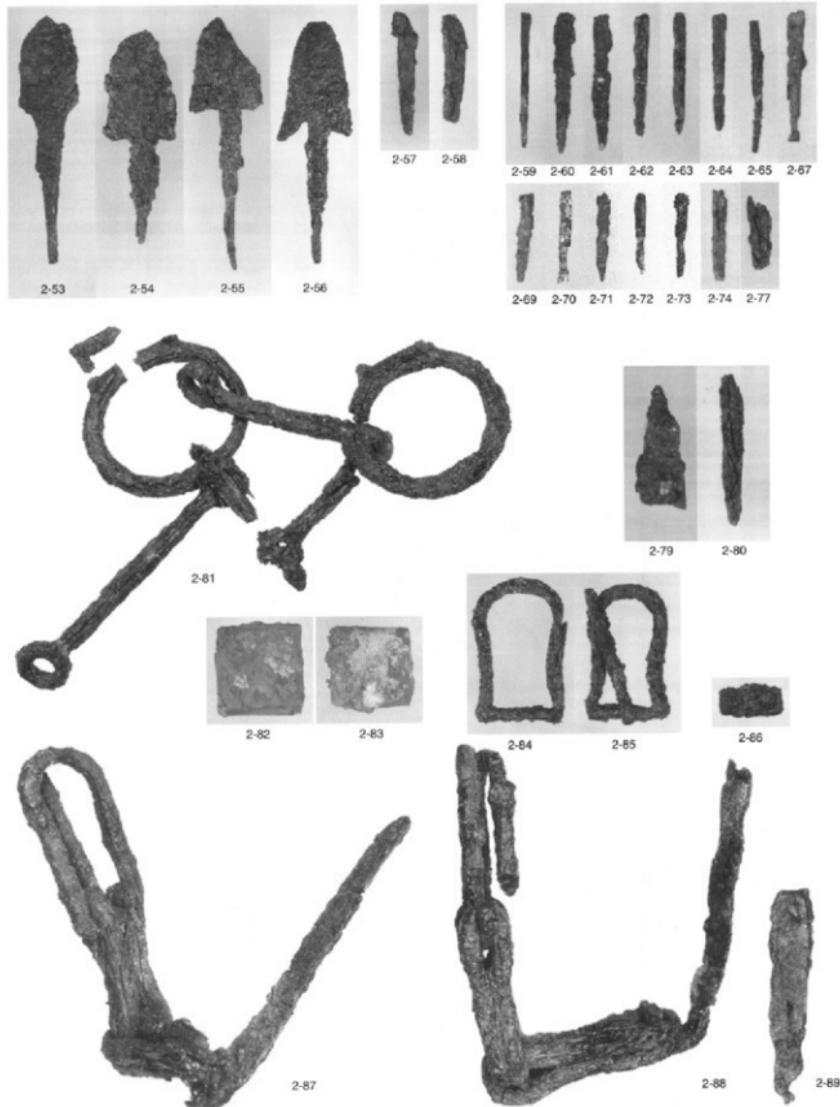
松原1・2号墳、松原3次調査その他出土遺物



松原 1、2 号墳出土金属器（1）



桧原2号墳出土金属器（2）



桧原 2 号墳出土金属器（3）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第540集

桧原遺跡

桧原古墳群第1次・桧原遺跡群第3次調査報告書

1997(平成9)年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 松井印刷株式会社

福岡市博多区板付6丁目9-2